

第九 快樂は倫理の標準と爲り

得べきや否や

今日は快樂は倫理の標準となり得べきや否やと云ふ問題を論ずる考でありませぬ、今我々の問題とする處は快樂と云ふものと倫理との關係に就て議論のある諸點であります、是れまでの成行きを爰で繰返へすことは素より出来な、亦た出来ても必要は無からうと思ふ、それで直ちに其問題に入つて快樂は或る意味に於て倫理の標準となることか出来るかどうか、若し或る意味に於て標準と爲ることが出来ると思ふれば、どう云ふ意味に於て出来るかを論じやうと思ふのであります。

それに就いては倫理學と云ふものを見やうに因つて其解決が餘程違つて來るであらうと思ふ、素より倫理學は人の爲す可き道即ち人道學と云うても善いやうな、極廣い道を論ずるものである、コト漠然云うて置けば其範圍

は廣いけれども實際今日我々が倫理と云うて居るものは宗教と并立して人の行を規定するものである、して見れば倫理學と云ふものは人道全體を包含したものでない人道の或る一部分に限つたものである、若し倫理が人道全體を包含して宗教を無用に爲して了ふのであるならば其倫理は誰れが説いた倫理であるか、勿論西洋の倫理よりは東洋の倫理は包含的の意味から言へば少し廣いやうで殊に儒教の如きはそれで以て人道全體を包含したものでして別に宗教と云ふものを要しないとしてある、然るに儒教の泰斗孔子は未^レ知^レ生^ヲ焉^ヲ知^レ死^ヲと云ふ様なまだ何んだか至り盡して居らぬ處がある、況して分析的に進んで居る處の西洋の倫理學は理論に於て明瞭に爲つて居る代りに狭く爲つて居る、倫理だけではまだ包含し得ない處があると云ふ様な譯で、倫理ばかりでは此を人道としてはまだ物足らぬ處があると云ふ感じがある、それで二三の方面より倫理學と云ふものを觀察して見て、どう云ふ方面に於て快樂と云ふものが標準になるか、どう云ふ方面に於て快樂は標準にならぬかと云ふことを明らかにする爲に今倫理學

を(第一)規範學として(第二)人の理想を研究する學として(第三)其理想を實現する方法を研究する學として見たいと思ふ素よりそれで全體を包含して居るかどうか十分に御批評を乞はなければならぬが、兎に角三方面から先づ觀察して見やうと思ひます。

第一 倫理學を規範學として論ず

倫理學を規範學とすれば倫理法は一種の規範である其規範に従うて往けば人が道を謬らぬと云ふ一種の本能のやうなものと見ることが出来る、其意味を明かにする爲に例を引いて見ると御存じの通り本能と云ふものは別に確乎たる目的を見定めて行ふと云ふ譯でなほ何か就て面白半分にするので、蜘蛛が奇麗に糸を引くさうすると蟲が來て引き掛る、詰り其蟲を食ふと云ふことになる、併し是れは初めより好む處の蟲が引掛るだらうと云ふ考を以てするのではないと云ふことになつて居る、或は本能と云ふ意味を尙一層明らかにせん爲め、少し想像は免かれぬけれども一例を擧げる

と、冬になれば此の邊に飛んで來る鳥と云ふものも、夏に爲れば北の方に飛んで往く、何處へ飛んで往くのであるか、何せ北の方に飛んで往くのであらうか、何處にか北の方には鳥の好む居り場があるのであるか、或る人の考へには鳥の頭には磁石性即ちマクネットのやうなものがあつて南を向いて往くのは不愉快である北の方に往くのは何んだか愉快だ、それ故北の方に向つて飛んで往くのであらうか、爰に或る一説には北極には池がある其處に飛んで往くのであらうと云ふ人もある、私等が倫理學は人道を教ふる規範であると云ふはさう云ふやうな意味である例へば良心がある、虚言を云ふと不愉快で堪まらぬ故に其後眞實を話す、すると愉快である、實は虚言を言つた方が都合は好いけれども前に虚言を言つた處が不愉快であつた故にたとひ少々は言ひ悪いとも矢張眞實を話す方が宜からうと云ふ譯で即ち愉快、不愉快と云ふことが標準と爲る、併しさう云ふ意味に於ての愉快不愉快と云ふことは倫理全體の上を取つては餘り大切なものではなからうと思ふ、何故なれば此は常に誤らない標準と云ふ譯にはゆかないからであり

其の他に倫理的本能と云ふやうなものがあるとするれば正直、忍耐、節制、確執、勵精と云ふやうなもので此を守つて往けば人が都合好く渡世をすることが出来る、即ち人道を誤らぬと云ふのであるが、此には二つの區別がある、即ちエレメンタリ、インシュクティブ、或は原性的本能、是れはどうしても分析することの出来ない本能である、例へば所謂四端、惻隱、羞惡、辭讓、是非、孟子は之を倫理的本能で原性的の本能と見たであらうが、告子の如きは食色は性なりと云うて此の二のみを原性であると云うて居る、然るに現今生物學の說にすると孟子の議論よりは告子の議論の方が之に近い、原始の動物に於ては食すること、繁殖すること、と敵の襲撃に對し自己を保護することとは彼等の本能である、其他には何んにもない、さう云ふやうな原始的の單一なる分析することの出来ない本能と云ふものがある、又複合的の本能と云ふものがある、即ち元來無かつたものが後に單一本能の聯合に由つて起つて來るもの、たとへば前に云ふ鳥が北の方に飛んで往く、蜘蛛が巢を造る、蜂が

蜜を醸すと云ふさう云ふ本能は生物一般にあるのでなく寧ろ其境遇に於て出來た本能であつて、原始的の本能が聯合して出來たものである、是れは只説明するに就て例を引いただけで、或は引いた處の例が適しないかも知れぬ、併しながら爰に於て論ずるのは若し爰に倫理的の本能と云ふものがあるとするれば其倫理的の本能と云ふものは果して單性的の本能か或は複合的であるかと云ふとで、それを研究したいのが目的である、そこで良心と云ふ本能は複合的であらうと私は考へます、何せなれば其事柄が既に餘程複雑であるからである、併しながら倫理的の本能と云ふ中にも色々あつて或る類の徳と云ふものは單性的の若しくは原始的の倫理本能であらう、例へば正直を好む……正直にすると愉快であると云ふやうなことは或は原始的の本能ではあるまいか、何せなれば或ることを其まゝに知り、また人に話すと云ふのは人性の自然でありさうに思はれるので、或ることを曲げて云ふことになると拵へたものである、丁度圓いものを圓いと思ふのは自然である、圓いものを四角と云ふと其處にさう看做すべき原因がなければならぬ、それ故

正直と云ふことは自然のもので單性的のやうに思はれる、之に反して忍耐と云ふやうなことは原始的のものか少しく疑はしい、若し人に忍耐する必要が無かつたならば是れほど結構なことはいないかも知れぬ、けれども種々の事情より忍耐しなければならぬ、忍耐することは不愉快であるけれども忍耐した後の結果を考へて見れば忍耐しただけの價值があると云ふのであるから忍耐と云ふものは一種の徳であらう、けれども忍耐の價值の無いことに向つてヒドク忍耐するは却つて徳を亂用すると云ふものである、それから節制と云ふやうなことも矢張節制と云ふことをせずして所謂心の欲する所に従つて則を超えずと云ふやうに、初めからさう爲つて居ればそれ程都合の好いとはないかも知れぬ、併しなから渡世上節制と云ふ必要が起つて来る、凡て物は常に順境にあると云ふ譯には往かない、逆境に立たねばならぬことがある、そこで初めて必要が起つて来るのであつて寧ろ派生的デリヴェイティブの徳と思ふのであります、併しながら今此の處に於てどれが原始的のものか、どれが複合的のものであるかと云ふ區別に就ては極僅かな科學的の證

據は無いのである、是等は多少想像を交へて申したのであります、併しながら左の如き區別は確かにある、本能と云ふものは大抵原始的のものでも或は複合的のものでも何れにしてもそれを實行するときに愉快を感じるものである、それから此を行ふのは不愉快であるけれども其目的の愉快のために此を忍ぶと云ふのがある、後者の如きは元來は本能ではなく目的活動である、初めから不愉快を感じるのである、即ち忍耐、節制と云ふやうなものも確かに此類で初めは不愉快であつたものが永い間に、聯想上愉快に爲つたのであらうと思ふ、それ故行ふ時の不愉快なる本能は確かに複合的のものに違ひない、併し行ふと其自身に愉快なる方は必しも皆原始的とは云へない、何せならば元は不愉快で後には愉快に爲つて居るものがあるからである。

それから亦時世の變遷に由つて重んずる處の徳と云ふものが變つて来る、例へば身體の勇氣の如きは或る時代に於ては大に重要な徳と見たことがある、武力を尊ぶ時代には此が必要であつたけれども、實業の盛んな時代

に於ては左程必要はないと云ふ風に時の變るに従つて違つて来る、それ故若し徳と云ふものを時代に從つて上下を付れば、其上下の順序は何時でも同じと云ふ譯ではない、戦争の盛んな時分には其時に必要なことがあり、世の治つた徳川時代のやうな時には亦其時に必要な徳と云ふものがある、亦實業が盛んになれば實業に應じて徳が變つて往く、此等の變化する徳は原始的の本能ではない原始的の本能は何時でも變ることはない譯でありま

す。
ソコデ倫理學を規範學とする學說では一種の本能が動物の運動を支配して居るやうに倫理的本能在頭の中にあつて、何せ斯様々々の行をするかの理由は分りませぬけれどもさうすると愉快に感ずるさうしなければならぬ様に強迫される様な心持がするそれ故に斯く行ふと云ふ風に倫理を解釋して居るのであります、さう云ふ倫理學者は澤山にある、それでグリーン

の説の如きも他の方面からも窺ふとも出来るけれど矢張規範説であつて、所謂高等欲望は高等本能である、それを行へば行ふと其自身が愉快である、それに依つて往けば人道を誤らぬと云ふ、併し行ふとの愉快なることだけでは直ちに其が原始的なることを證しないのである、同氏の説に他の方面があるにしてもこの方面が主となつて居ると云うて違ひないと私は思ふのであります。

さう云ふ風に考へて來ると今まで論じた處の倫理的本能と云ふものは原性と復合とを問はず全然利己主義に考へて見ても、我人の倫理的規範になる、何せならば正直にすることも自分の得である、勵精も忍耐も節制も自分の得である亦確執強固なる意志も良心も自分の得であるからである、徳は得なりであります、ソコデ其の所謂利己的の功利主義と云ふものからして普遍的の功利主義に移つて往くのは、どう云ふ風になるかといふにそれは同情と云ふものがある、其同情と云ふものは利己的の功利主義から普遍的の功利主義に移る手段で是れ一種の本能である、本能には違ひないけれども他の本能と同情と云ふ本能との間には其處に段がある、それ故倫理上の廣い關係から見ると此段と云ふものは後に倫理思想發達に餘程影響す

るものである。普徧功利主義の方面から倫理を見ると、徳の範圍が廣くなつて其徳を實行することの不愉快なものの數が多くなる即ち自己の愉快を犠牲にせねばならぬ場合が多くなる。勿論此の不愉快は同情の方より來る愉快と聯合するけれども不愉快は隨に不愉快である。かう考へて見ると快樂と云ふものは常に倫理の規範となると云ふ譯には往かぬ。寧ろある時代には倫理は不愉快なことの方が多し、何の時代でも多くの人は倫理は窮窟で不愉快であると云ふことを考へて居ることが多い。倫理は愉快であると云ふ人は誠に僅かであらうと思ふ。して見ると快樂は規範にならぬと云はなければならぬ。

第二 倫理學を理想を研究する學として論ず

次ぎに移りて倫理を人の理想を研究する學として論じて見たい。規範と云ふものは一の規則である此れは手段、理想は目的である。斯う云へば人或は言はん同じく本能と云ふ中でも高等本能になつて今の良心と云ふやうな

ものになれば必ずしも只手段ではない、同時に目的である。それは自分もさう思ふので、本能と云ふものは少なくとも或る本能は手段であつて同時に目的となる。併しながら人の理想と云ふ方面と規範と云ふ方面とは確かに手段と目的と云ふ區別に分れて居ると思ふ。西洋あたりで廣く行はれて居る思想に就て考へて見ると倫理學と云ふものは、理想を研究する學と云ふよりは規範學と看做れてある方がどうも多いやうに思はれる。現にブントは倫理は規範學であるとして居る。尤も或る人は倫理學は定義を與へることは六敷しいと云うて居るけれども、ドナラに重きを置いて居るかと云ふと大抵規範學と云ふ風に見て居るのみならず西洋の倫理學では多くは倫理の後へ持つて來て宗教といふものを置くことになつて居る。然らば宗教は倫理の一部となつて倫理は獨立なる一科學であるかと云ふにさうでもない。亦さうであるやうにもある。理論的に言へば獨立のやうでもある。併しながら實踐の方面より見ると是非宗教を持つて來て補はなければならぬと云ふやうなことになつて居る。其處は吾人も大に注意する必要がある點

であらうと思ひます。倫理と宗教との關係は世間でも随分古くからある議論であるがどう云ふ風に是を區別し、兩者の關係を如何に見るべきか、私は細かに云ふ積りではない。唯倫理は經驗的のものである。宗教は信仰であると云ふことは間違ないと思ふ。又倫理は社會と云ふものを一團體として其社會に秩序を與へ且つ其進歩を計るもので、宗教は個人として個人に安心を與へるものである。こう云ふと人、或は言はん宗教でも必ずしも個人ばかりに關するのではない。所謂教會は宗教の儀式の方面で社會的のものであると、けれどもこれは社會的の方面があると云ふに止まり、其實或る特殊の信者が特殊の目的を以て集るのであつて、或る一地方に住うて居るもの全體を包含して其完全發達を計ると云ふ社會、即ち有機的社會と云ふやうな意味に於ての社會團體ではない。宗教の社會は有志家の集りて矢張個人々々の集りである。どう云ふ禮式が出来て社會的の方面が發達して居るにして其目的が主觀的の信仰であつて有機的社會の目的とは必ずしも一致する譯ではない、勿論其範圍

は廣く世界に涉ることもある、それは廣くても狭くても兎に角有志家の集りに過ぎない、然るに社會は所謂一種の有機的團體であつて苟も人類である以上は必ず地方々々にそれを纏めて一團體とするのである。倫理は此の團體に秩序を與へ其の幸福を増進すると云ふことである。倫理と宗教との區別は此所にあらうかと思ふのであります。若し此議論を以て正確なものとすれば社會は有機的に成れば成る程倫理は之に必要缺くべからざるものとなる。宗教はたとひ必要があるにしても倫理に制限されて來る、故に風教に反しない範圍に於て宗教を許すと云ふことになる。畢竟宗教の類を擇ばねばならぬことになる。社會は有機體である。と云ふに就ては少し話したいことがある。社會は有機體で有るか。と云ふに就ては随分論がある。生物學者が有機體と云うて居る生物に比較したならば社會と云ふ生物は何れ位の生物であるか。關節動物か脊髓動物か。或は軟體動物に符合するものか。社會と云ふ生物を普通の有機體に比較して見ると云ふと極くまだ初步の生物である。第一生物と云ふものは生殖をする

上に於て無性生殖と有性生殖と云ふ區別がある有性生殖の方は雌雄の區別がある、社會と云ふ生物には雌雄の區別は出来て居らぬ、それ故英吉利の人は分れて米國に獨立國を拵へたけれども別に有性生殖でなく無性生殖に付合して居るのである、それ故社會を有機體とすれば無性生殖をする原始的の有機體であると云ふて宜からう、是れは只一つの點を云ふのであるが、亦外の點より云うても極原始的の動物に當る、即ちコロニーと云ふて細胞が一處に寄り集つて居るものがある、其細胞を一々剝して互に分業して働いて居る、此の分業が進めば進む程細胞一個體としての生存は六ヶ敷全體に依頼するが多くなる、丁度今日の社會はコロニーである、集まれば分業してやつて居るけれども分れば矢張個人として生きて居る、併し文明の進歩と共に分業が進めば進む程個人の生活が社會に依頼する様になる、此の有様で進めばどれ位進むか知れぬが、だん／＼進んで往つたなれば團體生活が益々強固になり今日の所謂倫理と云ふものは益々重んぜらるゝことに爲つ

て宗教と云ふものは益々此に制限される様になる、其極度に於ては倫理と宗教と一になるかも知れぬ、併しそれは何時なるか中々遠いことであらう、今日の宗教家は今日の儘で進めば宜しからうかと思ひます、勿論其時の倫理は今日の倫理よりも尙ほ廣いもので人道全體を能く包含するものでなければならぬ、さう云うて見ると倫理と宗教との關係に就て倫理を重んずる様であるが倫理は重もに規範の方を論じ宗教は大目的を凡て包含して人の大運命を論ずる位置にあるのでありませう。

古來の成行は今之を論ずるには及ばぬけれども今日歐羅巴の有様を見るに傳來の宗教の狀態が尙ほ維持せられて居ると云ふに就ては大いに理由のあることであらうと思ふ、既に世人の知れる如く西洋では宗教のことを論ずることは餘程六敷しい、それ故個人々々に就て聞けば餘程進んだ説を持つて居るけれども社會一般に發表されて居る處の思想に就て見ると宗教の保守思想は非常な勢力を持つて居る、又其宗教は廣く弘まつて居る、それ故殆んど論評を超越した位置にあると云ふ譯でありませう、倫理は今の

宗教を以て其の一部分とするが如く、しないが如きもので曖昧にして居ると云ふのは大いに吾人の察せなければならぬところであらう、我々東洋人は幸ひにして其處等の困難は感じませぬから、十分に宗教と倫理との關係を論じ宗教の足らぬ處は大いに是れを論じて社會人道の上に於て倫理と宗教との關係宜しきを得せしむる便宜がある、然るに西洋に於ても獨り宗教を基とし人の最高等の理想を書き神に依頼するのみで以て十分満足することが出来ないから時々プラトンのレバブリック、モアアのユートピヤ、ロントのボシチーフ、フキロツヒと云ふ様なものが人に愛讀されるのであります、かう云ふものは倫理を以て宗教に代へやうとするので自分は此れを將來の倫理と宗教との調和の前兆と見るのであるが或は誤りであるかも知れぬ、兎に角倫理を以て宗教に代へやうとしたことは昔より今日まで歐羅巴人の思想中にも屢あることだと思ふのであります、斯云ふ方面から考へて見ると倫理を以て一ツの規範として置くは甚だ狭い譯でありま

す、倫理は理想を研究する學とすればそれは所謂規範學ではなからう、何が

人の理想になるかと云ふことは心學上より……心理學も決して今日ある心理學説に限る譯ではない、人性を全體に研究するので、社會及個人に顯れて居る人性、亦動物の發達した方面から研究した人性、哲學思想美的思想に顯はれて居る人性と云ふやうに色々の方面から見た人性を研究して、社會發達の最終の到達點即ち理想を究めるのは既に是れ規範學で無くして一種の自然科学と云ふか或は精神科學と云ふか兎に角一種の科學である、されば人と云ふものを研究する必要がある、併し是れには色々云はなければならぬことがあるが、あまり長くなるから只一二の要點を話して置くことにしませう。

人と云ふものは身心相俟つて出来て居る是れが一個の人である、随つて其考へる處欲する處爲す處に精神上より起るものと生理的必要上から起るものがある、其有様は色々である、先づ運動と云ふことに就て云ふと反射運動と云ふものもある自動運動と云ふものもある、或は本能的運動と云ふものもある、或は有意運動と云ふものもある、生理の方面から起つて來て運

動するのと精神の方面から起つて運動するのと又、其兩者の混合上より起る運動もある、然るに今日此の處に於て話すのは精神的の方面即ち理性的動物として人を見るのである、其運動に於ては反射運動とか自動運動と云ふやうなものは云はずして先づ有意運動若し必要あれば本能的運動と云ふやうなものを云ふのである、兎に角理性的動物としての人を云ふのである、其方面から見て人には所謂知性情性意志と云ふ區別がある其知性はどうか云ふもの、情性はどうか云ふもの、意志はどうか云ふものと云ふ説明に就ては今日の心理學者中にも全然一致して居る譯ではない併しながら先づ情と云ふものは所謂快不快を指すものである情は研究の困難なるに拘らず其研究が比較上進んで居ると云ふ事情があるのは、意志とか知とか云ふ方面は客觀的の方面から餘程研究しなければならぬことが澤山ある、然るに情と云ふ方面に於ては主觀的的反省的に能く研究ができる、それ故詳細の點を研究することが遅れて居るにも拘らず情の性質は大略分つて居る、情に關しては昔より云うてある事柄と今日の心理學上に於て云ふ事柄と一致して

居る、少くとも快を求めて不快を避けると云ふやうなことは昔日より言ひ來りたることで今日では自明的眞理となつて居る、此等三の中で今日の問題に直接關係して居るのは理性である、そして其問題は理性が情を驅らすして直接に意志を支配することが出来るかどうかと云ふのである、此問題に就てカントの説では知と意志とは殆んど無關係のやうに爲つて居るのであるが心理學では此等兩者を觀念運動的行爲(アイデア、モト、アクシオン)と云ふことによりて聯絡せしめんとする傾向がある、即ち何事か一の事を考へて居ると其思想が直ちに動神經を刺激して活動に顯はると云ふのである、今是れを(机上の)コップを指す(取らうと思へば既に手が動いて居る、情の如何に拘らず取らうと思ふ表象が直に手を運動さして是れを取らしむるのである、此議論は心理學上随分勢力ある議論である、ミュンステルベルヒ及ゼイムスなどは御存じの通りさう云ふ方面から意志を説明して居る、フイリマリのアイデア、フリスと云ふ説は心理學のアイデア、モト、アクシオンと類似して居るのであるが是れ等の事實より考へて見ると

必ず快樂が常に意志の動機と爲るべきであると云ふ議論は動かす可らざるものと云ふ分けにはいかんやうである、それに又グラインの自我實現説杯にては即ち完全自我の考へが倫理の基準となると云ふやうな説等を合せ考ふれば、理想と云ふものは情性の如何に拘らず意志を支配し得ると云ふ蓋然性がある。

尙又此れを情の性質上から考へて見るとヴントの申すには情緒と云ふものに三ツの情調がある、即ち快、不快の調、緊張、弛緩の調、興奮、休止の調、通常氣が落ち附くとか沈まるとか落ち附かぬとか盛んであるとか云ふことを指すので、此三對の分け方は交叉的分類であつて快でも不快でも緊張若しくは弛緩の状態にあり得る、又此等各が刺激性若しくは休止の有様にあり得るやう云ふ三ツの調が情緒であると云ふのである、若し果してそうであるなれば情緒の工合に依つては快不快に拘らず休止することもあり得るか、人は常に快を求め不快を避ける爲めに動くとか云ふ議論は立たなくなる、即ち愉快でも静止せずして興奮性で益、活動する時もあり、不愉快でも休止

性で落ち付て居る時もある、春の好天氣の日花見でもすれば愉快であらうと思へば家に居て安樂椅子に凭れて書見し居ても氣が落ち付かぬ、是れが興奮性の時である、即ち一種の衝動力がある、併しながら亦氣が鬱して來ると云ふ時分には不愉快であるけれども休止してしまふ、愉快を求める氣もなく衝動力を缺ぎ不愉快に安んじてしまふことがある、彼の快を求不快を避けると云一般の議論は少くとも例外を許さねばならぬ、何故ならばブントの情緒の説は批評もあるが今細論する必要はない、自分の考では矢張緊張、遲緩、興奮、休止と云ふやうなことは假令ひ情の原始的性質ではないにしても其複雑な關係上から起つて來た事實として之を認めねばならぬと思ふからである。

矢張情緒の原始性と云ふものは快不快の二ツにあるとして此の二ツは如何なる法則を有するかと云ふに、快は快と聯合する性があり、不快は不快と聯合する性がある、例へば不愉快の時には不愉快の表象を呼び出して來る愉快の時は愉快の表象を呼び出して來ると云ふやうなことがある、情緒の

同じ調にあるものが互に聯合すると云ふ規則でなからうかと思ふのである。社交上に於ても性質の快活な人は快活な人を求める、不快活の人は不快活な人を求めると云ふとがある、又同情相憐む理で一人の不愉快が他人の不愉快と聯合することもある、併しながら其の不愉快と不愉快と聯合すると云ふことは病的の現象で、快を求める方が當然であると云ふことではあるまいか、實は是れは心理學上の惑問である、自分の想像する處では一般生物が快を求め不快を避けると云ふのは生理構造の必要から起つて來たのであるまいかと思ひます、其譯は此の地球上の生物の生理構造に於ては快的要素が多くして身體の發達と伴ふて益加つて行く、其故は分らぬが先づさう假定する、そこで不快の要素とは調和しないと云ふやうな譯でないか、一般社會のことより之を論ずれば爰に一人の罪人がある悪人として牢に入られる、甚しきは斬罪に處せられるともある、然るに彼も亦一個の人間である極力刑に抵抗するともあらう、然るに刑に處せられるものは少くして之を罰する國家は強い所謂衆寡敵せずである、若し今日悪人黨が多數なれ

ば之れが即ち社會を爲し今日所謂善人が却て刑に處せられるかも知れませぬ、其様に今日吾人の快感を求むるは生理構造が快感的に組織せられて居るからでそれで不快が退けられる譯ではあるまいか、さう云ふ處から考へて見ると現在存して居る處の地球上の生活と云ふものは凡て可能的存在中の或る一方面を代表して居るもので、宇宙の或る處に於ては不快を求め快を避けると云ふことはあり得べきことではなからうかと思ふ、彼の天下皆美の美たるを知る此れ惡のみ、天下皆善の善たるを知る此れ不善のみ、と云ふことも全く之を顧みない譯にも往かぬ、夫故快樂は倫理の標準になると云ふことは假令ひ行はるゝにしても狭い範圍に限らるゝのである。前に却つて所謂自家實現說、完全發達說と云ふものはどう云ふ位置にあるか、是れは素より智慧も完全に發達しなければならぬ、情性も意志も完全に發達しなければならぬと云ふのであるから快樂は其の一部分と爲つて顯れて來るに相違ない、それは唯一の倫理の標準であるか無いかは問題とした處で、兎に角情と云ふものも完全に發達して來ねばならぬ、其完全に發達

した處の情と云ふものは、どう云ふものか果して快の快なるものか、又は悲哀の快感とか醜の美感と云ふこともあるから不快の中に快があるのか或は又快不快を超越して無邊風月眼中眼、不盡乾坤燈外燈とでも云ふ様なものか完全説を以て倫理の標準とする倫理學者はそれ等の處に考へがあらるゝであらうと思ふ其確乎たる理想なしには完全發達説も只言語上の命題に止り倫理の理想としては餘り價値がなからうと思ふのであります。

第三 倫理學を理想を實現する方法を

研究する學として論ず

終りに倫理學を理想を實現する方法を研究する學として見ましやう、是れは所謂倫理政策の方面である、其方面に就ては順應と云ふことが尤も必要なる要目と爲るもので、時には外界の境遇に對して自分を順應して往かなければならぬと云ふことがある、又時には内部の方を元として外部の状態を是れに順應せしむると云ふこともありませう、それで倫理學に於ては矢

張兩方あるやうである、外部の状態に應じて自分を順應すると云ふ場合には前に云ふ本能的規程に依つて其場合々に應じて往くので、正直にすべき時には正直にする、節制すべき時には節制をする、勵精の必要な時には勵精にあり、忍耐を要する時には忍耐すると云ふやうな譯で、畢竟外部の必要に應じて心を順應して往くのである、是れが必ずしも愉快でもなく不愉快と云ふ譯でもない、自づと愉快に順應して往く場合がある、又不愉快でも順應せねばならぬ場合がある、さう云ふ時は快不快は標準にもならない、外部を内部に順應せしめると云ふことは是れは所謂功利主義の固有の、天職と云つても宜しい、それには自己的功利主義と普遍的功利主義とある、自己的功利主義より普遍的功利主義に移つるのは同情の作用に由るので此の兩者の性質は大變違ふ、ベンザムの功利主義は後者に屬するのでありませう、彼は立法及法律の方面から社會改良を企てたので其範圍に於ては有効なものである、然るに種々他の立脚地から批評せられたものであるからベンザムの立ち場が不定の様に見えるが、ベンザムも其立脚地を明かにせず、

倫理全體を功利主義に説明し去らんとして他を駁論したる所などは誤りであらう、併し其功利主義も餘程物質的に傾いて居るのはペンザム其人の事業の然らしめたので其説の内容は矢張同情と云ふことも功利の一部分であると云ふやうに論じたもので、其をミルがまた餘程精神的にしたものである。

自己功利から普遍功利に移つる、此の同情は始めは受動的に他人の状態を見て情を起すのであるが、此に愛情が加はれば博愛と爲つて尙一層強く精神上に働くのであらうかと思ふ、それで同情と愛と云ふものは關係して居るけれども其處に又違ひがあるやうに思ふ、同情と云ふ方は受動的で又假令ひ發動の場合でも相對的で他人が苦んで居れば自分も苦痛を感じ、他人が愉快になれば自分も愉快に思ふので苦でも樂でも向ふの有様と同じ有様になればそれが同情の極點である、故に元來受動的である、彼の訓戒に於て己れの欲する處を人に施し、欲せざる處は之を施す勿れと云ふ、是れ全く同情的の訓戒で自動的であるけれども相對的である、若し愛に飲酒家があ

つて其息子に酒を勧めたなればそれは好いかも知れぬ又悪いかも知れぬ、兎に角己れの欲する處を人に施すと云ふことは絶対の訓戒とは爲らな
いと思ふ、然るに愛は絶対的又發動的のもので人の精神活動全體を之に集
合せしむるものであるから自愛他愛に拘らず其愛するものの安全幸福を
求め自己を愛するときも將來のことまで考へ一時苦を忍んでも將來を全
うするやうになる、又親の子を愛するのも同様單に同情を有つて居るばか
りでなく愛の聯合したる同情で、或る時には大いに子を苦めねばならぬこ
ともある、是れは子供を愛するからである、博愛は人の褒貶に關せず愛人の
完全を求むるので絶対の勢力がある、基督教が世界に勢力を有つて居ると
云ふは己れの欲する處を人に施せと云ふ訓戒の爲めのみでなく、愛と云ふ
との爲であらうと思ふ、夫れで博愛と同情と聯合したるものが人間最高等
の社會精神で無からうかと思ふのである。
それで簡單に言ふと此第三部は徹頭徹尾倫理政策論で功利主義である、心
理學上より之を見るに其自己より普遍に遷るのは知力の作用に由るので

ない、知的作用は全く個人的のものである、自分の意識が孤立的のものであるやうに、理性は孤立的のもので如何に完全に發達してもそれは個人的のものである、意志も亦個人的のものである、意志は發達すればする程個人的なものになる、カントは自由の法則と云ふものを與へ個人と國家との關係を付けて居るけれども、自分の考へにはカントが自分の目的を達するには此れが都合の好い考へである、けれども心理學上意志の性質を説明したものは云へない、今日心理學者は意志を何處までも個人的のものとして居るのみならず斯うして居る我々お互が各個人の性を保つて居るのは意志の作用であると云うて宜い、特り情は然らずで、情は博愛と成つて最高等に進み漸次完全の發達に近いて往く譯である、尙ほ將來は是れより他の方面が發達して來るか分りませぬが先づ今日では是れが情性の最高等の状態であるまいかと思はれる、果して然れば其博愛と云ふものに依つて自己功利より普徧功利に遷る、それで若し倫理學上自己功利が不道理のもので普徧功利でなければ理に合はぬとすれば、それはグロウエンの様な殆んど純然

たる規範論者でも又シヅウイックのやうな快樂を目的とする處の普徧功利にしても、兎に角普徧功利でなければ合理的でない、と云ふならば博愛が是非此に伴はなければならぬ、其博愛は情であつて、不愉快の情を無く愉快の情である、故に博愛に現はれたる快樂は倫理の標準となるものと思ふのである、此を前きに述べたる倫理は一體として社會に秩序を與へるものである、と云ふと合せ考ふる時は其理益、明瞭なる譯で、孤獨の快樂は必ずしも倫理的でないのみならず屢、之に反するところがある、又聚合的快樂でも必ずしも倫理的と云ふ譯には往かぬ、スペンサーの善の定義に就て云へば「自家保存は必ずしも倫理的でない、子孫の養育必ずしも倫理的でない、特り、自他の完全生活を求むることも即ち博愛は團體の自家保存をなさしむる所以にして前二者をも豫定し倫理政策(實踐倫理)としては最も包含的のもの且最高等の標準と思ひます。」

附言

倫理は之を種々の方面から観察せねばならぬが實際世間の有様を見るに倫理學者は倫理至上主義を唱へ美學者は美感至上主義を唱へ哲學者は概念至上主義を唱へ動もすると互に相衝突することがある、彼の地方一神教（モノテイズム）が各自己の信ずる神を以て唯一無上のものとして居る様な有様であるやうに思はれる、故に快樂主義は直覺主義と全然相容れられざるかの如く磊落主義は窮窟主義と全然並立し能はざるものゝ如く、宗教上の信仰は倫理的理想と全然相反するものなるかの如く、各々牆壁を築きて自己の範圍を限られるものゝ様である、是れで以て人道の大問題を解決することが出来るであらうか氣づかわしく思ふのである。

人の精神と云ふものは複雑なるもので俗に云ふ一すじや二すじでは之を統一することの出来ないものである、それで今特に之れに障礙となりつゝあるものゝ一二を擧げて論ずると云ふことは吾人の研究上全く無益でないかと思ふのである、先づ障害の種類を分けて外部よりの障害及内部よりの障害とすることが出来やうと思ふ、外部よりの障害とは社會上の現象若

しくは一般天然現象の社會現象に及ぼす影響等より來るものにて、其最も重なるものは人類繁殖と衣食住との關係上より來るもの即ち生存競争の必要を生せしめたるものである、此が爲め幸か不幸かは知らぬが人類が始終逆境に立たねばならぬ、發達の工合も従つて内部の要求通りには往かぬ、パツテン教授の語を借りて言へば苦痛經濟（苦痛を逸れん爲めの政策を主とするもの）孟子の語を借りて云へば權道と云ふやうに理想上から見れば人生に違ふ事柄も一時の窮策として甘じて行はねばならぬことか多いので、畢竟其等の場合に於ては比較的立論せねばならぬ、甲も理想に違ふことと違し、乙も理想に違ふことと違しであつても、其度合を量つて違ふことの違い方を捨て、少い方を取らねばならぬ、斯の如く理想に合はないものが大多数を占めて居る世の中に、比較上善きものを以て假りに満足せねばならぬと云ふ場合であるから種々衝突の起るのも敢て怪しむには及ばぬことである、然るを世の倫理學者及社會改良論者動もすれば主觀的に理想を描き直ちに之を實現せんとす、爰に於て實社會と衝突を逸れないのである、社

會主義者は現國家と衝突し、美術家の裸體畫は道學家と衝突し、哲學者の理想は宗教家と衝突して居ると言ふやうな譯で、此等社會活動の上に現はれて居るものは多くは理想上の衝突と云ふより政策上の衝突と云ふべきであらう、果して然らば社會主義と政治學と、美學と倫理學と、哲學と宗教との衝突ではない、併しながら偶然にも見解の狹隘なる所より政策上の衝突と理想上の衝突と相伴ふ場合も少くないやうであるが其は其人の過ちであつて學其もの、理想其もの、若しくは政策其もの、罪ではない、此等の衝突は畢竟吾人が逆境に立ちて種々變態の順序を経て發達しつゝある所より延ひて精神の狀態迄も變態的に發達し其れがため却て精神を複雑ならしめ統一上の困難を生じたるものかと思ふ。

次に内部よりの障害とは精神の性質其ものより來るものにして、例せば人の知性は表象及其聚合より成りて此に形式と内容との別がある、其形式は所謂内省法によりて充分之を研究し得べしと雖も其内容に至りては多くの經驗を積み始めて始めて得らるゝものである、其中にも日常生活の經驗、自然

科學上の經驗、特殊境遇の經驗、禪の修業上の經驗、美術家の經驗、戀愛上のこと、軍事上の經驗、哲學三昧の經驗、等特殊の境遇に於て始めて經驗し得らるべきものを云、又讀書によりて他人の經驗を察知すること等の別があるが、一人の人果して能く種々異なりたる境遇に自身を置き自ら經驗して廣く材料を集め、同時に内省的練修をなし、又廣く先輩の説を参考するが如きことを爲し得るやと云ふに、人の能力に制限あり、又人の生命に限りありて、到底一人にて一生の間に大業を遂ぐることは出來ぬ、人道問題の解釋夫れ難い哉とでも云はねばならぬ、中にも學者の爲め最も誘惑となるは讀書に由て他人の經驗を知りたりと思ふことと又自家の内省にて獨斷することとである、然るに實際人道解釋の好材料は日常生活の經驗を廣くし社會の事物に通じ、所謂健全なる常識を最も廣く得ること及特殊の境遇に於て特殊の經驗を得るとにあらうと思ふのである、徒らに長命を貪らうと云ふのではないが、經驗を積むには年數を経るに限る、醫學上生命を長からしむる發明でも出來ねばとても大統一はをばつかないやうである。

(哲學雜誌百九十一號)

第十 精神修養に就きて

本日は當校々長よりの御依頼によりまして此方へ出てお話することになりました。夫で演題は漢とした題でありますけれども精神の修養に就てといふことに致しましたのであります。之も畢竟自分の方に引附けた譯でありまして平生自分が研究して居るやうな方面から人生を觀た所を話してみやうと思ふのであります。

一 日本の社會狀態

此の人生といふものは甚だ複雑なもので或は精神内部の狀態から之を觀察することも出来る。又外部の社會上の有様或は又其地方々々の有様等からも之を觀察することが出来るといふやうな風に種々の方面から觀察することが出来る譯であります。今日の日本の社會の有様といふものは餘程複雑なものになつて居りますから尙更其の狀態を觀察することが困難

であります。先づ餘り細かい歴史上の變遷は話す必要もありません。兎も、兎角日本の舊思想といふものが歐米から這入て來たところの新思想の爲めに大に變じ、或は全く歐米思想の爲めに奪はれたやうな狀態に成つたこともある。又或る時は舊思想といふものが幾分か恢復して來たといふやうな場合もある。兎に角入組だ狀態になつて居るのであります。併し此等の事は日本のやうな此社會には缺く可らざること。日本の過去の歴史を考へ又日本が外國に關係して居る工合などを考ふれば、此等種々の經驗を経ねばならぬといふことは申すまでもないことである。それでは今日は歐米の所謂科學思想といふものが日本へ這入りまして以後、大分日本の思想界並に日本の社會上の事業といふものが、科學の理を應用して科學的に進みつゝあるといふ狀態である様であります。

二 神秘主義

處が近來歐米に於て學者が餘り科學思想に偏する、一かた十まで皆科學を

以て説明しやうとする、畢竟科學が自分の領分を超へて居るのである、といふので科學に反對の思想が起つて居る。此れを神秘主義といふのであります。宗教家若くは美術家などの中に、或は又或種の教育家の中にもさういふ思想が起て或は文學の上に於て、又其他の方法により言ひ表されて居る。此の思想が幾分か日本へも傳つて参りまして、一方に於ては科學思想が弘がりつゝあると同時に又此の科學に反對の思想がある。彼等は科學思想を評して、科學萬能主義と唱へ之を抑へやうとして居るのであります。一體日本在來の思想の傾向及習慣といふものは、何ういふものであるかといふと之も一言に云ふことは困難でありますけれども日本在來の主義といふものは私は「實行主義」といふて宜からうと思ふ、或は之を「武士道」といふことも出来ませう。學理的に言へば實行主義、夫が矢張り武士道にも現はれて居るので、夫で科學思想若くは文藝思想といやふうな方面は寧ろ新たに歐米から輸入せられた方に屬するものである。實行主義の在つた所へ科學、美術、文學等が歐米から輸入せられて何主義々々といふものが出来

て來たと見て宜からうと思ふ。此等の如きは元より極大體の考へでありますけれども先づ左ういふやうな關係になつて居るであらうと思ふ。夫で實行主義と科學主義と文藝主義といふものは必ずしも相容れないといふので無いけれども、場合に由ては相容れないやうな事もある。例へば文藝といふものには、まア美の思想及び人情杯が主になるのであります。それから文學又演劇の如きものによつて發達させるものである。それで動もすると其等の思想が、所謂倫理思想と相容れないやうな事もある。夫れで文藝思想を主張する方の方は、文藝に衝突するやうな倫理は狭いのでさういふ狭い倫理は到底人生を支配するには足らないと言ふのであります。又倫理思想を主張する人の方から觀たならば文藝といふものは或は人を虛弱に爲し所謂文弱に流れしめて、動もすると人が其方に沈溺して生涯を誤るものが尠くないと言ふのであります。孰方にも一理あるとであるが兎に角左ういふやうな風に倫理思想、文藝思想といふものが相容れないやうな事が往々あるものである。

又一方に於て所謂科學がある。科學といふものは物の理を究めて夫に由て事を爲して行くのであるから最も確實なるもので、今日は科學に依りて居れば先づ間違はない。例へば日本人は戦争に強くして勝利を獲る其の理由は何所に在るか、此れには固より精神が第一重要である、けれども亦西洋の科學を容れて、いろ／＼な機械を適當に使用し、其機械の用方宜しきを得て居るといふやうな事が餘程必要なる事實である。必ずしも之は戦争の場合のみならず今日日常の生活に於ても、例へば衛生の事は何ういふ風にするかといふと何うしても之は衛生學者が科學的に研究した所の事を基礎としてそして市町村の衛生を好くするといふ事に依て人生を安全に爲さしむるとか、又醫者にしても其の通り、何でも此科學といふものに依らなければならぬ。又科學に依るといふことが事を確實にする、大丈夫なやりかたであるけれども、ソナラといふて科學といふものを何所までも主張して、詩文、美術等も總て數學的の理屈を以て之を説明するといふやうになつて來ればどうか、さうなつて來るといふともう趣味といふものが無く

なつて、文藝の文藝たる趣味は失つて來るといふやうな譯になる。夫ですから科學、文藝、實行主義即ち倫理、此三方面が、複雑なる社會の三方面を現はして居るものである、で畢竟今日の日本の思想界に於ても此の三つが何ういふ風に調和すれば宜からうといふ事が問題になつて居る譯を思ふのであります。少し他の方面から話して見ます、が今のは即ち外部に現はれた所即ち人の思想が社會に現はれた方面から申したのである。

三 個人天稟の性質

今暫く思想を他の方に轉じて、内部から見れば即ち人の性であります。人は心と體とより成つて居る。此一個人の方面を考へて見れば人には各個人に特質といふものがある。天稟の性といふものがある。物に氣早い人もある、或る人は氣早くないけれども又思想が明瞭であるといふ人もある、又或る人は事を實行して行くに長じて居る。又思想明瞭といふ譯でないけれども、一度自分が決心した事は容易に之を動かさない、といふやうな所

謂意志の鞏固といふ方面に發達して居る人もある。といふやうな譯でいふ個人に天稟の才といふものがある譯であります。又之を廣く觀察して見ますると、常に個人々々に依り天稟の性が違ふのみならず、國民に由りて各其性を異にして居るのであります。例へば近かい方から言ふて見ると、一家族中同じ親から生れて同じ一家族に成長して居る小供でも各特質がある。兄弟の中にも心か落付いて學問に好く適して居るやうな者もあれば又學問には夫程適しないけれども實際向に長じて居る者もある。親の目から小供を見るといふといろいろ變つてをる。けれども此を他人から見れば兄弟は互によく似て居るといふやうな譯で、兄弟たる特質をちやんと具へて他の家族の人とは大變違ふ所がある。そのやうに日本人の中でも、いろ／＼特質を比較して見ると種々特質の變つた人があるけれども之を外國の人と比較して見ると、矢張日本人には日本人の特質といふものがある。例へば好く人の言ふことでありますけれども、日本人は感情的である、感情に餘程走つた人間で、従つて事に鋭

敏で迅いけれども深く考へて強く推す所が少い即ち推が弱い、といふやうな事は方々から聞く批評であります。夫で之を歐米の人種に比較するといふと日本人は伊太利人及佛蘭西人畢竟拉典人種に餘程似て居るといふやうな事をいふのであります。

四 英國人の氣質

夫に反して英國人は何ういふ氣質を持つて居るかといふに、英國は地理の上から云ふと、佛蘭西と唯一つ海峡を隔て、兩方に在るので洵に僅かの所で互に相接近して居る譯であるけれども、其英吉利人は佛蘭西人に比較しては大に氣質が違ふ。餘程感情は冷淡であるが、併しながらよく物事を考へる人間である。其の考へといふのも素早く考へない、四方八方からよく理合を考へてそれと度決心した以上は何所まで之を實行して往かうといふやうな性質を持つて居る。佛蘭西人が英國人を批評して言ひますのは、英國人は一體佛蘭西人に比較して見ると、感覺が鈍いのである、一度決心

すると何事が起つても其以外の事には感じがない、決心した事を正直に實行して往くのである。之は別段悪く言ふ積りで云ふたのでない、眞實科學的思想を以て英國人を評したのでありませう。尙ほ續けて夫に反して佛蘭西では革命以後何か事が起るといふと直ぐ國民が感動して、僅かの事でも直ぐ夫が國民に傳はつて動もすると國民が騒ぎを起さんとする。英吉利人は各其居場を守つて、百姓は百姓、商人は商人、又上級の人は上級、下級は下級、其居場を守つて正直によく働いて居る。英國人は感覺が鈍くて活動力の多い人間である、といふやうな事を言ふて居ります。併しながら英國人と佛蘭西人となせ其様に違ふかと云へば、元より之は人種が異つて居る。英國人は所謂「アングロサクソン」、佛蘭西人は拉典人種で人種が異なるから自ら氣質も違ふのであらうと斯ういふ人があるかも知れぬが、固より之は人種の差に因るといふことも事實であります。其證據には英吉利人が亞米利加に行つて、今日の亞米利加合衆國といふ盛な國を起して居る、亞米利加は固より英吉利人ばかりでない、外國人もありて、寄合ではあるけれども夫で

も米國といふものは本は英吉利人が開いて今日でも米國の主たる人種は矢張り「アングロサクソン」人である。其亞米利加の「アングロサクソン」人は、英吉利に居る所の「アングロサクソン」人に比較して見れば餘程違つて居る。亞米利加人は餘程感覺が鋭敏であつて英吉利人の風とは餘程違つた所がある。謂はゞ亞米利加人は英吉利人の活動的な所を、佛蘭西人の感情的な所を合して仕舞つたといふても宜いやうな有様である。夫は由つて考へて見ても、米國人は英吉利の島に永く住つて居る「アングロサクソン」といふ者とは、國土の差に因つて性質が變つて來て居る。即ち其土地其境遇に適するやうに人種の性といふものが自ら變つて來て居るのである。大體人種の特質と又其外部の境遇の互合との兩方に由り、所謂國民性が發達して來るといふ事に就ては尙ほ一層面白い實例があります。北

五 米國人の氣質

といふのは御存じの通り亞米利加といふ國は、餘程廣い國でありまして、北

亞米利加、南亞米利加とあつて、大きな國は英領加奈太及び北米合衆國、夫から又南亞米利加に於てはいろく大きな國がある、ブラジルとかアルゼンチンといふやうな國がある。其等は矢張り歐羅巴から殖民をして居るのである。けれども、今日吾々が單に亞米利加と斯う云ふたれば普通北米合衆國を大抵指して云ふのである。或は加奈太とか或は南亞米利加或は又メキシコ、ブラジル、アルゼンチンと特別に指して云ふ外は、北米合衆國を指して云ふのであります。亞米利加は廣いけれども北米合衆國が最も盛な國であるといふ事を意味して居るのである。夫に就て豫ねて自分が考へて居るなせ南亞米利加はもう少し盛んにならぬか、尤も或所は随分盛であるさうであらば、南亞米利加へ往て觀ると此様にも盛んであつて、夫は北米合衆國にも劣らないやうな所が擇山あるさうであります。けれども、外から觀て其國民の勢力が世界に弘がつて居るのは何所であるかといふは北米合衆國である。なせさうであるかは、其の全體は固より之を半信や二言の下に論じて仕舞ふ事は出来なぬとてありませう。

が併し二二の點を考ふれば又幾分か吾々の爲めに或る教を垂るゝ所が無かとも言はれないのであります。一體合衆國といふ所は、御存じの通り共和政治であつて、幾つも州があつて州といふのは日本の縣などよりも遙かに獨立したもので、大抵の事は各州でやつてしまふ其の全體を總括して居るのは華盛頓の中央政府となつて居るのであります。そのいふやうな行り方でありませうから、彼の活潑にして複雑なる國が唯華盛頓の中央政府で大體を統へ括つて居るといふだけで、好く統一されて居るのは驚くの外はないのであります。加之米國は王冠といふものもなく帝といふ者もなしに大統領だけで統一されて居るといふものは何故で在るだらうかといふと、或人は夫は宗教の力であると云ふかも知れぬ、けれども宗教といふ中にも新教もある舊教もある、又其中でも種々區別がありますから、中々宗教の力で以つて米國全體が統一されるといふことは信じられない事でありませう。然るに合衆國では所謂司法權の獨立といふものは餘程確固たるもので、即

ち法律といふものは餘程よく行はれて居る。言ひ換へれば所謂正義の觀念といふものは餘程國民によく行き涉つて居る。法律の前では何のやうな人間でも一人は一人として見るのである。之が所謂アンソロポキーンの特徴かも知れませぬ。兎に角夫は多くの人の認めて居る所であるやうであります。斯ういふことは、夫が宗族の成り立ちを云ふ夫でありますから人種の如何を問はず其技術のある者は、*Downy* 之を用ひて行くといふことは合衆國の他國に異つて居る所である。日本人であつて米國のつて米國大學の教師になつて居る人もあります。其が南亞米利加へ往くは例へば會社に傭はれて居る者も澤山あります。其が通常の社會交際上に「*Amelanchin*」の如き餘程遠ぶさうであります。常に通常の社會交際上に於て區別するのみならず、法律に於ても……法律が區別する譯ではないであらうけれども、判官が身分か僻念を以て在來の人間にはよくするとか或は新たに移住して來た人間には好くしないとかいふやうに法律が公平に行はれないといふ事があると思ふ事を私は彼の國よりの通信に見たこと

があります。夫故に折角移住して來た人間も不愉快に堪へず、復た歐羅巴に歸る人間もあるさうであります。此のみによりて國民の盛衰を論ずる事は固より出來ないけれども、此も合衆國がなせ大に榮へて南米が發達しないかといふことの最も大なる理由の一であらうと思ふのであります。畢竟土地の工合に依て人の性質が變るといふのも一つであるけれども、亦精神上は正義を貴ぶ天稟を具へて居る、一は寧ろ普通の人情にひかれ、て公平を缺て居る、此いふやうな事は大に注意すべきことであらうと思ふのであります。以上は少し外國の例を以て人の氣質の變化するを話してお話し申した譯であります。

六 日本人の特質

再び又我日本にかへつて現在日本人の天稟の性といふものは果して多くの人が批評するやうに、伊太利人、佛蘭西人に似て感情的の人間であつて、僅かの事には極鋭敏なるやうであるけれども、大事に堪ゆる事が出來ない

いふやうな、そのいふ性質を備へたものであるか。或は又そのいふ観察が果して間違つて居るか。或は佛蘭西人に似て居る所もあるであらうが、又事によると英吉利人に似て居る所もある、といふやうな事ではないか。或は事實上孰方かと云へば感情的の人間であるといふ事が事實であるとしても夫は人種上に具はつて變へることの出来ない即ち色が黒いとか顔の圓いとかと同じやうに、人種といふものから抜き取ることに出来ない性であるか。或は境遇若くは教育の工合によつて變更することの出来るものであるか。此等の事は決して一場の演説を以て解決の出来ることではありませぬ。併しながら又夫に對する幾分かの意見を申すに、強ち蛇足では無からうかと思ふのであつた。

七 生理上の觀察

先づ生理上から考へて觀るに、今話した通りに人種に由て色が黒いとか白

或は身長が低いとか或は脚が短いとか長いとか云ふいろいろの事があります。此等生理上の特質でも、人種の固有性だから決して變らないといふものはない。或度合までは境遇や習慣の工合に由て變更することが出来る。極く近い話が、日本人は足が短いことは一般に認められて居ることで、吾々は椅子に腰かけて列で居ると西洋人とそう違はない、違はないのみか、或は西洋人より高くなつて居るけれども立て見ると此方が大に低くなる、といふことは往々人が經驗する事である。併しながら是の事は日本人が座わるといふ習慣の爲めに脚の發達を害されたに違ひない、といふものは論より證據で、現時は何所でも青年殊に女學生の丈の延びること大に證明することが出来る。

御存知の通り婦人は殊に座わるといふことを、行儀として勤めたのである。現時は小供達が行儀が悪くなつたのではありませぬが、學校でも椅子を用ゐるやうになつて來たものですから男子でも同じ事です。殊に女子の境遇に於て事情が餘程變て來た爲めに丈が延びて來た。現時の十五六歳の女

夫故に人は境遇の工合により影響されるといふ事はあるけれども、又精神の工合に由り此身體の有機組織といふものを變更して行くといふことも決して出来ないことであります。夫で話が段々複雑になつて來ますけれども精神が身體を支配するといふのは、之は其細かい事に就ては今日お話しする時間もありませぬ。けれども、一つ茲に話し度ことは所謂精神の中に於て、人格といふもの、人格といふ言葉は此頃よく人が使ふやうになつて來ましたが、人格といふものは何ういふもので又夫れが體を使つて行くには何ういふ風な關係になつて居るかといふ事でもあります。先づ吾々が物を知覺するときは、心理學者は斯う言うて居る、茲に知覺せらるべき物があつて此方に夫を知覺する心がある。そうして此の知覺せらるべき物が此方へ映する即ち目にうつる。夫を腦の中樞に傳へる、此所に心があつて、此の物を知覺すると斯ういふ風になる。知覺される所の物之

十 知覺、欲望

を客觀と謂ひ、夫から此方に在る心の方を主觀と名づけるのであります。斯ういふ風に心と外界との關係を分けるのであります。併しながら心といふものは外界の物を知覺するといふばかりがその役目でない、其他心中には色々の作用があります。吾々の内心に欲望といふものがある、其時には今の作用が轉倒して例へばコンパスを以て白紙の上に圓を書かうと思へば、其圓といふ思想が此方(心)に出來て來て夫からコンパスを以て其所へ圓を書くのである、或は方形を書くと思へば定木と物指とを持て來てそうして方形をこしらへるといふやうな風に、其場合には方形とか或は圓といふものは初め此方(心)を指すに出來て來る。夫から體の方が動いて書くのであります。夫で今日特にお話しやうと思ふのは外界に在るものを知覺するので無くして、心の中に起つた思想を外部に現はさうとする方でありませぬ。

十一 人格の作用

夫で圓を書くことの生れつき上手な人もあり下手な人もある。又學んでそ
うして上手に成る人もあるであります。然らば何うしたら上手に成る
であらうか、此には二つの必要條件がある。先づ第一には手の練習で、手が
自由に動いてくれなければならぬ。手が自由に動いてくれるといふが最
も必要な條件である。それなれば手が自由に動いたなれば何でも好く
出来るか、手が自由に動いたなれば美麗に圓を書くことが出来るか、字を美
麗に書くことが出来るかといふに夫ればかりでは必しも善い字が書ける
といふことは出来ない。又美しい聲を出さう、好い唄ひ手に成らうといふに
は咽喉の練習が必要である。咽喉から自由に聲が出るやうに成るのが必要
である。けれども夫が出来れば直ぐ善い唄ひ手に成れるかといふとそう
でない。耳の練習が必要である。他人の好い聲を聞かなければならぬ。
そうして自分の聲も聞かなければならぬ、自分で聲を出して自分の出した
聲を聞いて自分の耳の理想にかなふまで聲を練習して行く。若し耳が不
完全ならば聲を聞いても善し悪しが判らぬから自分を矯正して行くことが

出来ぬ。聞く所に由れば書家も手が自由に働いた丈ではいかぬ、始終良い
書を見て居なければならぬ。現に中村先生も支那の書などを澤山見られ
たさうであります。夫で手の自由に動くを、口から聲の自由に出るといふ
こと、同時に耳目の練習が必要である。尙ほ精神上、何うしたら好い圓
を書くことが出来るかといふと、其人は圓といふものに就て綿密な考を持
て居なければ綿密な圓をかくことは出来ない。書いて見て、其でいかなけ
れば又書き直して見る度々書くので其所で練習して美麗な圓が出来るや
うになる。若し其人がコンパスは持て居る、手も自由に動かすことが出来
るが、粗雑な考の人であつて圓といふ考が雜駁であつたなれば奇麗な圓を
書くことが出来ないのであります。方形を書くにしても其通り、楕圓を
こしらへるにしても、書を描くにしても同じことである。寫真をとる人は
向ふに在るものを寫眞するだけの事は少しやれば出来るけれども、寫眞の
上手下手といふものは矢張り其人の美術的思想にある。例へば斯ういふ
所の景色を取れば宜からうとか、或は人を寫すにしても、人が立て居るのを

寫すだけなら誰れでも出来るが、此人は半身がよからうとか、或は人に由ては左向が宜いとか右向き又は眞向ふが好いとか、足は何ういふ風に置くが宜からうとか手は何ういふ風にしなければならぬとか、其人の體の格好に適するやうにするには此の方に美術的思想があつて夫を判断するのが餘程必要であるといふことであります。外部に在るのを内部に知覺する作用もあるが、内部に起つた思想を外部に實行するといふ之を吾々は意志といふ、然れば内部に起つた思想を外部に實行したら夫で意志の作用は終つて居るかといふと決してそうでない。内部の思想を外部に應用して見て、其應用したのが善かつたか悪かつたかを判断して見なければならぬ。故に實行の善悪といふものは夫を實行すると實行しないのみに由らない、實行してそして自分の行つた行が善ければ宜い、けれども少しでも氣に入らなければもう一度行り直さなければならぬ、即ち自分の氣に入るまで行つて見て其結果を判断するといふ所が即ち人格の作用である。實行する所も矢張人格の作用であるけれども、併しながら其實行した結果を観るの

が之が尙ほ必要な作用である。

人は社會に立ていろ／＼な仕事をして居る、商人もあれば軍人も役人もある、種々の人がある。其中に或一部の仕事を……極一部の仕事に熟練して之を司つて行く、さういふ才を持って居る人もあり、又一部の仕事は一向出來ぬが全體を統べて行くことに才の富だ人もある。全體を統べて行く人を通常吾々は上の人、段の高い人として居るのである。さう云ふ人は何ういふ方面に發達した人であるか、自分の思つた事を實行する力が強いのか。孰れ實行する力が無ければならぬが其の結果を判断する力に富だ人である。其富だ人は一局部の人を統べる、統べる人と統べられる者とは此所の差に由る。尤もどのやうな人にでも手足となつて働く部分と、最後の判断を下部分とは各人幾らかは持つて居る譯であります。

十二 人格的部分と機械的部分

前にお話した事をもう一度後へ戻つて今の話との連絡を附けますると斯

ういふやうなことになる。語が無いと語が出来ぬから人格の部分と機械的の部分といふ風に分けて云ひませう。手足となる部分は機械的の部分、最後の判断をする方を人格の部分とします。或は此の人格的の方を主観と名づけて機械的の方を客観と名づけても宜しいのであります。其所で人の精神といふものは知る感ずる、行ふ所謂智情意といふ三つから成立て居るといふことは今日は誰も認めて居ることのやうであります。其知情意といふものが客観的或は機械的の方面に於て現はれたものは即ち科學、文藝、倫理、斯ういふやうなことになる。即ち社會の活動のみならず個人々々の活動に於ても或は科學であるとか或は文藝であるとか或は倫理學であるとか種々に區別して、お前は倫理をやつて居る、我は文藝をやる、科學と倫理とは互に相容れぬなどと言うて居るが、科學、倫理、文藝が三つに分れて居るのは、之は畢竟人生が客観的に現はれたものである。其客観的に現はれたものがあれば其裏面には必ず其全體を統一して居る所の主観の物が無ければならぬ。夫は何であるかといふと、今話した所の人格である。

此の主観的方面に於ても知情意といふものがある、知情意といふものがあるけれども、此方面に於ては文藝、倫理、科學と分れて居ない、夫で全體を統一して居る。例へば政治家であるとか或は大會社の社長であるとかいふ人は、科學、文藝、倫理と其事を別つて居てはならぬ、其人の人格といふものが此等を一緒にして宜しく調和を得て居る人でなければならぬ。

十三 人格の修養

人格にもいろいろありませう、科學なら科學思想に偏して居るとか、或は倫理思想に偏して居るとか、或は又文藝思想に偏して居ると云ふ人もある。そういふのは偏した人格である、偏しない全體を好く摺交せた、うまく調和した、人格を持つて居る人が即ち好く平均を得た人格である。そういふ人格を造るやうに勉むるのが教育家の目的であらうと思ふのであります。夫で尙ほ何うしたらそういふ風に出来るかといふことも亦一の大なる問題である。以上話して來た所の事柄から推して一二の考を得ること出来

やうと思ふのであります。不幸にして小供の時から文藝のやうな事ばかりを聞て居たといふやうな人は、何うしてもさういふ方に偏する、或は小供の時分から科學思想のみを聞て居たやうな人は、自ら其方に偏する斯ういふ弊があるからして孟母隣を選だといふ事があるのであります。餘り科學思想といふものに偏した教育を受けて居るといふと、中途にして反動を起すことがある即ち今度は文藝の事を聞て見ると非常に面白くて其方にズツと走つて仕舞うやうな事がある。

夫でありますから、倫理も文藝も科學も成るべく廣く教へたら宜からうといふのは、普通の考へであります。けれども、嘗に之を廣く教へるといふのみならず科學に基礎を持ち文藝に基礎を持たところの倫理、又文藝でも科學に基礎をもち倫理に基礎を置たところの文藝、科學も初めから文藝上の事でも倫理上の事でも何でも廣く包含した所の科學といふやうに互に其並立するのみならず互に相含み合ふて、甲なる學理を以て乙なる學理を説

明する、乙の學理で甲の學理を確める、又丙の學理で甲乙を説明するといふやうに互に説明し合うやうにするといふことが即ち此人格修養の道であらうと思ふのであります。

十四 結論

夫で精神の修養といふのは畢竟人格を偏頗にしないやうにするのが一つ、夫から又人格の動かないやうにするのが一つである。佛蘭西人が感情的である、日本人が感情的であるといふことは、何ういふ事かといふと、感情的であるといふだけの意味は言葉に現はれて居るが、其感情的であるといふのは心の變り易い人間であるといふので、彼等の人格が動き易い、鞏固でない、偏したものであるといふのである。英國人は活動的な人間で而かも意思の鞏固な人間といふは何ういふことであるか、人格が一度ちやんと定まれば夫が動かない、決して動かないとは言はれない、けれども動くことが少いと、斯ういふ意味である。

元より私は日本人を佛蘭西人に比較して夫で満足するのでありませぬが、
何うか教育をして此人格を動かさないやうにすることを大に勉めたいと思
ふのであります。狭い範囲で鑄型につき込むといふのでなしに、成るべく
廣き土臺を置いて廣き土臺の上に人格を養成して行くといふ事が即ち其の
手段である。例へば人が一つ事を決するには苟もせず八方其利害を考へ、
常に道理に訴へるのみならず、情にも趣味にも倫理上の思想にも訴へて見
ると、いふやうな習慣をつけるといふ事が即ち土臺を廣くするのである。
夫でも多少人格といふものは動く、動いても成るべく動くことを少くする、
比較上動かない所の人格を造るといふことが出来やうと思ふのでありま
す。夫故に此人格といふものが偏しないやうにすることゝ其が變動しな
いやうにすることゝ此二ヶ條は互に連關して、居て精神修養の中に於て最
も必要な事であらうと思ひます。

(千葉教育百七十一號)

第十一 趣味と技術との關係

今日は趣味と技術との關係をお話し致す積りではありますが、私の話をしや
うと思ふのは斯ういふことである、趣味といふ言葉は普通の意味で使用し
たので特に説明する必要はなからうと思ひます、又技術といふことも矢張
り特別な意味は無いのである、極普通の意味で例へば畫工が繪を書くのも
或は又書家が書を書くのも、細工師が細工をするのも、何んでも總て吾人の
手を以てする事を皆技術といふ中に入れたのであります。それで技術と
いふものは、吾人の手の練習を要する譯であるが、固より手と心との練習を
要するのである、所が其の技術の進歩して往く工合、又其人がどれだけ技術
に長ずるかといふ事は、或ひは人に依て所謂器用の人もあり、又無器用の人
もある。天然無器用で練習を積んでも器用になる事の出事ない人がある
或は大に練習すれば幾分か進む人もある、兎に角生れ附の違ひといふもの

がある、練習の多少といふ事と、生れ附の差といふ事とが其人の技術の發達を大體定めて往くのであるが、今茲に生れ附器用である、又練習もする事が出来る境遇に居る人があると假定して、其の生れ附きの器用と、練習の機會があつたならば、それで其人の技術といふものが進んで往くであらうかといふと、私はさうでない、まだ其外にそれより尙ほ大切なる要素があると思ふ。それは何んであるかといふと、即ち其人の趣味である。其人は器用である、樂器を練習させれば直ぐ手が動く様になる、彫刻をさせれば、直ぐ刀が自由に使へる様になる、圖を引かせれば手が自由に動く、然し若し其人にして彫刻に趣味の無い人であつたならば、手は動く、手は動いて色々やつて見るが、どういふものを拵へるのが宜いか分らない。そこで其人の技術といふものは止つて仕舞う、是は只の理窟でない、實際さういふ事實があるので、私は屢々田舎へ旅行しますが其の地方々々に昔からの名産といふものがある、モ少し具體的に言はぬと分りませぬが、例へば、十數年前でありましたが佐渡へ往つた事がありました佐渡は佐渡で又其所の名産があつて、銅の花活香

爐といふやうな物、其の銅といふのが一種特別な焼き方で自然に色が出る、餘程面白いものである。所が大變に面白いものであるけれども、それが其の割合に發達して居ない、何せ發達しないかといふとそれを拵へる人が昔の儘をやつて居て新らしい意匠を考へ出すといふことが出来ない、物は面白ければ、意匠が早既に古びて仕舞つて、現時の人の氣に入る様にそれを段々改めて往くことが出来ない、それでも古い趣味を好む人もあると見へて、ポツ／＼賣れて行く、向ふの人から言へば、別段氣の付かぬ事であらうけれども外から見ると現時の趣味に合ふ様にしたら宜いであらうと思はれるのである。詰り技術は發達して居るのであるけれども、趣味、意匠が發達して居らぬ。こゝにいふ様な事は、又外にもある、例へば昔から小倉織といふものがある小倉といふことは私は反物の名と思つて居つた位で、昔は國の名を覺えるよりは反物の名を先きに覺えた位である。博多といふのも、反物の名として知られて居た、随分盛んなものであつた、それも同じ理窟で、今日は決して物は衰へたのでないけれども、趣味、意匠が進んで居ないとい

ふ事が販賣上一つの大なる障害の様に聞て居ります、といふ譯で、其人の趣味が發達し意匠が進んで來ねば、其人の手足が十分動いても、其人の技術といふものは進まないものである。モ少し通俗の例を採つて之を言ふて見ると、例へば家の内の飾りから、庭の作り方も或は箒を持って家を掃除するとか、庭の芥を取る、といふ様なことは、誰でも出来る、併し芥を取るといふ事りが決して掃除でない、矢張り芥を取つた後、後を見返つて確に清潔になつたかを見定めねばならぬ。庭なら斯ういふ所へ木を植ゑたならば宜からうとか此所に石を置けば宜からうとかいふ意匠が善くないと、毎日草を取て掃除をして、清潔にしたばかりでは面白味が無い。面白味がなければ、物足らぬ所があるといふ様な譯、そこで畢竟技術といふものは手足を以て我々が練習して往くものであるが、それを覺えて自分がやつて見て、これで宜からうかどうか最後の決定をせねばならぬ。其人の趣味が發達すれば直すべき所は直すであらうが、趣味が發達して居なければ假令宜い庭を拵へることは拵へても、それを直して往く事をしない。或は我々が文章を書くに

しても矢張り同じ理窟で、文字は知て居る、文字の並べ方も知て居る、けれどもそれを書いてさうして讀んで見た所で、此處が良いだらう此處がいかぬだらうと評するには此方に趣味の必要がある、趣味が發達して居れば、自分が讀んで見て、それを直して往く事が出来るから従て其の文章といふものが、誰にも能く分り、又趣味を以て讀まれる、只吾人が文字を並べて書いた丈けでは不完全である。之を又或る外の方面から喩へて言ひますならば經濟上の事も同様である。經濟には此頃では豫算といふ事が普通のものに成つて居る、又人も豫算の必要といふ事を覺えて來た。併し豫算といふものは大體のもので、豫算を立てた通りに支出するといふ譯にはいかぬ、どうしても豫算と實際との差異が出来る。先づ大體の豫算を立て、さうして豫算に依て一家の會計なり國家の會計なり夫々費用を支拂つて往く。所で支拂つた丈けではいかぬ、今話した通り、豫算通りにキチンと往つて仕舞へば宜いが、さういふ事は大抵ない、従て決算といふものが必要である。そこで豫算と決算とがどれ丈け

違つて居るか、又何せ其處に違ひが起つて来たかといふ事を、後で見定めて置く事が必要である。さうしないと、又將來の豫算を立てるといふ事が出来ない。將來豫算を立てやうといふには、善く決算と豫算との比較をしないと、いふことが必要である。其の將來の必要上から言ふたならば、決算といふものが善く出来て初めて豫算といふものも亦生きてくる譯である。そこで單に實際上の必要から言へば、趣味は實際を離れたものであるけれども、又一方から考へて見れば、決算の様なものである。自分が初め斯ういふ事をしやうといふ一つの計畫をするさうして其企に従て彫刻家が彫刻をするのでも、畫家が繪を書くのでも、文章家が文章を書くのでも、其の計畫通りにはいかぬ多少違ふ所が出来る。其場合に一つ拵へて眺めて見る、さうして其處を直して往くといふのが、最も大事な所である。其時に善く直す事が出来なければ、假令ひとれ程手が加はつてもそれが生きて来ない、即ち終りの仕上げといふものが出来ない、即ち其處迄は大分うまく往つたが、仕上が生きて来ない。同じ豫算と文章の並べ方と、同じ彫刻と文章の並べ方と、同じ

又斯ういふこともある、或る裁縫の専門家に聞いたのでありますが、其人は斯ういふ事を言ふて居た、日本の仕立屋でも、縁を斯ういふ風に縫うとか、何處を飾るとか、さういふ様な事は決して西洋の仕立屋に劣らない。西洋の仕立屋と日本の仕立屋と違ふ所は何處にあるかといふと、先づ第一初めに型を拵へて斷つといふことが大事なことで、之を實地の事に喩へて言へば、豫算を立てる所だから、初め切れを斷つといふことはこれが必要だといふ事は無論の事であります。此所にも巧拙がある。それから其次はどういふことかと言へば假縫をして来て身體に合せて見る、この時が大切なのである。日本の仕立屋では十分に假縫は出来るが、假縫をして此れを見て批評する眼がない。故に身體に合せる事がキチンといかぬ。それで或る時其人が普通の仕立屋に仕立させて假縫の時に見て自分で彼を批評し注意を與へました、それで宜い格好に出来ました。縫ふのは誰が縫つても同じ事で、只假縫をした時批評するのが最も大事である。それで私は或る仕立屋に言ふたことであるが、日本の洋服屋は、自分はどういふ風をして居るか

といふと日本服を着て居る、自分が日本服を着て居て西洋服に對する趣味も有つたものでない、ソレデ西洋服を仕立ることは出来ぬではないかと。此れには一言もない筈である。元來自分に趣味が無くて、此處を斯うすれば格好が善くなるといふ考が出る筈が無い。只擬似的に人から聞いた儘をやつて往くのではないかぬ自分が始終洋服を着て、ハイカラ位にならなければ、人の衣服を拵へることは出来ぬ譯である。それから又料理屋杯でも矢張り同じ事と思ひますが、自分が始終香物で茶漬を食べて居て、さうして美味な料理を拵へ様といふことは出来ぬことであらうと思ふ。上等の料理人は自分が贅澤して、自分が贅澤の味を味はつて來なければ、良い料理といふものは出来ぬことと思ふ。總てさういふ様な譯で趣味の發達といふ事と、技術の發達といふことが始終伴つて往く譯のものである。此理窟を以て考へて見ると道德といふのも、人に親切をせねばならぬ、慈善を行はねばならぬ、或は親に孝行せねばならぬ等、是は普通の倫理上必要な事で例へば數學の四則(加減乗除)の様なもので此等は固より必要なことで

ある。けれども倫理も少し複雑になつて其場合々々に適切な倫理的規則といふものを拵へて、此所では服従をしなければならぬ、イヤ斯ういふ時には權利を主張しなければならぬといふやうに、時中の宜しきに適ふやうにしやうとならば倫理も頗る煩雜なものであらうと思ふ。固より一通りの倫理思想といふものは人には無ければならぬものであるけれども、畢竟それ以上の事になつて來ると、道德家と、不道德家といふ區別はどういふ所にあるかといふと、必ずしも其人が大酒するから不道德である、大酒しないから道德家である、或人は貧民を助けてやつたから道德家である、助けてやらなかつたから、不道德家であるといふ様な者ではなからうと思ふ。其人の道德趣味といふものが發達せねば道德家にはなれないと思ふのであります。固より人を助けるといふことは決して悪むことではない、慈善を行ふといふことは決して悪むことではない、けれども、慈善を行つても人を助けても、或は自分が禁酒禁煙を行つて居つても其人の道德的趣味といふものが、發達して居なかつたならば、其人は悪人でないにしても、高尚な道德家ではな

いといふ事になる。それでさういふ點から見ると、道德教育の主眼とする所の最も重大なる一つの點として、道德的趣味を養ふといふ事がなければならぬと思ふのであります。今日の日本の状態を考へて見ますと日本の道德界の事に付ては色々批評もある、日露戦争以後は、所謂日本流の道德といふものを大に賞賛する者が出来て来たといふ様な譯で今日の状態では日本といふものは褒貶の間に迷ふて居る。一方からはエライと賞められ、一方からは青年が墮落して居ると擯斥せられて如何にすれば宜しいか一寸分らぬ、各々自分の考の無い者は迷はざるを得ない状態である。賞められたり叱られたり、どれが本當か分らないといふ様な有様である。青年が贅澤になつた、或は所謂東洋流の豪傑膚で天下を一吞にするといふ様な議論を吐いて、高聲に詩を吟じてさうしてステッキを振廻はして歩くといふ様な、さういふ様な元氣はなくなつたといふ事は、事實の様であります。さうして香水でも塗るとか、或は衣服を奇麗にする、或は洋食でも喰べるといふ様な風になつたといふ事は、事實の様である。併しそれが果して墮落で

あるか此等の事實のみを見てそれが國民將來の墮落を示して居ると言ふのは早計であらうと私は思ふのである。又一方から言へば随分無作法であつた學生が現時は大分秩序も出来て来るといふ様な譯である。それから又幾年か前の青年學生に就て見るに社會の秩序がまだ立たなかつた時には昨日迄の素寒貧の書生が一躍して大官になつたといふ様なことは随分あつたものである。それで言はゞ投機心が盛んであつた。従てステッキを振廻し、或は詩を吟じ、天下の事を論ずるといふ様な事もあつたのである。けれども、さういふ様な事は長く存在する性質のものでない。それで社會に漸次秩序が出来るに従て、さういふ事は止んでくるといふのは、自然の勢である。それが或人の目には、學生の元氣が無くなつて、所謂骨抜給になつて仕舞つたと見へるのでせう。素より教育制度といふ者が出来てくれば型に入れた様な者が出来てくる傾向は幾等かある。さういふ風に拵へるのであるからさういふものが出来て来るのが當然のことである。けれども、それならばそれで以て人間といふものが皆其型以上に發達すること

は出来ないかといふと、さうでない。百人が百人共豪傑であると云ふやうな、さういふ事は望まれないことである。國民擧つて豪傑であるといふことは歴史から考へても望まれるものでない。普通のものには型で作つた様な人間であつて宜い、其中に又志のあるものも出て仕事をすると云ふのが、それが私は國民の平常の有様であると思ふ。私はさういふ點に於ては現時の學生の風に對しては、それ程憂へて居ないのである。固より學生の中に犯罪人が出来たとか、悪るい者があるとか、それを決して構はないといふのでない、それ等は悲しむ可き事である。併し乍ら國の變遷の工合で何處の國でもあることで、等閑に附して置かうといふのでないけれども、又出来たからと言つて、國家が傾きつゝあるかの如くに思はないといふのでそれを堪へ忍んで盡力すれば取り去り得べきことであると思ふのであります。今日日本が世界の強國となつて、さうして國の交際上に於ても強國として取扱はれる様になつたといふ點から見ると、さういふ高い點から見ると日本は總て不完全、何處を見ても不完全である。殊に日本人の趣味といふも

のが餘程まだ低いと思ふのであります。先づ新聞紙といふものは、國民の一般の思想、或は其の趣味を現はして居るものと見れば、新聞にある廣告といふものは國民の趣味を最もよく代表したものであると思ふ、何せなれば廣告者は成る可く人の注意を引かうと思つて書くのであるから、廣告といふものが趣味を現はすと見て宜からう。其の新聞の廣告といふものを見ると、實に人の前に出せない様な文章は勿論、書もある、随分ひどい書を出して、さうして覗として恥ぢざるのみならず、得々として、それで自分達が金儲けをする材料にして居る。世人も亦敢て批難をしないといふ所を見ると、あれが矢張り世人の注意を引いて居るのであると見なければならぬ。又先年日露戰爭中に、色々日本軍と露西亞軍との事に付て、バック流義の書が日本でも露西亞でも新聞に出た事がある。どちらも孰れマアあゝいふ態度であるのだから、敵を下げて自國を上げるといふのは、當前のことであるが、其書の書き方といふ者が、日本の書といふものは随分惡趣味で見られない、露西亞のは、趣意の良し悪しは扱置いて、書として見られる。何處に違ひがある

かといふと、趣味に違ひがある。露西亞は決して歐羅巴の中で發達した國とは言へないけれども、兎に角外の事は置いて、新聞に出て居る書を見ると、露西亞の方の書が數等宜いのである。或人が斯ういふことを言つた、日本の新聞の廣告には美觀といふものが小ないと、けれども自分の考へには美觀が少ないも多もない、趣味が其處迄發達して居ないから、さういふ所に考が及ばない。又費用の點や色々の點からでもあらうが兎に角日々吾人の目に觸れる所のものが、どちらかと言へば趣味の無い、惡趣味の者が目に觸れて居るといふ状態である。それから日常の生活杯から考へた所で、所謂カルチュア(教化)といふ、即ち國民の趣味を生活上に應用したカルチュアといふものが發達して居ないのである。此事は色々社會上の實際問題と聯關して居る様に考へるのであります。それで今日では成る可く西洋人には内部の恥を知らせない様に良いホテルに泊らせるとか、西洋人の前ではどうするとか、斯うするとか、恥を隠す様にするといふ風に世人が勉めて居る様である。これも經濟上の點から仕方なくさうなつて居るので

ありませうが總て包み隠すこと無くして、開放的に日本内部の有様を其儘家族生活の風をスツカリ世界に見せたならば世界の人がこれをどう思ふであらうか。日本人は悪人だとは思はぬであらうが、日本人の趣味は發達して居ない、幼稚なものであると思ふであります。それで個人道徳に於ても社會道徳に於ても、趣味の發達といふことが、これが實際道徳の發達上にも大なる手段、大なる力になる譯であると思ふのであります。

(丁酉倫理第五十號)

第十一 趣味と技術との關係

第十二 疑惑と信念

今日は疑惑と信念といふ事に就て御話をしやうと思ひます、其言葉の意味は別に説明をするまでもなく明なことで、一は物事を疑ふことで一は物事を信ずることであり、それだけの意味は極く簡單で明瞭な事であり、すが、扱これを吾人が社會に對する精神上の修養として見る時は決して簡單な容易なことではありません、畢竟疑惑と信念の用ひ處その宜しきを得ると然らざるとによりて社會の秩序の興廢も大に支配せられるわけであり、故に今より少しく卑見を述べて見ようと思ひます。

それで是等のことに就て今日迄世人の注意を惹き又世人の解釋を試みたことに就ては一々今此を繰返すの必要がなからうと思ふのでありますが、一言にして之を言へば所謂世道人心とでも云ひますか社會の思想と云ふものは區々別々で、社會を貫いて居る處の思想が缺けて居ると云ふことに

歸する譯で此を西洋などの状態に比較して見るに西洋には宗教が盛んであります、即ち基督教が盛んであります、大體に申せば西洋では基督教の信者であるか然らざれば不道德の人であると云ふ、やうな考が一般である、素よりそれは通俗的の考であるけれども畢竟社會全體が基督教と云ふ宗教で統一せられて居る譯であります、さう云ふ風になつて今日迄來たのであります、處が近頃此學術が盛んになつて來たので所謂傳說的の基督教と云ふものに以前程の勢力がなくなつて參りまして基督教に言ふて居ることでも色々又理學上から考へて見ると批評しなければならぬことがあるやうに所謂基督教に對する疑惑が盛んになつて來たのであります、それで實は西洋では十九世紀の終りから廿世紀に懸る處の社會の状態は此疑惑の爲めに大いに苦心して居る譯であります、併ながら永く人心に浸みわたつて居た宗教の勢力と云ふものは表面に於てこそ斯の如く動搖してはまだ勢力を持つて居るので、それで矢張社會が統一を保つて居る譯であります、日本に於いてはドウであるかと云ふと宗教に就ては逆も西洋と比較する

ことが出来ない、日本は昔から神ながらの道と稱へらるゝ神道、それから又佛教、儒教等の如き宗教がありますから、逆も西洋のやうに統一的思想と云ふものは出来て居らぬのであります。若し今日日本の歴史上に於て一般に人心を統一して居るものを云へば、所謂武士道である、其武士道はドウ云ふものであるかと云はれるならば、説明は甚だ困難でありまして、是を説明することが六ヶしいけれども、矢張り此武士道と云ふものが祖先崇拜と云ふことに結合し、或は日本人の勇氣と云ふものと結合し、或は宗教とも結合し、色々なる状態になつて現れて居る中には、所謂普通世に發達したる武術の道、此を言ふこともありませう、けれども此のみを必しも武士道と云はなくも宜いかと思ひます、一種の忠君愛國、祖先崇拜、勇氣と云ふやうなもの、集まつたやうなものが永く日本人の精神を支配して居つた譯であらうと思ふのであります、併ながら是も今御話したやうな譯で、理屈から割出したものでなくして、歴史上漸々發達して來たものでありますから、其武士道はドウ云ふものであるか、何年頃に誰が言出して、何處で發達したものであるか

と云ふ風に詳に之を叙述すると云ふことは、餘程困難であるのであります、國民中に發達したる處のさう云ふやうな一種の國民の習慣であるのである、是も過去の歴史に於て日本は世界の他の部分との交通と云ふものが比較上少なくて、殊に道德現象に於ては交通が殆んどなくなつて居つたと云ふやうな譯で、外の國と隔離して居つたので、それで所謂日本人固有の道德と云ふものは益々發達して來た譯であると考へる、然るに今日は隔離と云ふものがなくなつて來て、世界の日本となつて、即ち世界に對して生活すべき状態になつたのである、それで此の永く外國から離れて發達した國が今廣く西洋に發達した思想、西洋に發達した文明と云ふものを直接に受け入るゝやうな風になつて來たのみならず、日本在來のものとも相互に混すと云ふやうな風になつて來て居りますから、在來の習慣を基礎として直ちに日本の道德を立つると云ふことは困難になつて來たのである、即ち一言に之を言へば、世が批評的になつて來たのである、又批評的にならなければならぬ状態になつて來たのである、そうすると今迄は生眞に發達したので

別に批評もせず又批評する必要がなくして自然に發達して來たものが今日には色々な批評に出遇ふて其れが爲めに間違つて居つたことを發見することもある。又批評に出遇つても其の爲めに益、光を發して來るやうなこともあらうが兎に角今日は批評的の時代となつて來たのである。それで此の疑惑なり煩悶と云ふものが起つて來ると云ふのは止を得ぬ自然の成行である。

そこで其疑惑と云ふことに就て申して見ますると、疑と云ふものにも二種ある。詰りものゝ研究に伴つて來る疑惑と云ふことゝ實行に伴ふて來る疑惑とである。此等は同じ疑惑であるけれども其の起つて來る場所が違ふ。随つて疑惑と云ふことの役目が少し變つて來るのである。或る事の研究に於ては疑惑は知識の母であるなどゝ古人も言ひましたやうな譯で疑惑のない人は知識が進まない、何でも人から聞いた事をア、そうであるかと思ふてそれを記憶して居る丈けであります。然るに又或る人は人から聞き其聞いたことは覚えて居るけれども其の中にも何か理屈に合はぬことがあ

るときは疑惑を起して或は研究し或は人に聞き事實を質して其疑惑の解決を試みるのである。又其れに次で尙ほ他の疑惑が起つて來る、それも亦解決すると云ふやうな譯で、さう云ふ風に物の理を研究して行くのである。學理を研究する人はドウシてもそうあらねばならぬ。若しさう云ふ方面から見るときは疑惑と云ふものは實に知識の母であります。疑と云ふものは實に知識の母であります。處が實行と云ふ方面に於ては疑惑と云ふものは違つた意味を持つて來る。實行と云ふ方面に於ては疑惑は最も大なる障礙であります。何か斯う云ふことをしやうと一度極めたことに就て疑惑が起るやうでは實行が出来ない、自分がチャント極めたとは必ず其通り斷行せねばならぬ。従つて其處には多少所謂獨斷と云ふやうなことも這入つて來ねばならぬのでありませう。故に實行の方面に於ては疑惑の反對で研究の方には禁物なる獨斷と云ふことが必要である。是がなければ實行と云ふことが出來ないのであります。さう云ふやうな風に疑惑と云つても兩方面ありますから必ずしも疑惑が悪いと云ふ譯でないのである。けれども今日のやうでは其疑惑の作用が轉

倒して居りはしないかと云ふ疑が起る、研究の方面に於ては疑惑が少なくして實行の方面に於て疑惑が多いではないかと思ふ、今日の世の中では殊に日本などは残念ながら學術上の進歩と云ふものが未だ淺薄でありまして西洋にでも行つて西洋の大家の言つたことを持つて來て報告すると疑念なく西洋人の言として一般に容れられて仕舞ふ、そこに疑惑がなければならぬ處であるのに疑惑が起らないのである、それ故に日本では大家になることは比較上容易い、西洋の書物を少し讀んで其れから引用でもしてそのうして翻譯でもするとそれが世に用ゐられ名を知られると云ふ譯で直ぐに大家になれる、と云ふのは世人は研究の方面に於て疑惑を持つことが少ない世人の心が批評的でないからであります、Originalでないのであります、學者たるものは大に戒心せねばならぬのであります、尙ほ言ひ換ゆれば世人の心は正直な極く生眞に近いので、例へば人から斯う云はれるとヒョツトそれを受ける、二度も三度も思慮し或は此の方面から或は彼の方面から考へ疑惑に疑惑を重ねて決定してからでなければ受け容れないと云ふや

うのことは餘程素養がなければできないのである、是等は何れ現時の状態で社會が進んで行くならば追々發達するのであつて今更嘆息することはないが實際そうであると考へるのである。

然るに斷行の方面に於てはドウであるかと云ふと此の方面に於ては種々遲疑巡逡し疑惑が即ち煩悶を生するのである、今日世間に宗教と云ふものも種々様々であるが、日本在來の無宗教主義の倫理もあれば所謂學術的修身の説もあると云ふやうな譯で青年が段々年もとつて少し理屈を考へて分るやうになつて來ると疑惑が起り始める、昔ならば子供の時分から四書五經で敲き込まれたのであるから理屈が分るやうになつても四書五經が土臺となつて行くのであるけれども今日は實際別に敲き込まれると云ふこともなにもなくして様々のことを學校で學ぶ、物理も學べば西洋語も學ぶ、或は文章も習ふと云ふ風で極りがなく發達して行くから二十歳前後になると少し物の理が分るやうになる、それで理屈を考へ出すと、イヤ、コナラ

の人は斯う云ふ風に言つて居る、アチラの方は斯う云ふ風に言つて居ると

云ふやうなことでドレを取つて宜いか分らぬ、それならば人の言ふことを退けて自分で大悟徹底すると云ふ處迄發達するかと云ふにそれも出來ない云ふやうな譯でそれで煩悶が起る譯であります。今日の話は青年諸君に對して話す積りでありますから話の具合がそう云ふ筋道になつて行くと思ひますから一言御断りして置きます。

心の性質上、心と云ふものゝ構造の上から疑惑の種類及び其れに對する精神上の心得と云ふやうなことを話して見やうと思ひます。先程御話し申した通り研究の上に於ては疑惑が必要である、疑惑がなければなりません。又断行の上に於ては疑惑は一障礙物であると云つても宜いのであります。人の心と云ふものは知情意の三つに分つて居ります。然るに是に就いては又此等凡ての基礎たる自我と云ふものを知らねばならぬ、自我と云ふことに就ては是を大體より申すと二説ある、是は西洋でも殆んど同じことであら、まず其二つと云ふのは自我と云ふものは變らないもので、斯う云ふ知情意の働きを主として行くものであると云ふ考で、自我と云ふ主人があつ

て或は知り或は疑ふと云ふのである、他の方面に於ては別に自我と云ふ主人があるのではない、詰り色々な感じが寄り集つて或は疑惑となり或は夢となり或は感覺となり或は想像となり或は記憶となり或は欲望となる。云ふやうな風では是は皆な其物が寄り集まつて此身體に働きをして居るので別にチャンネル極まつた自我が常にあると云ふものではない、斯う云ふのである、畢竟するにさう云ふ不變の我があると云ふ説はさうでない種々様々な精神作用と云ふものの寄り集り、其れが働きをするのである、斯う云ふ説である、素より此れはドナラが正でドナラが不正と云ふ風に一刀兩断に定めて仕舞ふことは到底出來ないけれども併ながら此所に特に諸君の注意を促し度ことは意思の作用と云ふものは知識の作用と異つて居る、是云ふことは、それはドウ云ふことかと云ふと物を知ると云ふには何時でもコナラに何か標準思想がなければ物を知ることが出來ない、コナラに標準があつて其標準に當嵌めて物の辨別を爲すのである、例へば爰に机なる机がある、花なる花がある、と云ふやうなことに對しても其机なり花なるこ

とを辨別するには自らコチラに標準思想がある斯う云ふ形をして斯う云ふ用を爲すものは机である、斯う云ふ色をして斯う云ふ形のものには花である、と云ふ標準から見るのである。然るに意志の作用と云ふものは是と反對で意志は常住不變的のものでなく全く一時的のものである、其一時的のものであると云ふ意味は是を平易な事柄で云へば腹が空いて来た、腹が空いて不愉快になつて来るから腦を絶へず刺激して何か取つて食べやうと云ふ念が起つて来る、それから何か物を採つて食べる、食べて満足して来る、モイ腹が満ちて来るから欲望がなくなつて仕舞う、即ち一時低氣壓が起つて来たけれどもそこに風が吹いて来てそれで空氣が平均して仕舞つたからモイ濟んで仕舞つたと云ふやうなことになる。勿論再び低氣壓が起つて来ると云ふことがあるけれどもそれは別なこととして、そこで飢と云ふことから起つた感覺が満足されて一段落付いた譯である、或は學問上人と談話をして居つて何か不服なことがある、或は彼の人に負けて残念だと云ふやうな念が起つて来る、さうして大いに勵んで彼の恥辱を取返さねばな

らぬと云ふことで一心不亂に勉強して幾年かの後には自分の目的を達して前の恥を雪いで仕舞ふ、そこで又意志がなくなつて仕舞ふと云ふやうな具合に意志の性質と云ふものはさう云ふものであるから、斯の如き慾望が動機となつて起つて来るけれども其動機と云ふものは實行に由つて満足を得ればそれをなくして心は復た元の平穩の状態に歸つて仕舞ふ、知識の方で見ると重力引力と云ふものが空間の距離の自乘に轉比例に働いて居ると云ふことが一度極ればドコに行つても變らないと言ふ風に極つて居るが意志はさう云ふ譯ではない一旦起つてもそれが満足すると云ふと直ちに止んで仕舞ふのである。又起つて満足して止んで仕舞ふと云ふので、これが意志と知識と違ふ所である、總て活動するものはさう云ふやうな譯でありまして場合／＼に應じて轉々して行くのは是は意志の性質であります。

それで人が妄念又癖念と云ふものを去つて心が廓になつて物に執着することを掃ひ去つて仕舞つたならば、今御話したやうな風に慾望が起れば其

慾望の起つて居る間は働いて満足すれば復止んで仕舞ふと云ふやうな風になるのであります、そう云ふ様な働き方は純粹意志の性質であります、併ながら此世を渡つて行くには餘り淡泊になつては色々不都合なこともある、そこで斯う云ふことになる其意志と云ふものが餘り淡泊になると世渡には適せぬ、かう云ふと何んだかチヨト語弊があるかも知れませぬが結り斯う云ふやうな意味であります例へば爰に黄金と云ふ金がある、此黄金と云ふものは結構なものである黄金の貴いと云ふことは今更申すまでもない然るに純然たる黄金は餘り軟か過ぎて細工に用ゐるには適しない、そこで他の金屬を混じて是を硬くするのであると云ふやうなことを聞いて居りますが、今御話するのもそう云ふやうな意味で人は極く純然たる意志になつて仕舞つて慾望或は執着と云ふものを掃ひ去つたならば純白と云ふ方面から言へば純白には違ひないがそれでは此世の中に出て働いて行くに少し不都合な處があるので、それで他の金を混ぜて來ねばならぬ、意志に少し硬みを與へねばならぬ、それは何んであるか即ち意志以外の方面から

其人の意志に常住的の性質を與へて行かねばならぬと云ふことである、今申した通り純然たる意志は常住的のものでないから其場合々に應じて意志の方向が變るものでありますからそれに常住的の性質を與へて世渡りをするのに都合の宜いやうな風にせねばならぬ、それはドウ云ふ方面から助力を借りて來るか、と云ふと一つは知識であります、一つは感情であります、併し感情と云ふやうなものは非常に變動の劇しいものであります、情が變化すると云ふのはモ一世間の諺になつて居る位で情と云ふものは變化する又變化するものは即ち情の様であると云ふ程である、殆んど情と變化とは同一の如く言ふて居る程變動の劇しいものであります、此變動する處に常住的の性質を與へて行くと云ふものはどうしても知識でありま、す、水面に浪が打つて居る其表面に長い竹なり棒なり極く荒い網のやうにして置くときは其棒の爲めに打つて居る浪が押へられて、烈げしい變動が止まると云ふやうなことがあるが例へて見ると意志と感情と云ふものが非常に變動し易いから知識と云ふ方面から考へて行きますると情の變動

を抑へて行くことが出来る。普通知識と云ふものは矢張り意志修養上に非常に大切な要素になつて来るのであります。

然るに吾人の知識と云ふものは限りのあるものであります。尤も十九世紀から二十世紀に懸けて自然科学が大いに發達して來た爲めに空前の大發明も澤山ありまして實に今日は驚くべき世界になつて來ましたが、併ながら今日ある處の知識と今日の人類が持つて居る心の要求とを比較したならば知識と云ふものは人生の要求の總てを満足させることが出来るかと云ふと到底出来ないのである。知識が發達すると同時に要求が段々發達して人の要求と云ふものは何時でも知識の上にある様である。橋を架けやうと思ふならば今日は工學と云ふものが發達して居るから能く橋を架けることが出来る。又建築法に従ふて家を建てることも出来る。機械によりて着物を縫ふことも出来る。衛生的に食事をすることも出来る。又醫術も大變に發達したけれども吾人は此複雑なる社會に生れ種々様々な要求をしてまだ大に不足を感じて居る。電車の走るのではマドロイから空中を飛んで行

く機械を拵へやう。或は飛んで行つたり驅けて行つたりして話をする。云ふのは面倒だ。居ながらにして千里も萬里も先きの人と話をするやうにしよう。只話をする許りではまだ面白くないから先きの相手が眼に見えてさうして話をするやうにしよう。と云ふ風に段々人の要求が進んで來る。それで人の要求は、知識が實際應じ得るよりも餘程先きの方に行つて居る譯であります。是等のことは學術上の話でありますけれども殊に社會上政治上の事柄になつて來ると複雑であるから政治と云ふものは例へば三十年四十年經驗のある人でも毎日新しい事變に遭遇して行く。と云ふことでありますから連も先例を推して行くことが出来ない。新しい事變がドン／＼起つて來る。それに對して一々處分をして行かねばならぬ。それ故に知識と云ふものは感情及意志の變動を抑へて意志に常性的性質を與へるものであるけれどもそれだけではマダ足らないのであります。それで人には知識以外に決斷と云ふものが要るのであります。決斷と云ふものはドウ云ふものかと云ふと例へば政治家は何か新事變に對して處分しなければならぬ時

に先例を探しても其先例なるものがない、然るに一方では其の處分の仕方に由つては國民に大幸福を來すこともあり又大不幸を來すこともあるから其の所に非常な心配が起る、それで出来る丈け過去の經驗を参考して考へた上に一つ爰に決心をせねばならぬ、決心をした以上は必ずそれを斷行せねばならぬ、或は斷行する前に種々の意見を取捨してそれを一ヶ月二月、或は一年も二年もかゝつて研究して見ると云ふことの出来ない場合も多いのであります、さう云ふ場合には自分で是に對して腹を極めねばならぬ、是が自分の考へた處では最も良い方法であると極める以上はそれを獨斷で極めてそれを實行して行くのである、獨斷と云へば學理の研究などでは甚だ嫌ふものであるけれども又實行の方面に於ては此が必要である、獨斷は一種の決斷で此は先程も御話して居る疑惑と云ふものと正反對で一度極めて仕舞つたならば此が最も良い法として行ふて行くのであります、茲に於て信念と云ふものが必要になつて來る、これは一例でありますけれども今御話したやうな事は決して一度では濟まぬ、其次には復新事件が起

る、或は又斯う云ふ事變が起ると云ふ風にして種々様々なことが起つて來る、そこで昨日は昨日、今日は今日、明日は明日と云ふ風に極く大平樂に構へて一日送りにするのも宜いのであるが、それでは昨日行ふた事と今日行ふ事とは矛盾するやうなことが出来るかも知れませぬ、昨日は氣分が良かったから豪い氣焔を吐いて居つた、随つて是々のことを斯う云ふ風に處分した、今日は氣分が悪いから昨日に反して誠に臆病になつて居て何もするところが厭だ、其次は復大いに氣分が良くなつて大膽なる處分をする、と云ふな譯で日々氣分に依つて西に向いたり東に向いたり大きくなつたり小さくなつたりするやうでは世人がその人のすることを信じなくなる、それでドウしても主義を貫くと云ふことがなければならぬ、素より斯う云ふ複雑な世の中であるから貫きたる主義がある、と云つたからとて、メートル尺を以て物を計る様に定める譯には行かぬ、社會に對する事業と云ふものはソウ簡單には行かない政治家として自分の心に一つの曲尺なら曲尺、メートル尺ならメートル尺があつてそれをどこ迄も實行して行くと云ふ程簡單には

行かない、縦令一貫したる主義であつても多少臨機應變と云ふことも這入つて來ねばならぬ、ドレ丈け臨機應變にしてドレ丈けは主義を貫ぬくか其兩方の釣合、そこが人々の教育其人の性質其人の品性等に由つて定まつて行く處であります、或る人は臨機應變が過ぎて又或る人は餘り窮屈で、伸縮が利かない、此複雑なる世の中に居て一本主義でやられては堪へられぬとて其人を信任しないこともある、畢竟それ等はドコ迄は一本主義でやれるかドコ迄が臨機應變でやれるかといふ釣合問題になります、が兎に角或る主義がなければならぬといふことはそれで分かる。

さて其主義がドウしたら出來て來るか、學理といふものが其主義を與へるものであるかと云ふと今も申した通り世間の事には必ずしも學理が主義を與へるといふことではない、又過去の經驗が其人の主義を定めるかと云ふに日々起つて來る事變に對しては恒に過去の經驗にも依ることとも出來ない、畢竟人には一つの信念と云ふものがなければならぬ、私の申す信念と云ふものは基督信者がゴッドを信じて居るのも信念である、佛教信者が佛

陀を信じて居るのも信念である、又忠孝といふことが心の核と成ることもある、此れを木の實に喩へて見ると實の中に堅い核があるやうに心の核となつて居るのである、忠孝と云ふものが社會に於ける個人の心棒となつて居ることありませう、或は又或る種の宗教を奉じ又禪の修養でも其他王陽明流の道徳でも孔孟でもさう云ふ學理に由つて一つの信念を持つて居る人もあるのでありませう、或は道學などに依つて主義を立て、信念を持つて居る人もあるのでありませう、色々な信念の類がありませうけれども兎に角何か各個人の心を恒に寄せる處がなければ學理上の知識ばかりでは種々様々なる人生の要求に應ずることが出來ないのであります、故にさう云ふやうな方面から比を個々別々に見れば所謂獨斷と云ふことになる、其獨斷と云ふものが長く通じて居る處の方面から見れば所謂主義或は信念となるのであります、ドウしても信念即主義と云ふものがなければ意思が強くなる、ことが出來ないのであります、往々世間に彼人は誠に結構な人間であるけれども意志が弱くて役に立たぬと云ふやうなことがある、或は物に

執着しないと云ふは、是も結構であるけれども物に執着しないばかりでは此世の用をして行くことが出来ないのであらう。此社會の用をして行くのは執着しない極く奇麗な意志を作り信念に依りて堅めた、そう云ふ意志が必要なのであります。

それで意志と信念といふもので其變動を防ぐといふ所まで御話したのであります。唯變動を防いだといふだけではまだいかぬのである。何故なれば變動を防いだといふだけでは意志が益發達して行くといふ事には及んで居ないからである。意志が變動せずして常なる事を得るのである。共その意志といふものが益發達して種々の方面に働いて行く様になるといふ所謂積極的の方面にはまだ論究して居らないのである。其方面に於いては所謂情である。情といふものは倫理宗教の方面に於いては昔から排斥されて居ることが多い様である。情といふものは人を迷はすものである。今日でもあの人は感情的であるなどと言うて感情的といふことは其人が常なる事を得ない、どう云ふ風に變じて来るか分らぬ道理以外に或は喜び或

は怒るといふ即ち當てにならぬといふ様な事を意味して居る。勿論此感情といふものは實際さう云ふ性質のものであつて非常に變動の激しいものには違ひないが亦人の心の欲望といふものが益高尙に發達して行くのも此の感情の作用である。昔から老莊の學といふものは或人は大に嫌つたものである。其の譯は動もする老莊を悟り損つて世間の事には興味を有たなくなつて眞の厭世的といふよりも寧ろ無頓着になつて仕舞ふことがある。禪もこれを悟り損へばさう云ふ風になることがある。といふのは入門の手續として先づ始に情を抑へて行くのである。けれ共それは修業の道筋であつて決して宗教の目的では無いのである。けれ共その道筋で止まつて仕舞ふとさうすると情の無い人間になる。情の無い人間は此社會に於ては生活するに適當しない人間である。それに反して情そのものが智と違ひ意志と違ふところは愛である。即情は知識の如く常住的のもので無い非常に變動の多いものである。夫故に知識の靜止的の状態に對して活動的のものである。又他の方面から見れば情の意志と違ふところは左の點に在る。意志

は先程申した通り一度欲望が起り或は動搖が起つてそれをば實行して仕舞へば止んで仕舞ふ、然るに情は進歩的の性質を有つたものである、夫故に知識の如く靜止的のもので無い活動的のものである、又意志の如く活動はするけれ共一時に止んで仕舞ふもので無くして、それから先きと進歩するところの性質を有つたものである、吾人の性格といふものが段々高まつて來るといふのも畢竟何處に在るかといふと此情の發達に在る。尙他の方面より之を言ふと昔から道德を教へた聖人賢人といふものが真理といふ事を云ふて居るが其真理所謂ツルヌといふものはどう云ふものであるかと云ふに通常論理學に眞といふのは知情意の知に相當するもので、例へば私が此から此の九段阪を上つて行くと其の上には招魂社があるといふ事を思ふ、實際行つて見ると果して其處に在る、是が即ち眞であつて、此から一町程行くと大海があると思ふ、行つて見るとそんなものは無い、それが即ち錯誤である、斯う云ふのが眞といふ事と錯誤といふ事との別である、けれ共古來聖人賢人の求めつゝあるところの眞理といふものはそれ

では無い、若し是が圓いと言つて實際圓かつたのが、それが眞ならば、彼は悪い人間だと言つて實際調べて見ると悪い、成程嘘では無い、けれ共聖人賢人はさう云ふ事を求めて居つたのでは無い、聖人賢人の求めて居つたものは何かと言ふと實は人心の要求を満足せしむるものを求めて居つた、即ち人の心の要求に丁度符合するものを求めて居つた譯である、其要求といふものは必ずしも智的要求のみで無い、情的要求意志的要求即ち人といふ者の要求を満足せしむるさう云ふものを求めて居つたのである、夫故に大學に於ては至誠といふことが中心になつて人が至誠といふことを以てすれば能はざる事は無いといふ風になつて居る、其の至誠といふものは嘘を言うてはいかない、圓ければ圓い、四角ければ四角い、奇麗ならば奇麗、汚ければ汚いと言ふやうなさういふものゝみでは無い、至誠といふことは其中に勿論知識上の眞も籠つて居るけれ共、眞の情、至情である、天地の中には至情といふものがある、即ち人の心、全體の眞である、それが至誠といふものになつて居る、そこで情の無い至誠は勢が無い、情が雜つてそこで眞の至誠が出来る。

先づ心の要求といふものを話した譯であるがその心の要求といふものに又二種ありて是も多くの事を數言で言はうといふので何れ精密な事は言へぬ、けれ共心の中に要求があつてそれを滿せば其要求は無くなつて仕舞ふといふ要求もある、それは先程意志に付て話したやうなのである、併ながら又要求を満足さすればさする程益、その要求は強くなると云ふ要求もある、之を喻へて言へば金や土で拵へた電の様なものは何年か耐へて居る、十年二十年續くのもあらう、併し餘計使へば使ふ程漸次減つて来る、何年かの後には潰れる、所が有機物、吾人の身體といふ様なものは適當に之を使うて行けば益、丈夫になつて行く、それは土や石の電とは違ひ益、使つて行くに随つて益、發達する、さう云ふ様な譯に人の心の要求の中にも要求を滿たして行けば段々止んで仕舞ふものと滿せば滿す程先へ上つて行くものがある、是にも又類がある、けれ共今簡単な事から言うて見ると腹の要求などは知れたもので米の二俵も三俵も積んであつても一人で一日や二日に喰べられるものでも無い、僅ばかりあれば此腹の要求といふものは満足が出来

て、それ以上どれ程美味を其處へ並べても我々には用事は無い、先づそれだけのものである、肉體に付ての要求はマアさう云ふ様なものが多い、然るに精神上の事になつて来ると是にも色々あるが例へば所謂贅澤といふことである、吾人が家の内に住ふのは風雨を凌げば足ると思つて居ればそれ切りである、けれ共風雨を凌ぐのみではどうも面白く無い、少し飾を附けやう、西洋の飾が宜いか、日本の飾が宜いか、日本流の部屋にしやうとすればそれから木を選ぶ疊の類を選ぶ、床の間の木を選ぶ、掛幅といふ物を選び出す、此掛幅も一つではならぬ、マア二目位に取換へねばならぬといふも所謂繪畫骨董といふ様な贅澤に這入つて来る、さうすると五つあれば是ではならぬ、モウ五つもあれば宜い、十になれば是では足らぬ、四五つも無ければ面白くないといふ様に段々、要求が發達して来る、是が精神上の要求と肉身的の要求との大體の違ひである、そればかりでは無い、吾人々生の總ての方面に要求がありて又人に依つては家を飾つた丈けでは面白く無い、衣食住が足つて来ると、今度は社會に對して少し勢力が得たい、自分の言つた事が社

會の人に聽かれ社會の人が耳を傾けて呉る様にしたが、それで政治運動をして見やうかといふ事になる。或は又イヤ自分は一つ學問道樂、學問をしやう、さうして何か新しい事でも發見して見やうといふ様な事になり、或は又人に依つては宗教に熱心で又その方で一つ自分の精神を働かして見やうといふ様な譯で、さう云ふ精神上の要求といふものは益、深くなつて、我、人生四十年や五十年では到底満足し切ることが出来ないといふ様なことになり、それで少し話が外へ移るけれ共私は以前或人から斯う云ふ話を聞いた、或人が自分は一生絹物を着ない、木綿で通すと言うた人があつた、ところが其人は木綿着物で通したが矢張り木綿着物的生活でそれ位の生活をして終つた、或人は自分は一生絹物ばかりで通さうと決心をしたさうである、その人は始の決心がそれ丈け高かつたので一生絹物的生活した即ちそれに應じて總て他の物もさう云ふ高い生活をして終つた、此二人の中木綿物を着た人の道德が高尙であつて絹物を着た人の道德が低いのでは無い、畢竟そのライフを始める時の決心の工合、三町先きまで走つて見やうとか五

町先きまで走つて見やうとか極めた、その初めの決心次第で三町走らうといふ人は三町走れば其でモウ息が盡き、五町走らうといふ人は五町まで来てそこで止んで仕舞ふ、畢竟決心の如何に歸するのである、初、生活をする時にどうかして自分は、誰某の様に金か儲けて別荘でも造らうと思ふとそれで大奮發をして金儲けをして、別荘でも造つて春秋と閑な時に遊びに行くそれで極樂淨土に達したやうな心地で世を終つて仕舞ふであらうと思ふ、或人はそれでは詰らぬ此世に生れて来た以上は何か世に一事業をして死して名を後世に傳へ度いといふ決心をした、さう云ふ人は別荘の二つや三つ位自然の結果として出来るであらうけれ共それでは満足しない、社會に有用な事業を起さうといふ目的がチャンと初めから具はつて居るから其の處まで行かねば其人は満足しない、それは何處に違ひがあるかといふと畢竟その走る前に何處まで走らうと思つた時の決心の工合に依ることである、さうして見ると現時の青年がイヤ衣服がどうの斯うの、イヤハイカラがどうのと言ふ様なことは畢竟決心が無いのである、コヌメチツク位で滿

足して居る様な人間ではそれだけのものより上には行かぬであらうと思ふ。今日の青年は身までの日本の風俗といふものが餘り西洋の風俗と違つて居つたからして西洋の物が來るといふとイヤ、コスメチック、イヤ繪葉書、イヤボンをを用ゐて見る、珍しいからやつて見るけれ共それで満足すればそれから色、心が情弱になつて仕舞ふこともある、けれ共自分の考には日本人は是までの武士道の發達して來たところから推測して考へてもコスメチックやリボンで満足して居る人間で無いといふ事を固く信じて居るのである、やらせて置けば直ぐに厭いて仕舞ふであらうと思ふ、それで此教育といふものも二様ありて、學校の教育に於ては多少學生に制限を加へねばならぬともあり又親が子供に對する場合にも幾分か意を用ゐてその注意をせねばならぬ、けれ共社會教育上より言へば之をしてはならぬと言つて抑へれば抑へる程好奇心は益々發達して來るからは自由放任して置いたな

らば暫時にして止むであらう、又その中に自然淘汰で、生涯を誤る者も出來るであらう、けれ共それを試して一時の好奇心を満足せさせて仕舞うてさう云ふものは詰らない者であるといふことを経験させねば宜からうといふ考である、けれ共それは所謂臨機應變で必ずしも社會に對して目を閉じず居れと言ふ譯では無い、幾分かその場合々に依つて適宜の處置をせねばならぬであらう、けれ共大體の主義方針を話すとコスメチックや香水や繪葉書で以て満足する人間では無い、斯う云ふ物は詰らない者であるといふことを知れば其處から必ず高尚なる欲望といふものを發揮して來るであらうと考へるのである、日本の青年全體の上より見れば畢竟今日社會の風儀に付て色々あるが一々何處やらの青年が誰彼に對して破廉耻な事をした、何處やらの女學生がどう云ふ事をしたと一々吹聴して憂ふる必要はなからうと思ふ、何故なれば彼等は決して現時の青年を代表して居る人間では無からうと思ふ、或人は是が新聞に二度も三度も出ると今日の青年の代表者であると斯う見る、私は夫は青年の破格者と見る、それは青年の中の

最腐敗した者であつて矢張り大多数の青年といふ者はさう云ふ新聞や何かに出る様なものでは無いのである。故に此等二般の青年は生涯を始める前に決心を廣大にする必要である。それはどうするかといふと或は雜誌を選んで讀ますとか或は新聞を選んで讀ますとかいふ事も悪くは無いであらう。良い新聞を選んで讀ませ良い文學を選んで讀ますといふとは宜いが、目的は何れに在るかといふと彼等を悪事に導かないことも必要である。けれ共それのみでない彼等青年に廣大なる欲望を起さすといふことは最必要なことで將來の國家の發達の上から言つても此處に注意せねばならぬことゝ考へるのである。夫故に文學雜誌新聞等を選ぶにも成る可く青年の心に廣大な希望を起さすといふことが必要である。固より此の問題は一言を以て解決して仕舞ふといふことは不可能なことである。けれ共成るべく世界の事情を廣く知らすといふことが第一の必要條件である。餘り無理な事をせずして能う可くんば西洋に行つて西洋の事情を見る事が必要である。けれ共無理算段をして西洋へ行くといふやうなことは私は勧め度

く無い。唯、西洋といふ者はどう云ふ者であるかといふ世界の大事を視せることが極く必要である。夫故に是は皆には出来ないから成る可く書物に依つて或は演説に依つて或は其他幻燈でも何でも宜い。さう云ふ物に依つて世界の大事を知らし、さうして此青年の自由活動といふものを發達さすといふ事が必要な事であらうかと思ふ。さう云ふ風にして精神の希望欲望を高めるといふ事を中心にして行つたならば、色々の故障があり困難があつても打ち勝つことが出来るであらう。私は人性善といふことを固く信じて居る。固より中には屑といふ者は何處でもあるであらう。けれ共概して言へば人性善であるから大欲望を起したならば決して小事に汲々としてそれで別荘の一つも建てたと言つて満足するとか或は又少し新聞や雜誌に名が出たといふて満足するといふ様な事で無く自分の最初に決心した一念を貫くといふ事になるであらう。此れが最上の生涯である。一度大望の心が具はつたならばどうしてもそれを實行しそれを遂げるといふより外餘快は無くなつて仕舞ふ。それを又一方から言へば決心、此信念といふものを

實行するには勇氣といふものに依つて行かねばならぬ、こちらから言へば決心とか獨斷とか言ひ、向ふから言へば一つの目的であり或は信念である、その信念を實行する道筋を言へば勇氣である、決心、獨斷、勇氣、信念といふものは皆同じものである、其信念といふものを獎勵するといふことは、今日必要で又はか一人や二人試みたからまで實績の上るものではないのである、だから青年諸君は勿論、又自分の子供或は弟を教育し或は其他の青年を教育することに幾分でも關係ある諸君はどうか其所に御一考を煩はしたいと思ふのであります。

（予西倫理五十一巻）

第十三 心理學と認識論との關係特

にカントの空間論を評す

（哲學會及心理學會例會合併會に於て）

今晚の話の題は心理學と認識論との關係特にカントの空間説を評すと云ふのであるが心理學と認識論との關係は論の範圍が廣くなり過ぎる虞がある。それでカントの空間説と云ふものは少くとも氏の認識論の大切な一本の柱であると思ふから、それを批評して之に由つて自ら其中に心理學と認識論との關係を明かならしむるやうにじやうと思ふのである。故に別段心理學と認識論に付ては特に話さずして直ぐ空間説の話をしやうと思ふ。

カントの空間説を評す前に空間と云ふものは一體どう云ふ風に吾人が之

を考へることが出来るものであらうか、又カント以前には此れに就てどう云ふ考へがあつたのであるか、即ちどう云ふ事情の下にカントの空間説と云ふものが起つて来たのであるか、等のこと并にカントの説を話し、それから此れに對する批評をしやうと思ふのである。それで極く大體に云ふと空間と云ふものが客觀に存在して居ると云ふやうなことは兎に角考へ得べきことで又物の屬性とも見らるゝのである。それから他の一方には此れを主觀と見ることも出来る。主觀と云ふ中にも又色々に見られ得るのである。例へば空間は感覺の性質で感覺に屬したものである、或は直覺の形式である、或は概念である等の如き思想で、斯う云ふやうに見られ得る。是等の中の二つ三つを合せて説明する人もあるであらうと思ふ。

それで先づ空間に對する思想は大體さう云ふこととして、カント前の學者が空間に付てどう云ふ考へを持つて居たかと云ふに、古代のことは今論ずる積りでないが、直接カントの説の上に影響したもので第一注意すべきはニュートンの説である、ニュートンは數學上物理學上、又後には神學上から

空間は客觀的に存在して居るのである、と見たので又さうしないとニュートンの數學的物理學を立てるに都合が悪かつたのである、此客觀的空間があると云ふニュートンの説は一つの長所を有つて居る、其長所と云ふのは何であるかと云ふと、空間の中に物質が存在すると云ふ極く常識的の考へである。そして、先づ空間と云ふものがあつて其中に物質が存在して居ると云ふのであるから、ニュートンの運動の法則などを論ずるにも大いに都合が宜かつたのである。それ故數學の必要上即ち數學の原理を本として之を物理に採用する點に於て最も都合が宜かつたのである。其時分にライニッツは空間主觀説を唱へて居たさうである。ライニッツは其當時の大家であつて哲學上色々の問題に付て苦心した様子である。例へば彼のモナドと云ふものを主張したのである。あれも其當時に於てはなかつ、面白い新説であつたので、其方から考へて、ニュートン説のやうに空間が客觀的に存在して居ると云ふことにすると、色々都合な事がある。例へば空間と云ふものはドコまでも續いて行くもので、

と云ふが端と云ふことはない、則ち其大なるのが無限、小なるとも無限である。して見ると空間中吾人の有限的知能を以解し得られぬ部分があるに違ひない、即ち空間が客観に存在して居るなどと吾人の有限的知能を以て無限のものを確定するのであるから、畢竟自家矛盾する譯になる。さう云ふやうな所からライブニッツは空間主観説を唱へたのである。併し其主観なるものは矢張りモナドの性質を顯したものであつて、それと全く離れたものではないので、其の経験より抽象したる混雜したる觀念即ちコンアユイズドアイデヤと見たのである。或はラプスキユール、ボルネブション……明確にたらない知覺である。カントはさう云ふやうな主観は無いものであると言つて居る。カントの論議を讀むと、其の中に「空間は客観に於ては、クワイクと云ふ人がニュートンの説を受けて空間客観説を主張し、ライブニッツとの間に大論戦があつた様子である。それは兩説各々の長所を有つて居るからであつた。ニュートンの説によれば空間が先きにあつて、そしてソコへ物質が顯れて來ると云ふので、數學の説明上都合の宜い説で

ある。さう云ふ長所を有つて居る。又ライブニッツの方から云ふと、吾人有限なる性質を有つて無限なることをドクして知覺するかと云ふ反對思想がある。雙方長所があるからして、畢竟要領を得ずして終つたさうである。さう云ふ様な考へは大いにカントの思想に影響を與へたものである。』又諸君の御存じの通りカントはヒュームの懷疑説に對して大いに反抗して批評哲學を起したとまで言はれて居る。ヒュームの説は斯う云ふのである、此れは又ニュートンやライブニッツとは少し趣きを異にして居る。矢張り一種の主観論者ではあるけれども感覺論者である。ヒュームは空間と云ふものは感覺に顯れる者としたので例へば空間には最小の廣がり（尙其れ以上に分ち能はざる廣がり）といふものがあつて其が色覺に顯れる、即ち色と云ふ者は或る有限の廣りを有つて居る、或る人は之を無限に分つとが出来ると云ふ、けれどもさう云ふとは到底出来ない、無限などと云ふとは有限の精神を有つたもの、云ふとでないとしたのである。又有限の廣りを持つた色があるから分つて行けば或る有限の大結局に達するに違ひ

ない。そして其大結局は或る有限の廣りを持つた色に違ひない。有限の廣りを持つた細かな色か澤山集つて有限の廣りを持つた所の空間を拵へて居る、畢竟細かな色が寄つてそれで廣りを爲すのである。最初は色其物が、例へば赤があり、紫があり、青があると云ふ工合に、列んで居れば其儘に覺えて居る、けれども後には又其所に色々違つた色が列んで來ることもあるから、其中にある色の特別の種類は漸々抽象せられて仕舞つて、ソコへ廣りと云ふ抽象的觀念を起して來るのである、と論じて居る。故にヒュトムは感覺論者であつて感覺の集合上から空間が出來ると云ふ説である。カントの青年時代には英吉利の方ではヒュトムとかニュートンとか、獨逸ではライブニッツとかオルフとか云ふ學者の説がカントに影響を及したので、それでカントは初めデカートの物質論に偏した説を排してライブニッツのモナドの考へを大いに容れて居たさうである。其考へにする物質と云ふものは何かの塊りの中心と云ふやうなものでなくして、一種の活動の中心、即ち力の點(ポイント、フオイス)と云ふことである。さう云ふ

ライブニッツの考へを容れて居た所から見ると従つてライブニッツの空間主觀説と云ふやうなことも讀んだり聞いたりしたに違ひない。併しながら其の考へに付てはライブニッツのを其儘受けたのではない。ライブニッツのは一體モナドの間に相互に拒絶する力があると言つてある。それにニュートンの引力説を折衷して物質と云ふものは引力と拒絶力と兩方有つて居るものと云ふ考へを抱いて居たさうである。それからニュートンから又カントはニュートンを餘程研究した様子である。それでニュートンの空間説にカントが大いに興味を有つて自分の説に餘程都合が宜いものとして居た。ニュートンの空間客觀説は物質的經驗より先きに空間がある、即ち空間のプライオリチト先在と云ふことを説くには是非かう無くてはならぬ。其點に於ては逆もライブニッツの空間主觀説の及ぶ所ではないと云ふ所から、一方に於てはモナドの考へを容れて居なければ、空間説に至つては却つてニュートンの説を容れたと云ふことになつて居たのである。併しながらそれも必ずしもニュートンの考へを其儘容れた

譯でなくして、其間にはカントも大いに苦心した様子である。ニュートンの
のを其儘容れてライブニッツのモナドを其儘探ることは出来ないから、ラ
イブニッツの善い所とニュートンの善い所を採つてそれをウマク調和し
やうと云ふことに餘程苦心した様子である。之が千七百六十八年頃であ
つて何でもクリチツクの出る(千七百八十一年)十數年前の話である。それ
より先き千七百四十八年頃に數學家のオイラーと云ふ人がニュートンの
運動の第一の法則即ち慣性律(イネルシヤの法則)と云ふものを説明するに
は、又其法則に充分意味を有たせて行うと云ふには、どうしても空間客觀説
でなくてはならぬと論じたのである。其の論法は次のやうである。今こ
ゝに一の體がある。第一法則に據ると物體が外の物から少しも衝動を受
けなかつた時には、それが止まつて居れば何時迄も止まり、それが動いて居
れば、其動いて居る運動の有様を少しも變じないで直線に動いて行くと云
ふのである。所が外の物から衝動を受けなかつたと云ふのであれば、外の
物質は無いと假定して宜い。一つの體があつてそれが直線に動いて行く

と云ふのであれば、既に空間を假定しなくては無意味である。物質も空間
も無かつたならば、其體が一直線に動いて行くと云ふことは出来ない、それ
故空間が客觀にあるものとすれば、ニュートンの第一法則は意味を有つて
來るのである。さう云ふ點から空間は客觀的のものであると云ふことを
言つて居たのである。其事をカントが讀んで、それに由つて餘程影響せら
れて空間の先在ならざる可からざることを確信するに至つたと云ふので
ある。それで此空間の先在説よりカントは先天説を出して來たのである。
けれども先在説と先天説とは其實必然の關係は無いが、空間が先在的であ
るとすれば、其れより先天説に移り易いのである。さう云ふ點からカント
は全然ニュートンの説を容れ、そして結論して絶対空間と云ふのは外感覺
の對象ではないけれども、外感覺が存在するには必要な根本的表象である、
と言ふたのである。

其時分にはニュートンと同じやうな意味で空間が客觀に存在して居ると
云ふことを言つたのである、けれども、此言葉の中に既に後にカントの主觀

説に變化する種があつたのである。それは絶対空間は外感覺の對象にあ
らざるものと云ふこと、即ち空間が對象になつて來ることが出來ないと云
ふこと、之が後に主観説に變ずる基いである。

さう云ふ風にカントの説が變つて來た所で、こゝに又も一つカントの問題
となつて來たのは先程チヨト話した空間の無限に大なること、無限に分る
べきことである。一方から見ると絶対空間を客観的に看做すと云ふこと
は大いに都合が宜いけれども、どうしても絶対空間と云へば無限と見ねば
ならぬから、其無限のものが客観的にあると云ふことを斷言することに至
つてカントは又躊躇して來た。そこでニュートンの先在説と云ふものが先
天説に變じて、そしてライプニッツの主観説になつて來て空間と云ふもの
は經驗前に先天に存在して居るので、それは矢張り主観的のものであると
云ふやうになつて來た。そこで今の無限と云ふことを客観的にしないで
觀念にして仕舞つた、それで一の困難を切り抜けた譯である。又他の方面
に於ては若し空間と云ふものが或る論者の言ふ如く、既にヒュームなども

言うた通り、吾人が經驗上から漸々抽象して來たもの即ち經驗より得た概
念であるとするれば矢張り無限と云ふことが出來ない。假令ひ主観的であつ
てもそれが概念であつたならば矢張り無限と云ふことが言へない、それで
一方に於ては客観から引離して主観に持つて來たが、主観も概念ではいか
ないからそれで概念を知覺的にして、そこで直覺としたのである。此直覺
説はなか／＼苦心して終にソコまで來たのである。

「カントの空間論」

そこで所謂カントの純粹理性批評が出たのである。超越感覺論に現れて
居る空間説は畢竟左の五點に歸するのである。此れはカント自身が五つ
に分けたのである。其大體を話すのであるから或は一二の言葉の違ふ所
はあるかも知れぬ。

第一 空間は外部の經驗に基きたる概念にあらず外經驗は之れを豫
想することに由りて始めてあり得べきなり。

概念は經驗から得た概念でなく經驗が之を豫想して居る、之を豫想するこ

とに由つて始めて経験と云ふこともポツンとブル可能になる。

第二 空間は先天的にして又必要の表象なり。

空間は先天であつてそして又必然性のものである。例へば内容なき空間と云ふものは想像し得られる、即ち内容と云ふ者をスツカリ取つて仕舞つた空間は随分考へることが出来る、けれども空間の無い物質と云ふものは考へることが出来ない、物と云ふことを考ふるには是非空間がなければならぬと云ふのが第二の點である。

第三 幾何學的原理の確實性は空間の先天的必然性に基す。

此れは空間は必然的表象なりと云ふことに基いて居るのである。若し然らざれば空間は必要なものでないから、總て他の経験と等しく偶然性を有して居らなければならぬ。して見ると空間が三延長を持つて居るのも吾人は経験上から之を知つたので、此れ迄は三延長以上の廣がりは見えられなかつた、と云ふことに止つて仕舞ふと云ふのである。所が此の第三は後ち、二版の時にカントが此れを抜いたのである。後ちに新幾何學を論ずる

時に再び論ずることがある。後の文を読んで見ると此れに似寄つたことを言つて居ながら此所だけ抜いた意味がチョト分りかねる。

第四 空間は論理的のものにあらず、又物の關係に就ての一般概念に

あらず、即ち直覺なり、
空間は多くの空間と云ふものがあるのでない、空間は全體が一つである。直覺であるから一つであると云ふのである。此れは概念の基礎であつて概念ではない。例へば三角の二邊の和は第三邊より大なりと云ふのはアレは概念ではない、あれは先天性の確實を有する所の空間、所謂直覺と云ふべきものである、と云ふのである。

第五 空間は無有限大として現はる、然らざれば無限の關係を其中に包含すること能はず。

無限大であるから無限の關係を其間に包含することが出来る。此の五點は第三を抜けば四點になるが畢竟之を約めて言へば三點になる。第一空間は先天である、第二、空間は概念でない、知覺である、第三、幾何學上の

理と云ふものが即ち空間の先天綜合と云ふものに基いて居るから、それで所謂「アポダイクチック、ソルテイイテイ明確的確實」と云ふことを持つて居る。此れが感覺論に現れて居るカントの空間説である。それでヒュームの空間説に就てはカントは知らなかつたと云ふ話である、なせならばヒュームのトリーチズ、イン、ヒューマン・ナチャー性論と云ふものをカントは讀まなかつたからと云ふのである。併しながらヒュームの空間説を對照して考へて見ると、チヨト面白い所がある。ヒュームの空間説は矢張り感覺の性質から之を抽象したと云ふのであるから、假令ひカントがヒュームの説を知つて居てもヒュームの懷疑説と同じく之を退けたに違ひない。それでカントの感覺論に現れて居る空間説はカント自身が超越論理に於て之を説明して居る。カントは斯う言つて居る、空間と云ふものは感覺的直覺であつてそれが直ちに先天綜合をするやうに言つたけれども、それは綜合が概念より先きにあることを示すためにさう言つたので、其實感覺と云ふものそれ自身が綜合力を有つたものでない。其の綜合は矢張り悟性の綜合に依

るものである、直覺の綜合は概念には關しいなければ、悟性の綜合を豫想して居る譯である、と云ふのである。經驗が直覺を豫想し又直覺は悟性を豫想して居る、併し未だ範疇に關係しないから、此の無意識悟性は直覺を綜合することに由つて想像を拵へるのである。併しながら幾何學の原則が先天綜合であると云ふならば幾何學が想像に由つて理解せらるゝとするか、さう云ふ譯はなからう、何故ならばあれは最も高尚なる意識的悟性に依るものである。そして斯る悟性は實に高等なる範疇概念を豫定して居るのである。そして見るとカントが概念にあらず直覺なりと言つたことがドウも解せられない。經驗は直覺を豫想し、直覺は悟性を豫想し、悟性は範疇を豫想すれば、直覺が既に其中に範疇を含むのであるから、概念と直覺とを明かに分けることは出來ない。概念があつて始めて知覺が出来る又直覺が出来るのであるから、概念にあらず直覺なりと言つたことが矛盾して來るではないか。悟性の綜合が無くてはならぬと云ふ所まではカントが言つて居る、併しながら範疇が無くてはならぬと云ふてケヤードが批評して居

るが、それは吾人が考へて見てもさうであらうと思はれる。さうなつて見るとこゝに斯う云ふ困難が起つて来る。カントは直覺に種々な経験が與へられてそれを直覺が綜合すると云ふけれどもその所謂與へられたるものは空間的であるか、非空間的であるか。若しそれが空間的であれば空間は既に外部より與へられたものである、そして先天綜合は小さき多くの空間を大きく一に綜合するだけになる。若しそれが非空間的であればそれを綜合して空間にするにはミルが筋覺より空間を派生せしめんとして學者の批評を受けたると同じ困難を感ずるであらう。されば此れを綜合するもの(悟性か、範疇か、統覺か)が之に空間的性質を與へねばならぬであらう。綜合せられるものと綜合するものとの關係は通俗に考へるほどヤサシクはない。其事は後にブラッドリーの所論を話す時に再び言ふことにしやう。單に與へられたるものを綜合してメコで始めて悟性になるとか、直覺になるとか云ふことは無意味である。若し與へられたるものが非空間的であれば何程寄集めても非空間的である。此困難はカ

ントが分析論に於て論じさうなものであるに其所に論じて居らぬ、アインシュタインの中にも其事を論じて居らぬやうであるが、兎に角此は哲學から見ても又心理學から見ても餘程困難な問題であらうと思はれる。

二、カント以後の哲學者

夫でカント後の哲學者はどう云ふ風に言うて居るか。御存じの通りトレンドレンブルヒがカントの空間説を批評してカントは空間が主觀的であれば客觀的であり得ない、客觀的であれば主觀的であり得ないと云ふ風に思つてそれで主觀説を採つたのであるけれども、論理學に言ふ中間排除の法則はこゝに當條めるとが出来ない。主觀的であつて同時に客觀的であつたらドウかと云ふ論である。併し此はカントの方から言へば其事をカントが考へたかドウか知らぬけれども、ケヤードが論じた如く、トレンドレンブルヒの批評には直ぐ答へ得べきである。若しトレンドレンブルヒの言ふ如く主觀的であると同時に客觀的であるとすればソコへ豫定調和説

と云ふやうな者を拵へて置かねばならぬ併しさう云ふことは不合理なることである。カントの一般の思想の工合から考へて見るとさう言ひさうに見えること云ふことである。プラドリの論法はカントを批評したとに當る、プラドリは其著書「アッペンレンス、アンドン、レアリチー」(假象と實在)に空間は假象に屬すると云うて居る。又空間の有限無限の問題に就て空間が實在するとすれば其は有限ならざるべからず、然るに空間は無限なり、故に自家撞着に終らざるべからず、として居る。それより先程言うたやうな論法を以て關係させるものと關係させらるゝものとの區別、綜合するものと綜合せらるゝものとの區別で即ち綜合せらるゝものが既に空間ならば綜合は此れに何の貢獻する所あるか、若し又綜合によりて空間の成るものならば綜合せらるゝものは何であるかと論じて居る。是れ又論理的矛盾に終つて仕舞ふから、空間は假象に屬するものと云ふ説である。それで獨逸のフヒテとかヘーゲルとかになると思想の大體の工合が變つて來て空間はさう簡単なことに説明

が出来ぬやうであるからそれは今晚は言はぬことにしやう。ヘンリッヒ・ハウゼルの矢張り空間に對してはカントの主觀説を採つて居つたやうである。併し獨逸の中でもヘルダーと云ふ人などは物と形とは元來別なものでない、唯吾人が分析して之を別けたのであつて其の物と形とは一緒に外部から與へられたものである、矢張り空間的性質は外部にあると云ふ考へを持つて居た様子である。又少し違つた方であるが、シユラム、エルマツヘルも空間は單に主觀的でなく、矢張り客觀的に是れに符合する點が無ければならぬと云ふ考へを有つて居たのである。思想の發展は、空間の存在には思想が感覺上加はるのであるが、感覺の對象は相互に排除し、甲は乙をアザネツス(自分以外)とし、又同時に互に相互に排除して居ると云うて居る。即ち空間と云ふことは相互の排除、制定と云ふこととなる。空間表象以外の感覺には、例へば聽覺には互に排除するところが無いと云うて居る。此れに就いては一言して置きたいのであるが、互に排除して居るとして制定し合ふたものが空間であるとは言えない、何故なら

ば其外に現在排除して居る者がある。例へば音聲の如き調の高低は由つて各自を他と區別して居る、又音色が違ふ琴の音とオルガンの音とピアノの音とは各々違ふ。斯の様な排除性は外にも澤山ある、此を以て空間の特有性と見るのは解せられないのである。色々の種類の排除性がある、空間はそれの一種と云ふに止まる様に思はれる。空間の排除、制定の他と違ふ所はどう云ふ點であるか、空間の空間たる特質を持つて来るのは何れの點にあるかと云ふことまで論せなければ確たる思想は分らぬ。兎に角クリーンは排除性を以て空間の特質のやうに言うて居る。それで詰り哲學上に於てはカント以後トレンドレンツブルヒの外に餘り空間と云ふことに付て確たる議論をして居らぬやうであるが今日の所では哲學上主觀説を採つて居る人が多いやうである。空間の論と云ふことは元來半ば哲學の範圍に屬し、又半ば物理學に屬して居るものである。カントは物理學者であつて同時に哲學者であつたから、綿密に其事を論じて居るが、其の後の哲學者中にはカントのやうな知識の多様な人が少いと云ふ

ことが其の後空間論の振はぬ一つの理由であらうと思ふ。兎に角空間論はカントの論で一定したやうであるが、又プラトウツトのやうな説が出て来るから、まだ一定して居らぬやうでもある。露骨に評すれば曖昧の中にあるやうに思はれる。

三、カント後の幾何學

それから次にはカントの幾何學に對する思想であるが、カントはユークリッドの幾何學を其儘採つて明確的確實(アポダイクチック、ソルタインライ)を論じたのである。あれは幾何學の確言を先天的のものである、としたのであるが、カント後形而上幾何學と云ふものが出來た、其の由來は大要左の如きである。カントの直ぐ後のことであるが、佛國にレゼンダ市(一七五二—一八三三)と云ふ數學者があつた。そして幾何學の第十二の確言は平行線に關するもので、二つ線があつて別の一線が其線を横切ると、其同じ側に於ける内部の角度の二角の和が二直角より少き時は、其の二線を直線に延ば

して行けばドツカで二直線が出會ふと云ふ確言である。レゼンダールは此を他の確言から演繹しやうと試みたのである。成程確言をズツと讀んで見ると、吾人専門以外のものにもあの確言だけは何だか耳觸れが悪い。レゼンダールは外の確言から演繹することが出來ると考へて非常に研究したさうであるが、成功せずして終つたさうである。併し之が長く久ラシカルであつた、幾何學の趣きを變へて、それが全く崩れた譯ではないが、趣きを變へて來る始めであつたさうである。其後獨逸の有名なるガウス(一七七七—一八五五)と云ふ數學者が其問題を採つて大いに研究したさうであるが、ガウスの論方は發表になつて居ないさうである、唯結果は分つて居る。其時分に露西亞人のロバチエウスキーと獨逸人のボルヤイと云ふ人達がガウスと同時代に其問題を研究した、是れが形而上幾何學の起る初めである。其研究した結果平行線に關する確言と云ふものはドウしても外の確言から之を演繹することは出來ない。又此の確言を取つて仕舞うてもユークリッドの幾何學を矛盾することな

く存在して居る。結局假令ひ平行線に關することだけを抜いてもユークリッドの幾何學は動かない、して見ると平行線は外のものと一種獨立したものであらう。一本の柱のやうなもので、此れを抜いても家は立つて居る。故、此柱は一つ獨立なものであらうと見るのである。若し又平行線が外のものと獨立なものであるならばユークリッドの幾何學は完全系統でない全體を包含した統系が無くてはならぬと云ふ風な議論になつて來るのである。

それで此れを第一の時代と言へば第二の時代を爲したのはリーマン(二八二六—一八六六)と云ふ人である、此の人は餘程研究した様子である。此の人の研究は其大體の概念を得ることなかつた、むづかしいやうであるが、詰り斯う云ふのである。リーマンの研究の結果幾何學上の測定と云ふ者は必ずしも三ダイメーションに限つたものでない、幾つものダイメーションがあつても宜い、有限數ならば宜い。それから又曲面の測定のこととは面白い、ユークリッドの幾何學で見ると曲面は三ダイメーションを包含して居ると云

ふので各ダイメンションに分析し、平面は之れを二ダイメーションに分析するのである。然るにガウスの説に據ると一を平面と云ひ、他を曲面と云ふが、此等の面は分析し能はざる固有性を有つて居ると云ふので、平面でも曲面でも各自それに符合するやうな率を拵へてそれを測定すると云ふことの発見がユークリッドの考へを餘程變へて來たのである。それでダイメーションが幾つあつても宜い、それが曲つて居つても眞直でも構はない、面の測定法が出來たのである。即ちさう云ふ公式が出來たのである。それでリーマンの研究は多様ダイメンションの概念を明かにしたのと、曲面測定率と云ふものを定めたのである。此の二つの事を第二の時代に於てリーマンとヘルムホルツが發達させたのである。

それから又第三の時代に英國のケーリー(一八二一—九五)と云ふ數學者がある、彼は投射幾何學(プロセクティブ、ジオメトリー)を發見したのである、此れは私も充分は分らぬが大體斯う云ふものである。

幾何學上此れまでの第一第二の測定法は之をメトリカルゼオメトリーと

云ひ、此れに對しケーリーの投射幾何學は大小の量は論じない、點の配列の性質即ちクオリティーだけを論ずるのである。直角三角ならば大きくとも小さくとも性質は同じであるから、分量を離れて性質のみを論ずることが出来る。どう云ふ風にして始めるかと云ふと、投射幾何學の考へとユークリッドの考へとは反對であつてユークリッドの方は先づポイント點があつて夫れが連つて來て、ライン線となり、ラインが連つてサルフエース面となると云ふが、投射幾何ではソルフエースが二つ切り合つてラインが出来るラインが二つ切り合つてポイントが出来る、と云ふやうな譯で結局凡てをポイントにして仕舞ふのである。其ポイントと云ふものはさう云ふ風にして出來たポイントであれば意味の無いものでない大いに意味を有つたポイントである。此れはアンハーモニックスと云ふ比例から割り出したものである。其後クライン及リーも大いに此の思想を發達させたさうである。要するに投射幾何は餘り抽象にして一般なるが故に此れのみには幾何學を科學たらしむに不充分である。是非測幾何を以て此れを補

はねばならぬのである。

そこで色々さう云ふ各方面に形而上幾何學が發達して來た所の結果はどうか云ふことであるかと云ふと、勿論ユークリッドの幾何學も其の中に包含するやうな大きな原則が數理上發見せられて、其の原則より見るとユークリッドの幾何學は只一の簡單なる場合である。例へば曲線にも色々な曲線がある、圓もあり、拋物線もあり、螺旋形もあるが、直線も曲線の一つの場合である、と云ふやうにユークリッドの幾何學と云ふものは形而上幾何學から見ると種々むづかしい關係中の簡單な場合である、と云ふことに歸するのである。それでユークリッドは十二の確言を置いて幾何學を論じたのであるが、形而上幾何學から見るとどう云ふ風になるかと云ふに三つの確言が必要である。此れはドウかと云ふと、第一は空間の純一性ホモゼニアウス、スペースと云ふことである、空間はドコでも同じものであるから、線でも點でも一點から他の點へ自由に動かして行くことが出来る。例へばここにエー、ビーと書いたのは之をドコへ持つて行つても同じことである、此

の確言は自由運動の確言と言うても宜しい。第二は有限ダイメンションの確言即ちフワイナイト、ダイメンション……ダイメンションはインフワイナイトではいかぬ、フワイナイトであれば幾つでも宜い。第三は距離の確言此れはチョトユークリッドのと變つて居る。ユークリッドは直線は二點の最小距離であると云ふやうに極めて居るが形而上幾何學では必ずしも最小と言はずに直線は二點の距離であるとするのである。先程話した通り各面は其の固有性を持つて居るから、ユークリッドのやうに之を分けて三ダイメンションに分析しない、此の面が平面でも曲面でもそれをスペースと見て測定するのである。故に距離は所謂直線によつて測定すると云ふ譯にいかぬ、却つて距離の確言は二點の間の距離に依つて直線を測定するのである。

さう云ふ風にして來ると平行線と云つても地球の表面に出來た平行線は先きへ行けば出會ふのである。又二直線が空間を圍むと云ふことも出來ないことはない。形而上幾何學より見ると斯の如きとは最も容易なるこ

とである。兎に角さう云ふ譯でカントはユークリッドと云ふものを基礎にして空間の性質を論じて居るから形而上幾何學の發見と共に其論法が變らねばならぬ。若し今カントが居つたならば其論法の工合を變へて自分の説を維持するか或は其説を捨てるかどう云ふ風になるか分らぬが兎に角純粹理性批評に現れて居るものではドウしても超越空間論は維持して行くことが出来ないのである。面白いことはズツと前に伊太利のサツケリと云ふ數學者がユークリッドに付て論じたことがある、其書物はカント以前に出て居るが餘り人が知らなかつて漸く此頃人が知つたそうである。さう云ふ書物がカントの知識の中に這入つて居たのではないけれども既に伊太利の人がさう云ふことを言うたのを考へて見ると或はカントの時分にも既に幾分かさう云ふ疑があつたのではないか。カントが第三の説明を取り消したのとどう云ふ關係があるかは知らぬが先程話したのと合せ考ふれば興味がある。カントは其の中に斯う云ふことを言うて居る若し空間表象が普通の現象の如く經驗上より得られたものであるな

らば數學の原則も他の事物の如く單に事實として認むるに止るやうになつて来る。此れは無論それに相違ない議論であるが、カントが裏を言つて主張したものが丁度形而上幾何學の發見に依つて事實になつて來て今日では數學は經驗科學であると云ふのである。

凡そ空間と云ふものは思想上より言はゞ百でも千でもものダイメンションがあつて宜いのに三より無いのはドウ云ふ譯であるかと云ふのは誰が研究して居るか知らぬが余はまだ見ないのである。物理學の方から云ふと桑木助教が物理學雜誌に絶對運動と云ふことを出して居る。それは物理學の方から見た空間論で今話したやうなことも往々論じてあつて餘程面白いが、其中にもなせ三ダイメンションであるかと云ふことは言つてない。三ダイメンションは此れまでの例に依つて單に經驗であると云ふか知らぬが經驗だと云ふことであれば斯う言ふことになつて来る。主觀的に考へると形而上幾何學の原則によりダイメンションは幾つもあり得る、三と云ふものは外から限られたものと見なければならぬ。外界に何か此

れを三つの數に限つたものが無ければならぬ。單に經驗であると云ふならばそれも一説であるが何が理由が無いであらうか。さう云ふ事は後に論ずるとして、此所には

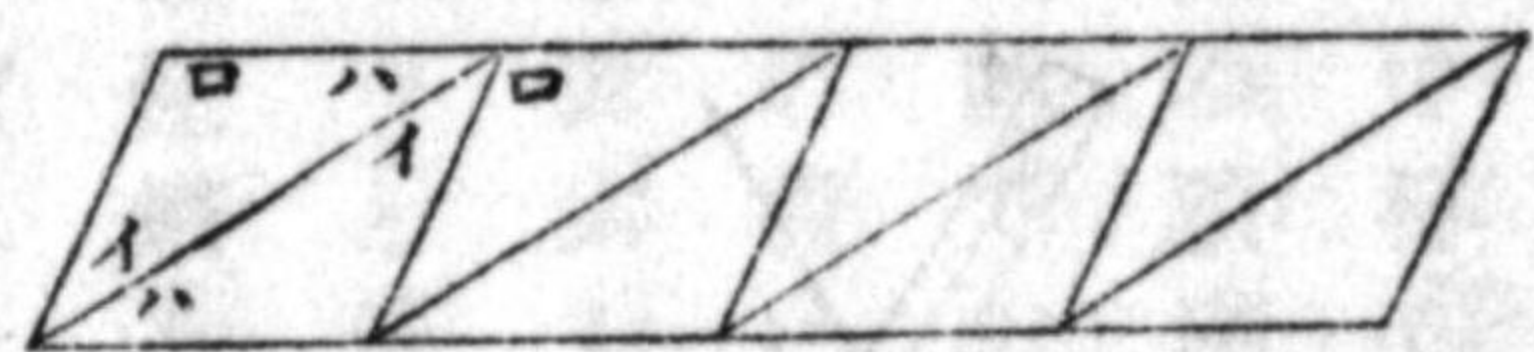
四、物理學の方から見た空間

を紹介しやう。此れは余も充分に調べる暇が無かつたが、マハが物理學上から見て空間を論じた中にユークリッドの幾何學も畢竟するに元來は歸納的であつてそれから段々發達してア、云ふ譯になつたので、それを後には先天的眞理のやうに人が言ひ出したのであるが、元は矢張り物の運動及外部に現れた種々の物から段々考へ付いたのであらうと云うて居る。

其中に一二通俗に考へても面白い例を擧げて居る、例へば三角の三つの角を合はすれば二直角になると云ふことは古代の普通の壁模様によつても思ひ付くことが出来る。それはなせかと云ふと、別圖の下のイ角度は上のイ角度と同じことである。それから左のロ角度は右のロ角度と同じと云ふ

ことはユークリッドのやうな論理法でなくとも常識で分る。それにハを加ふれば二直角になる即ちイロハは二直角になると云ふ風に圖案の中に幾何學の要素がある。

第十圖



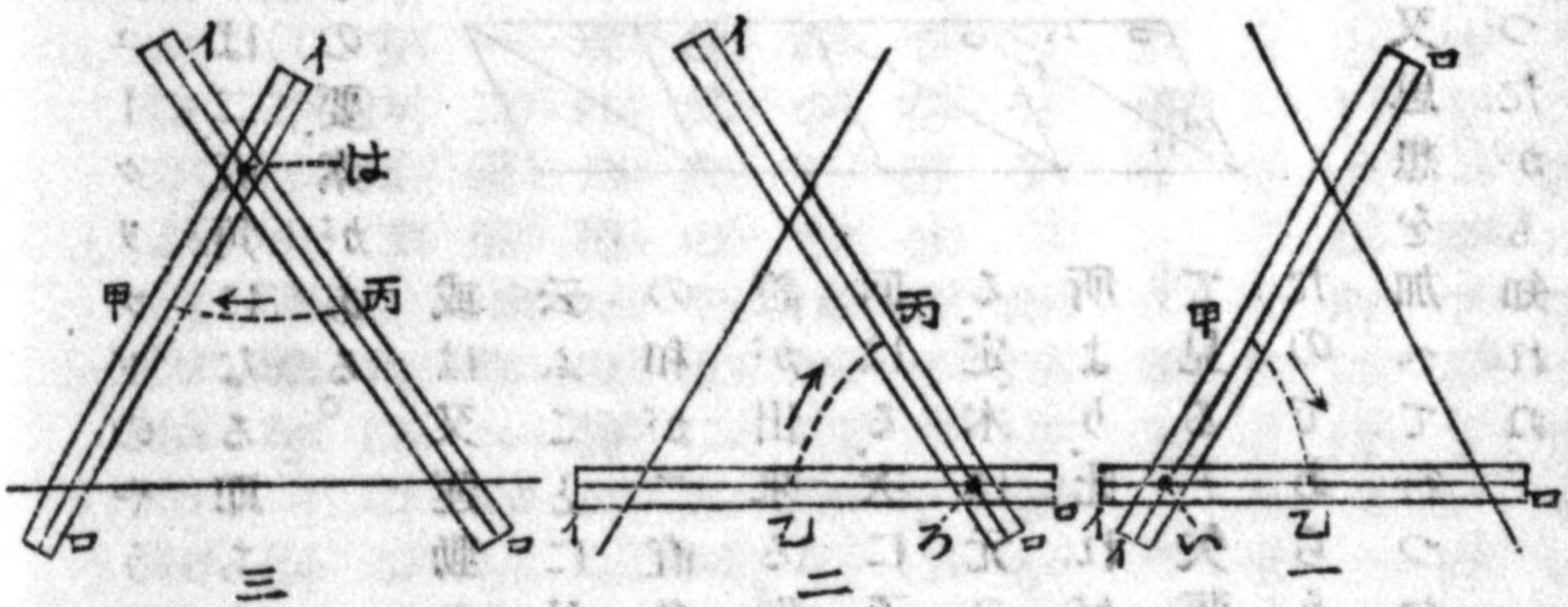
或は又運動の形式から段々歸納して來ることも出来る。云ふことに付て斯う云ふ論がある。矢張り三角の三つの角の和が二直角になることであるが、斯う云ふ風にしても立證が出来る。別圖の甲なる定木が乙の所迄いを中心として回はる、次に乙より丙迄回はる、終りに丙より元の甲迄回はる、定木は元の位置に返りたれど、イロの位置の轉倒したる所より、此れが丁度百八十度回はりたることが分かる。して見ると矢張り元はさう云ふ運動の状態からも思ひ付いたのであらう。固よりそればかりに歸することは出来ぬ

それに又思想を加へて行つたのであらう。まあ學問の初まりはソンのものであつたかも知れぬ。

五、カント後の心理學

それからカントは心理學の空間知覺に付てどう云ふ風に考へて居たか、それに付ては其の後研究が進んで來たカント自身に思ひ付かぬことも澤山出來たのである。心理學の方面よりの論は随分澤山あるから、分類しても其中の模範的の場合のみを採つて論ずると云ふやうなことでなければ混雜する處がある。それにはスツンプフ教授の分類を採つて話すことにしやう。教授は此れを四つに分類して居る。第一は空間と云ふものを感覺集合に歸せしむる説である、それはヘルバルトが代表して居る。ヘルバルトの論は

第十圖



斯う云ふのである、例へば今眼で物を見る場合で言へば物を見るに、物の各點を甲より乙、乙より丙と見ながら段々移つて行くに従て最初見た方は記憶心像となり、其の強度も弱くなる、強度の弱いものから漸次其の強きものに移り、今現在知覺して居るものは最も強度の強いものである、夫れで今度は元へ戻つて行くと、強度の強きものより始め漸次弱きものを再認識して行く、其の各點の順序は元知覺したる正反對である。そこで甲乙丙の順序は不變で常住的である、と云ふやうな概念を起して來るのである。其の様にヘルバルトの説は感覺を集合して行くのであるから、別段に感覺以上の綜合を俟つと云ふとはないのである。感覺と記憶心像の強度の順序で空間を説明しやうと云ふ仕方である。それで第二は空間と云ふものを知覺する特殊の感覺があると云ふのである、其代表者はペインである。即ちペインは空間と云ふものは總て運動する時の筋肉感覺によつて知覺せらるゝものであると云ふことで、非常に筋肉感覺を主張した人である。此筋肉感覺と云ふとは初め蘇格蘭のプラオンと云ふ人が言ひ出して、それからチャトレス、

ベル、エー、ヤー、グー、ベル等の入達も之を主張したのであるが、ペインが心理学を書いた時分には筋肉感覚が餘程過重視されて居たやうである。それで多くの人は實驗もせずして筋肉に感覚があると云つてサツサと説明して仕舞つた甚しきは初めから筋肉に無いやうなことで、迄此れを筋肉に歸してしもうたこともある。其時分にペインが出たのである。其説明に據ると、筋肉が運動するエネルギーの分量及速度が筋肉感覚によりて綿密に分る。それ故物を知覺するに感覺機關がどれくらゐ動いて來たかと云ふことを、筋肉のエネルギーの費されたる量によりて測定が出來ると論じたのである。然るに其後さう云ふことは無いと云ふことが分つたのである。それから第三は感覺要素に精神要素が加はつて、空間知覺が出來るのであると云ふ説である。其の代表者と云ふべきは、ロッチエーである。ロッチエーは局所微驗と云ふ言葉まで推へて居る。視覺には視覺局所微驗、觸覺には觸覺局所微驗があつて、網膜の各部分及表皮の各部分には皆夫々其所に固有の局所微驗が備はつて居る。けれどもそれは局所微驗自身が互にウマク列んで居

る譯でない、それを列べるものが無くしてはならぬ。例へばこゝに英語の a と云ふ字と n と云ふ字と d と云ふ字がある。a はエーの性質を持つて居り n はエヌ、d はデー各固有の性質を持つて居る。こゝで a の次に n 其の次に d を持つて來て列べるのは只文字が自ら列ぶのでない、矢張り誰かゝそれを列べるので、若し間違つた列べ方をすれば意味が出來無い。ant となれば始めて意味が出來る。して見ると列べるものが無くしてはならぬ、局所微驗を列べて空間と云ふ意味を作り出すのは精神作用であるとするのである。終りに第四は感覺の中に感覺的要素と空間的要素とが一緒に成つてあると云ふ説で、所謂ネチビズムである。其代表者はハミルトンと近世の心理學者スツムプフである。其論に據ると例へば物を見る時は視覺中に色と形とがある、其の形は矢張り視覺に固有なる者で然も空間的要素である。形と云ふ空間的要素と色と云ふ感覺的要素とは分ち能はざるもので、併立して感覺の中に存在して居ると云ふことを主張するのである。この様にスツムプフは四つに分けて居るけれども必ずしも四つに限つた

ことはない。ブントは斯う云ふことを言つて居る。或る論者の言ふ通りにネチビズムとエンピリシズムとを對照さすべきでない、エンピリシズムとネチビズムの分ち方は交叉的分類になつて来る。そして又ネチビズムでもエンピリシズムでも一體空間と云ふものを豫定して居る、例へばネチビズムは感覺要素の中に空間要素があると言つて後ちに言ふべきことを先きに豫定して居るのである。エンピリシズムもさうである、ペインでもヘルバルトでも實際上空間を知覺すると言つて居るけれども、吾人が知覺すべき空間はチャンと先きにあつてそれを經驗で知覺すると云ふ風に論ずるのである。ブント自身は融合論者と云ふので、其論に據ると斯う云ふのである。空間に對する論を發生論、ゼネチカルと天賦論ネチビスチック、セフリーとに分つて發生論と云ふ方を融合論と經驗論に分つのである。それで空間知覺に關する感覺が三ある、即ち視覺、皮膚の表面の觸覺、それから内觸覺である。内觸覺とは筋覺及び關節感覺のことである。それで更に正しく分つて言へば、視覺と觸覺で、其觸覺が外觸覺と内觸覺となる、畢竟

視覺と外觸覺と内觸覺との三である。其の三が各々皆局所徵驗を持つて居る、併し其けただけではロッチエの言ふ通り局所徵驗が自分自ら列んで空間を成すと云ふことはない。それでブントの説は觸覺の局所徵驗は視覺が之を聯絡させる、視覺の局所徵驗は眼球の運動が之を聯絡させる、それから又皮膚の表面に於けるものは内觸覺が聯絡させることである。例へば左の手を以つて右の手を撫でる時は右の手にある局所徵驗を左の手の關節感覺が聯絡させるのである。それから又關節感覺にも局所徵驗がある、此れは外觸覺或は視覺が之を聯絡させると云ふ風に三の感覺が互に補充し助け合ふのである。

六、心理學說に對する評論

そこで筋覺と關節感覺との關係に付て一言しやう。ブントも最初に言ふたのと其後に言ふたのと合せて見ると少しづつ説が變つて來て居る。一方から見れば最初は説が未だ確定して居なかつたのであらうが、それは

誰でも研究するに従つて説が少しづつ變つて来る、漸々進んで来るのである。其の中重なるものは關節感覺のことで、此のことは獨逸ではゴルドシヤイデル、亞米利加ではハイパードのゼームスが大いに研究した。ゴルドシヤイデルの研究はドウかと云ふと、今例へば指で物を動かす時分には第一指骨と第二指骨の間の此關節が動く。普通此れを動かすには固より筋肉が働くのである、けれども本人に知らさぬやう、殊更に此れを機械で動かす人は本人は全く受動的に成つて居る時は、知らざる故に筋肉は少しも働かないのである。然るに關節が僅か一度半位運動すると直ちに分かる。筋はデツとして居るけれども關節の運動若しくは何れ其の邊に壓力の關係があるの分分かるのであらう。そこで今度は此指全體に電氣を掛けて指の神經を麻痺させる、さうすると全體の感覺が少し鈍くなるけれども餘り變らない。今度は特に關節に電氣を掛けて關節の所を麻痺させると運動感覺が非常に鈍くなつて仕舞ふ、略感覺の度が半に減じて仕舞ふ。此等の事實を合せ考ふるに運動感覺なるものは關節の摩擦感覺に基くやうに思

はれる。ゴトルドシヤイデルの此の研究が發表せられてから學者が其の説を採用して居るのである。ゼームスもそれに似寄つた研究をして居る。詰りゼームスの研究も關節の感覺が非常に鋭敏である、筋覺に比較すると其の鋭敏なること逆でも筋覺の及ぶ所でないに云ふとに歸するのである。それで空間知覺上筋肉感覺の價値が大いに下つて來た譯である。余の實驗によつても筋覺は鈍いものである。現時心理學者の運動感覺及位置の感覺と言うて居るものは、運動の感覺は勿論、其他例へば手なら手を地平線に延ばして居るとか、身體全體で云へば姿勢の感覺、即ち身體は何れ程伸びて居るか、何れ程曲つて居るか、どうなつて居るか、と云ふ如き感覺を指すのである。そして運動の感覺及姿勢の感覺は殆んど全く關節感覺に依るものである。併しながら緊張感覺、筋肉から云へば緊張感覺、又他の方面から云へば抵抗感覺は此れは矢張り筋肉に依るのであると云ふことになつて居る。其事はエツピングハウスの心理學に詳しく論じてある。それで空間知覺には視覺外觸覺、内觸覺と云ふ此等の三感覺が關係して居ると云

ふだけは先づ動かないと見て宜からうと思ふ。二心理學上空間知覺に關する研究の結果は先づソンのものである。然らばそれで空間知覺と云ふものは完全したのであらうか、否尙多くの問題がある。ブントは認識論上の問題と心理學上の問題を分つて居るが、余は認識論でも心理學でもあらゆる方面から空間と云ふことを論ずるのであるから、或は心理學の論となり、或は認識論となり、或は又想像になることもある。それでブントが心理學上大いに研究した結果はカントの空間主觀説とどう云ふ關係になるかと云ふと、ブントも主觀説と同様の結果になるやうである。併しネチビズム及エムピリシズムは客觀説になる。尤も其後の心理學者はカントが議論したほどに多方面の關係を考へてそれを調和させやうとしたと云ふよりも寧ろ只心理學上空間知覺の順序を研究して居るやうである。

七、感覺的空間と概念的空間との關係

余は心理學を研究して居るのであるけれども、心理學の範圍を狭く限つて

それだけのことを研究すれば宜いと云ふのでなく、空間は何かと云ふことが極めて見たいのである。ブント及他の心理學上より論ずる空間知覺論者が空間と其の概念との關係を説いて居らぬのは余は大いに不満足に思ふ。前きに論じたる三の感覺に依つて知覺した所の空間と其の概念とはどう云ふ關係であるかと云ふにブントは或る時は客觀的空間と言つて居るが、其の客觀と言ふのが何を指して居るか明かでない。カントは之をアインシャウングと名附け、カント後の心理學者は心理學の研究上から論じた結果、重に感覺のことを論じ、ロッツェの所謂精神要素と言ふのは果して何であるかと云ふことは言つてない。それ故にカント以後の心理學の研究から得た所の結果は主として感覺上の研究、又感覺に由つて空間を知覺する方法が綿密に研究せられたと云ふに止つて居る。然るに先程もチヨト話した物理學及數學の方面も、之れを無視する譯には行くまい、其の方から考へて見ると、空間と云ふものは矢張り一種の概念である、殊にマハは運動から漸次歸納して得たる一つの概念であるとまで言うて居る。余自身

にもさう思ふ。實際ポイント即ち點は概念である、線も線の集つて出來たる面も全く概念である。感覺と云ふものも助けるには違ひない、けれども概して幾何學と云ふものは概念である。それであるのに其概念と視覺及觸覺との關係が充分分らなくては空間の説明になつて居ないと余は思ふ。ホフエディングは一様の無限の空間の如きは數學者の抽象にして心理學上此れに符合するものなしと云うて居る。併し心理學者は感覺の研究さへすれば宜いと云ふことで、概念の研究は論理學に譲ると云ふことは研究の統一を缺くと思ふ、必要ならば心理學上から論理學を研究するが宜いと思ふ。それで結局斯う云ふことになる、視覺から得た空間、外觸覺から得た空間、内觸覺から得た空間、概念上の空間、此等四の空間がある、そして其四の空間が各々特徴を持つて居る。視覺上から得た空間は何であるかと云ふと、色がその本體である。ヒュームが言つたやうに色が互に配列して居る、其色の配列をしたのはエキステンション即ち廣がりである。併し只色自身が配列するのではない、他にそれを配列させるものがある。それは何である

かと云ふと、眼球の運動である(哲學雜誌附録心理學六、七章參考)。それ故眼から得た空間と云ふものは、色覺が運動に由つて配列せられたものであると云ふ定義を與へたい。それによつて先程疑問として残して置いたグリーンインの説も解けると思ふ、グリーンインが言ふには空間は感覺が互に排除し且つ制定する有様である。色ならば色が互に排除して、其排除性が空間を成すと言て居るが、余の考へはさうでない、其色覺が運動の順序に由つて配列せられた其排除が即ち空間である。其證據には單に排除のみならば眼の外にもある、例へば口には甘いものと辛いものと、苦いものと、一緒に食べても、此れは甘い、此れは辛い、此れは苦いと云ふやうに互に排除して居るから區別が出来る。併し廣がりの考へは無い。眼の方は赤と青と紫とを見れば廣がりの考へが是非伴ふて来る。然らば口にはなせそれがなくと云ふと、色は眼球の運動に伴ひ運動の秩序に由つて聯絡綜合せられるが、口の方は排除しては居るけれども、それが運動に由つて綜合せられない。耳も同じことである、色々違

ふた音色が同時に這入つて来て調和を爲し、互に排除したる感覚が綜合せられて居る、併し耳には廣がりの考は無い。なせと云ふに運動に由つて配列せられて居ぬからであらうと思ふ。若しイロハと云ふ三個の音色があつてイを聞く時は耳が斯う動く、ハは聞く時は斯うと耳が始終動くことになつて居れば聴覚にも廣がりの考が出来るに違ひない。其證據には動物などは耳を動かして音響の來る方向を能く知る様子である。或は鼻が鋭敏であつて鼻の動く動物がある、鼻の動くのは偶然でない、鼻が動くことに由つて匂ひに幾分か空間性があるに違ひない、あれで方向を知覺するのである。併し人間は耳も鼻も動かない、舌は動くけれども舌の上で味ふ物と一緒に動くから關係上動かないのと同じである、故に廣がりの考へはない。色は運動と云ふ秩序に由つて綜合せられて始めて空間になるのでグリーインの言ふやうに單にエキスクリユデッドネス(排除)の一種でなく、運動の秩序に由つて綜合せられて居るそれが視覺的空間である。それから觸覺的空間は何であるかと云ふと、外觸覺と視覺とは理屈は同じ

ことで只色覺の所に持つて来て觸覺を置換へれば宜い。それ故外觸覺的空間と云ふものは所謂各部分の局所徵驗と云ふものを運動に由つて聯繫させたもの此れが即ち外觸覺の空間である。それから又觸覺と視覺と聯合することがあらうが、それは今論する必要は無い、兎に角觸覺的空間の形は觸覺を運動の秩序に配列したものである。それと視覺的空間との違ひは色覺と觸覺との違ひに基くので、結局目開きの空間と盲人の空間との違ひになる。それならば内觸覺の空間はどう云ふものであるか、此れも亦理屈は前二者と同じことである、けれども少し違ふ所は前二者よりは複雑である。即ち内觸覺の要素として筋肉の緊張感覺關節の運動感覺及兩者の聯合上より起る位置の感覺此等三は常に離れない、なせならば例へば手を動かす時分に關節感覺があると同時に筋肉が幾分か緊張する、幾分か抵抗に出會ふ、少しも抵抗なく手が動くことはないからである。それ故内觸覺は何時でも緊張感覺と關節觸覺との聯合に由つて運動感覺及位置の感覺を拵へて居

るのである。其運動感覺と云ふものは或は緊張が強くなつて來ることもあり、又緊張が弱くなつて實際の運動が勝つて來ることもある。緊張には唯強弱があるのみならず種類の差異がある、即ち何れの筋肉が緊張するかによつて緊張感覺は種々異りたる感覺となる。又筋肉は始終抵抗を受けつゝある、外物の抵抗に出會つて手足を少しも動かすことの出來ないこともある。或は非常に努力すれば動くこともある、即ち種々の場合がある。竟畢抵抗感覺と關節觸覺とが運動と聯合して内觸覺的空間を成すのである。それであるから視覺的空間、外觸覺的空間、内觸覺的空間、各皆感覺の類は異つて居るが、それを綜合するものは同じく運動である、故に運動が凡てを貫いて居るのである。

それで概念的空間は何であるかと云ふと、概念的空間は「ハ」の言へる如く矢張り運動の形式から抽象したものである、此所にも運動が基になつて居る。運動と聯合するものゝ工合によつて空間の類が三に分れて居る。併しながら此の概念的空間と云ふ者は他の三つから抽象したものであるか

ら、此等三の者を離れて別にある譯ではない。視覺は感覺が自分で能く發達して居るから平生は概念の助けを求むるゝが少い、けれども觸覺殊に内觸覺の空間は空間の概念によつて始終助けられて居るのである。一體物の幻影と云ふものは概念によつて起ることもあり、又概念によつて正されることもある、例へば子供に茶碗を斜にして見せてそれがどう云ふ形をして居るかと問へば、直には答へられない。此の上の所はどう云ふ形であるかと問へば圓いと答ふ、其實圓く見へて居ないのである、けれども其時は俄かに概念を用ゐて知らず識らずの間に視覺の缺を補うて居るのである。それから觸覺でも多少幻影が起らぬことはないが、目ほどには起らぬと云ふのは始終客觀的運動と親しく關係して概念的空間に常に矯正せられて居るからである。竟畢運動と云ふことは總ての空間に通じた要素であつて殊に概念的空間と云ふものは運動から成つて居るものであるから他の三空間を統一する作用を有つて居るのである。

グントは所謂融合説で視覺及内外觸覺互に融合して空間を生ずると云ふ

のであるが、何か普遍的要素なくして、單に事實上融合すると云ふのでは、假令論が誤つて居ないにしても、論據が薄弱である。余の説明はヴントの説と矛盾はしない、其の説に尙ほ一層の確證を與へるのである。即ち運動と云ふ普遍的要素があるから融合も可能になるのである。然らざれば融合説もマルの心的化學説附録心理學二〇三頁と違ふ所なきものになるのである。

八、客觀的空間とは何ぞや

凡そ概念と云ふものは常に必ず此れに符合する客觀物を持つて居る、客觀物のない概念は空想である。概念的空間は運動から抽象して出たものとするれば、概念的空間に符合する客觀物は運動である。又それで空間の三延長と云ふのは經驗的に知られたるもので、畢竟運動の性質が三延長であるからであらう。數學から云へば三延長は必要でない、然るにそれが三延長に限つて居るのは吾人の經驗を惹き起す運動の性質が三延長であるから

であらうと思ふのである。若し運動が四延長であれば四延長の空間を経験するであらうと思ふ。運動の三延長が外部より延長を三に限つた所以であらうと思ふ。さう云ふ風に考へて來ると、茲にカントに大なる缺點がある。カントが此れを主觀的に限つたことは一の缺點である。以上の説明によりてトレンドレンブルヒの批評も生きて來る譯である。それから又此れを概念にあらずと見たものも缺點である、カントが空間と云ふものを知覺的のものとしてアンシャウングに限つたのが間違ひである。空間と云ふものは經驗の受容性があると同時に意志の指導者である、感覺的であると同時に發動の指導者である。カントの空間論は發動的方面を見ない、そこが缺點であつてカントの認識論の不完全なる所以である。言ひ換ゆれば受ける方のアンシャウングのみ考へて發動の方のことは考へてない、併し實際は兩方面ある。其證據には吾人美術品を見る時は大抵受ける方面になるが、其他の場合に於ては、受けるのは畢竟後に意志を指導して行く爲めの準備である。例へば今此所で俄かに吾人が目の知覺を失つて仕

舞つたとすれば最も先きに感ずるのは何であらうか、物が見えないで不愉快であることか、其れよりは此所から家に行くに困ると云ふことが第一に起つて来る問題である、即ち空間的思想を起す方でなく、指導者たる方面が不都合を感ずるのである。カントばかりでない、西洋の哲學者は感覺的受容の方を見て指導の方を見ない。今に至るまで此兩方面を宜しく調和的に論じたものは無いと断言して宜い。此れは西洋のラシヨナリズム(主理論)の通弊である。若しストアイズムが發達してラシヨナリズムの方面と調和して居たならば此等兩方面は幾分か研究せられて居たであらうと思ふ。カントは其兩方面を調和しやうと試みたけれども成功しなかつたのである。

そこで受容即ち感覺の方面から見た時は空間は普通吾人が思ふて居るやうな物とは餘程遠ふ。カントの立場よりすれば空間は主觀的のものであつて物其者の性質を現して居らぬと言つたのは尤である。視覺は物其ものの真相を感覺的に現しては居ない。それは例へば言葉と言葉が指す物

との違ひ程に違ふて居る、色覺の配列は外來刺激の真相を現して居ない、カントが此を物如と離したのは尤と思ふ。余は此點に於てはカントに同意するのである。併しながら意志活動の方面に於てそれが指導の態度を取らねばならぬ、此方面に於ては主觀的に空間を組織して居る要素中の運動要素が所謂客觀界の運動と通有の者なるが故に意志活動の指導たるを得るのである。さう見れば意志と其の對象も皆運動と云ふ通有の所を有す。故に假令ひ感覺と感覺の對象とは其性質異りたるものであるにしても、意志と其の對象とは互に交換し得べき性質のものである。空間が意志を指導して客觀界に活動せしむることを得るのも全く運動的要素を有するからである。それ故意志の對象となつて始めて物如が其真相を現して來るのである。若し實行の方面に於ても物如と關係が付かなければ其のやうな物如は吾人に少しも用事の無いものである。物如の三の性質を以てそれ其外部にある運動が感覺に現はるときは表號として現はるゝのである。故に實物とは大いに違つたものである、けれども表號も實物の如

く運動と云ふ性を含むときは互に似寄つて居る、従つて感覺に現れた空間と云ふものも全く便宜上の表號でなく、矢張り自然的の意味を有つた表號である。其運動と云ふものは吾人には運動と休止と抵抗の三の状態で見られて居る。此れは多分運動が吾人に現るゝ現れ方で必しも客觀的に三の状態があると言ふとはなからう、此のことは又別に論ずる機會があらうと思ふ。終りに再び、空間と云ふものは感覺の方に於てはカントが言ふやうに客觀的の物如とは殆んど全く關係が無いほど違つて居るが、併し意志の方面に於て外物との聯絡が付いて來るからそこで客觀的に意味を持つて來る決して客觀から離れたものではない、ちやんと關係が付いたものである。即ちそれが意志と外界との關係を付ける指導者となるものである。以上の講演をするに就て参考したる重なる書籍は左の如きものである。固より不充分ではあるけれども或は何かの参考になることもあらうと思ふて此所に記し置くのである。

1. Edward Caird, *The Critical Philosophy of Immanuel Kant.*
2. Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (Text der Ausgabe 1781). (Text der zweiten Ausgabe von 1787).
3. " " " " "
4. Bradley, *Appearance and Reality.*
5. Nettleship, *Works of Thomas Hill Green.*
6. David Hume, *A Treatise on Human Nature.*
7. Wundt, *Grundzüge der physiol. Psychologie.*
8. " " *Grundriss der Psychologie.*
9. Ebbinghaus, *Grundzüge der Psychologie.*
10. James, *Principles of Psychology.*
11. Berkeley, *An Essay towards a New Theory of Vision.*
12. Bain, *The Senses and the Intellect.*
13. James Mill, *Analysis of the Phenomena of the Human Mind.*
14. Russell, *An Essay on the Foundations of Geometry.*
15. Mach, *Erkenntnis und Irrtum.*
16. Stumpf, *Ueber den psychologischen Ursprung der Raumvorstellung.*
17. John Dewey, *Studies in Logical Theory.*
18. Harald Höffding, *Outlines of Psychology.* (哲學雜誌第百四十六號)

第十四 道德的満足の感情に就て

今日の研究の題は申上げて置きましたやうに、道德的満足の感情に就てと云ふ小題で、話の主意はそれに由る積りであります、けれども話の起りは先日中島君がお出になつて無念無想と云ふやうなことを話してはどうかと云ふお話がありました、また倫理會講演集の中に私の心理學綱要中の無念無想のことに就ての評に私の考は必しも佛教の無念無想と云ふことのみならず、儒教の未發の中などにも矢張り同じく當て候まる、或は性——皆同じである、と御批評を下さいましたので、それで直に思ひ當つたのは喜怒哀樂未だ發せざる之を中と謂ふ發して而して皆節に中る之を和と謂ふと云ふことであります。

成程未發のところは未だ發しない間であるからどう云ふものであるか分らないけれども、發して皆節に中るなど、云ふやうなことは餘程練習を積んで初て達し得べきことであらうと思はれる、儒教の註釋はどう云ふ風になつて居るか知りませぬけれども、一體人の性と云ふものは善であるにしても喜怒哀樂の情が自然に發すれば皆うまく節に中ると云ふ様なことは今日から考へれば到底ないこと、見ねばならぬ、して見ると所謂未發の中を得ると云ふものは之を佛教の言葉に直して言へば本來の面目或は本來の性を悟るなど、云ふことを云ふ所であらう、けれどもそれは極く原始の性ではなくして餘程練習し、悟りに悟りを重ねて始めて達し得らるゝとで、又沈黙の状態と見ねばならぬ、それでなければ發して皆それが節に中ると云ふことは言えない、果して發して節に中ると云ふことがあれば夫は修業の結果で、又そこに矢張り倫理の中心と云ふものもなければならぬのであらうと云ふ考であります、それで今日お話申さうと思ふことは人生の——ウブと云ふよりは人生先天的に有して居るところの——未發の性と、修養を重ねて達し得た未發の性と云ふやうなものとの比較並に關係、それに達する方法等に關する考を話したいと思ふのであります。

西洋思想
一は横の統

一體西洋の思想と東洋の思想と大いに異つて居る點がありますからそれを先づ話したいと思ふのでありますが、西洋の思想と云ても極く漠としたことで人によつて思想も種々違ひます、けれども、其の種々違ふ中に自づと西洋的と云ふものがある、それは何んであるかと云ふと先づラシヨナリズムと合理學派と云ふ語を以て大體を掩ふことが出来るのであらうと思ふ、それを人に就て今少し具體的に言ふて見るとカントの哲學のやうな考へ方が西洋の特質を現はして居る譯で、其後出たところのシヨツペンハウエル、ヘーゲルなどになれば既に幾分か東洋思想を加味して居る様であります、そう云ふ風に見て來るとカントは御承知の通り意識の統一と云ふことを大いに主張したのであります、カントの哲學と云ふものは全體の統一をすることが出来ずして種々後世の批評を招くに至つたのであります、其の缺點として指すところはどこにあるかと云ふことは、是亦研究する事柄によつて種々の方面から言ふことも出来やうと思ふのであります、今特に諸君の御注意を煩はしたいと思ふのは、カントの意識の統一と云ふものは假

りに之を横の統一とすれば、カントの哲學に於て缺けて居るのは縦の統一である、と云ふことである、横の統一と云へば即ち同時的に存在して居る多くの物を統一するのを云ふのであります、縦に統一すると云ふのは時間上前後の關係を統一して行く、と云ふことであります、尤も西洋でも縦の統一がないと云ふのでない、彼の進化論は縦の統一を現はしたもので、進化論の立脚地から見ると、確かに今言ふて居るところの縦の統一が出来るとは、併ではないかと云ふ論も起るでありませうが、それは無論さうであります、併しながら進化論が世に出て以後、其進化論の思想を心理學にも應用して人格の縦の統一を説明しやうと試みて居る人は澤山に有ります、けれども、今日の所では未だ其事業に於て十分成功した人が無いのであります、現時の大家たるゼームス、ブント——ブントは或方面に於ては人格活動の縦の統一をしやうと力めかけたやうでありました、けれども最後の著書たる心理學概論に於ては矢張り西洋固有のラシヨナリズムの系統に歸つたのであります、それで縦の統一をしようと云ふことに付ては成功して居ない、心理

學を進化論的に説明しやうと試みて居る人は澤山有りながら、未だ心理學書を進化論の立脚地から書いた人は無いのであります。スタウトのアナリチック、サイコロジイはあれは私の謂ふ横の統一であつて、其著書の出た時此次ぎは發生的心理學を書くと言ふて大いに世人の希望を惹起したのであります。但し其の書が出た所が、普通の心理學の教科書であつて、アナリチック、サイコロジイの様な研究の書ではありませんでした。成功しなかつたのは實際事柄が六ヶしいからであります。

然るに東洋の思想は一方に於ては西洋ほどロジカル即論理的に系統的に出來て居ないけれども發生的には出來て居る。東洋では進化論的思想が古代印度の時分からあつたので、固より細かな點に於ては種々缺點があると云ふことは申すまでもありません。が、少くとも個人の思想上に於ては所謂縦の統一が出來て居る。尤も社會の歴史上の年代的思想とは別のものであります。是が東西の思想の一の著しい違ひであらうと思ふのであります。尙一つはそれと關聯して居るか居ないか私は自ら關聯して居るであらう

東洋思想
には縦と
横とがあ
る

と思ふのであります。是もカント以後は多少變つて居りますが、西洋ではラシヨナリズムと云ふものが一種のアイデアリズム觀念學派になつて居ると云ふことで、是も吾人が具體的の經驗をするその經驗から漸々抽象して得たところの所謂概念、其概念と云ふものを實在と見た譯であります。然るに西洋にも古來既に科學派があつて其方面から言ふと概念と云ふものは寧ろ假りに抽象したもので時間空間に現はれて居る客觀的の現象を以て宇宙の本體と見たのである。此の派と、ラシヨナリズム若くはアイデアリズムと云ふやうな傾向と二つに分れて居た、それが分れて居て、而して其間の聯絡が付いて居ない、各固執し自説を執つて他を嘲つて居ると云ふやうな譯であつた。所が東洋の思想重に佛教(後に儒教もあますが)を言ふのであります。がそれで見ると、初め具體的の經驗から抽象して主觀的の狀態に入る、例へば坐禪をして考へたり其他の方法によりて段々悟つて行く、段々悟つて深い處へ入つて行けば段々世界から離れてしまふやうに思はれるのであります。が、その悟りの奥を悟つて行つた處はどこに至るかと言ふと失

學派の分る、所以

張り元の此世界に歸つて来て、常識と合し、圓は圓、角は角、赤は赤と云ふ譯で即ち柳緑花紅の理屈で元のものになると云ふやうに、一つ循環して來たのである、そこが西洋の思想にない、ヘーゲルに至つて始てそこを見て居ると云ふて宜い、併し此は東洋から得たので古來の西洋的思想にはない點であります。

一方には具體的の物をつかまへて此れが事實であると云ひ、一方には主觀的に悟つたところの、リーゾン理と云ふやうなものをつかまへて、それが實在であると云ひ、各固執して調和が付かない、所が佛教では段々悟つて其終局、元の處へ歸つて來たのが實在であると見る、それより外に實在はないと云ふのが東洋の思想の面白いところで西洋人の未だ解せないところである、西洋人は自分達が解せないとそれは神秘であると云ふ、けれども實際の具體的の經驗から離れて論理的に悟つてそこに實在があると思ふは却て神秘である、東洋のはそれを通り越して元へ歸つたのであるから其點に於ては確かに西洋思想の數等上に出て居る、禪などで云へば例へば至道無難、唯

の由來

プラグマの運動は尙幼稚である

嫌、揀擇、纒有言語、是揀擇、是明白、杯と云うて圓は圓、角は角と見るのみ、一方に偏するのを嫌ふと云ふのでアイデアリズムであらうが、ラシヨナリズムであらうが、マテリアリズムであらうが、凡そイズムと云ふものは一方のみを執つて居るとの意である、一方面だけ見て何イズムでなければ世界の説明が出来ないと云ふは淺薄である、具體的の經驗に依て幾分か悟つたけれどもまだそれより奥へ行つて元の處まで歸つて來ないのである、其循環が出來て居ないと云ふのはどこに基因して居るか、と云ふと、西洋の思想は論理的であり合理的であり靜學的であつて横の統一のみである、動學的の縦の統一が十分發達して居ない、これが斯る缺點を生じて居る理由であらうと考へるのであります。

現時のプラグマチズムと云ふ運動が幾分か東洋風に向き掛けて居るが、是も確とした説がなくして、各學者が銘々勝手の説を立て、居ると云ふ位のことである、進化論的の心理學が出來て居ないやうに此プラグマチズム的の心理學及び哲學と云ふものは未だ發達して居ない、さう云ふ事を十分經

驗し研究した人が無いので有ます、此等の思想を十分自分の思想中に同化し熟練して自由自在に物事に應用して行かうと云ふには、ゼーミュスのやうな人が此上數十年も研究を續けなければならぬ、さうすれば出来るかも知れぬが、今の所は思想が餘程幼稚であると云ふて宜からうと思ふのであります、それで人格とか品性とか云ふやうな問題を西洋の思想のみによつて解釋しやうと思へば困難である、人格杯と云ふことは現時の倫理學ではどう云ふて居るか、また品性と云ふものはどう云ふものであるとしてあるか、それ等問題は實際ラシヨナリズムとかアイデアリズムとかイズムの考を以ては解釋の出来ないものと自分は思ふ、其解釋が出来れば倫理上の満足と云ふことも亦解釋が出来ないのであらうと思ふのであります。斯う言へば甚だ獨斷的のやうであります、自分の思想をはつきり言ふためにかう申しましたが、是から縦の統一と云ふことと横の統一と云ふこととの關係を心理學上の事實からお話したいと思ふ、此問題と云ふものは元來所謂抽象作用に基いて居るので——抽象的概念及び抽象作用からラシ

抽象作用
の由來

ヨナリズムと云ふものが起つて來た譯であります、即ち哲學者が抽象して得た概念と云ふものが自分の經驗の對象になると云ふやうな所からそれに非常の興味を持って來たと云ふやうなことが、元來哲學の起りであらうかと思ふのであります、それで具體的のものと云へば矢張り目で見たり手で觸つたりする即ち茲に現はれて居る物である、其具體的の物から抽象すると云ふのは——そう云ふ抽象作用が起つて來たと云ふのは丁度有機體が自然に發生して來ると同じやうに自然活動の一現象と見て宜からうと思ふ、其抽象作用の用と云ふものは後とから付ける事であつて發生して來る時は用があるとかないとか云ふことには關係しないのであります、併し今日は抽象作用の用は何であるかと云ふと種々是には用があると云ふことが分つて居る、多くの者はそう云ふ事を考へずに居るけれども之を考へて見ると誰にも分ることである、之を社會上の現象から例を取て言ふて見ると、古代には實物交換と云ふものがあつたと云ふ話であります、米がある

抽象作用
の用の比
論

と米を持って行て先方の菜と換へると云ふやうに實物交換をやつた、それが

誠に健全の間違のない仕方である、けれども、段々それが複雑になつて來るとそれでは間に合はなくなつて、段々便宜法を工夫して貨幣と云ふものを作つた、そして貨幣を以て物を賣買すると云ふ組織が出来て來た、一體貨幣と云ふものは何かと云ふに此れは第一實物を代表して居るものである、實物の價值を代表するものである、然れば、何の用ありて貨幣を拵へたかと云ふに、若し貨幣が實物と同じやうな大きな石か何かで出来て運搬に手數の掛るやうな物であつたならば此れを拵へる必要はない、實物を持って來た方が便利である、所が貨幣は實物よりは小さい物で必要のときには米とか布とか云ふ實物に換へることが出来る、今空間の關係のみから考へれば運搬に便利であると云ふことが一の大なる用でありませう、其貨幣賣買組織が今日では段々變化して銀行とか爲替とかが出来ても貨幣を運搬することゝが不便であつては其功をなさぬ、そこで振替貯金であるとか云ふやうな組織が出来たと云ふのは畢竟運搬の便不便から起つて居る、其様に概念と云ふものもその一の用は矢張さう云ふ運搬の便不便から來て居るであらうと

儲蓄の用
貯蓄の用

心算の用
算の用

表象の用

思ふ例へば家屋を諸方へ持歩くことは出来ないから大體の圖を取て諸方へ持歩いて人に見せる、或は大きな景色を持歩くことは出来ないから寫眞を取て其處へ行くことの出来ない人に土地の大體の概念を與へる、さう云ふやうに茲に或一の具體的の物があれば其の物には幾つかのデトルミナント(決定)がある、例へば重量がある、廣がりがある、色があると云ふやうにデトルミナントがある、其デトルミナントの一或は二或は其以上を捨て、しまつて或は斯う云ふ圓い物を平い紙の上に表はし、實物に關する大體の思想を看客に與ふるのが抽象である、寫生圖と云ふものは其適例と見て宜からうと思ふ。

吾人の表象と云ふものは矢張外界の寫生圖である、丁度實物と圖との關係のやうに、圖ならば之を持歩くに便利であるやうに、實物が目に映つて表象になる、するとそれは種々の點に於て有益である頭の中に入つて有機作用になる、紙に圖を描いて丸めて置くのとは少しく違ひ又運搬の便利と云ふのとは少し違ふ、頭に種々の表象が入つて來るとそれが有機的に總合せ

れたり或は分析せられたりして茲に一の想像が起つて来る、其新しい想像は畢竟吾人の行爲と云ふものを經濟的になさしむるものである、それはどう云ふ事かと云ふと若し表象も何もなく機械のやうなものであつたならば、是から何か一つ食物を求めやうと思ふと、其處等を歩けるだけ歩いて、行當れば宜し行當らねば骨折損になつてしまふのである、然るに彼方此方の表象を寄せて頭の中で想像すれば、此方へ行くと大抵何かあるだらうとか彼方にはないとか云ふことの見當が付く、想像によつて見當を付けて行くと云ふのが吾人の意志活動と云ふものを輕便に有効にする譯である、表象が頭の中で活動するの用は其處に在る。又他の方面から見ると、詩人の想像の様には其ものが既に一種の愉快を與ふるから意志活動を輕便にするかしないか、有効にするかしないかに拘らず、想像と云ふものは價值の有ものである、或は哲學者は斯う言ふでありませう、思想と云ふものを實行するしないに拘らず思想其ものが系統的に出來て居る、其處に一種の趣味があつてそれ

心の要求
各方面に
分かる

が哲學者の内省的快樂であると、知識のために知識を求めると云ふのは其處にあると、固よりさう云ふ事も確にある、それがなかつたならば人生は趣味の少いものでありませうが、それも一方面である、けれども人類の社會方面、或は自然に對する方面と云ふものも亦人生の大切なる方面であつて前者と同等若くは同等以上の價值のあるものと思ふ、内省的趣味から云へば知識は知識のために、概念は概念のために求めるのである、學者動もすればさう云ふ方面に走る弊がある、然るに今申した通りに社會の方面或は天然に對する方面と云ふものも亦人生の重要な方面で今其方面から見て言ふならば、概念或は表象と云ふのは畢竟實物からの抽象である、或る便宜の爲めに具體的の經驗から或決定要素を抜いてしまつたものである、頭の中で或は綜合し、或は分析して變化すると云ふのは再び之を意志の活動に現はして社會的事實若くは天然の事實上に實現するの準備である、と見て宜からうと思ふ、其方面が所謂プラグマチズムの主張するところの良い點であらうと思ふのであります。

人格は恒
に理想と
共にある

さう云ふ風に之を見て來れば吾人の所謂人格と云ふものは一方に於ては身體の中にあると見ることが出来るけれども又他の方面から之を見れば單に身體の中にあるのみでなく身體の運動が指して行くところの其終局點にある例へば茲に人があつて一の美麗な庭を造つて見やうと云ふ理想を懷き、それを自分の目的として大きな計畫をし庭を造るとすれば、其庭と云ふものの理想か其人の人格である、其の庭を造らうと云ふ表象は固より身體の中にあるけれども其の表象と云ふものは自分が造らうと思ふて居る庭を實現するやうに常に働いて居るのであるから、其庭と云ふものが其人の人格を現はすことになる、其様に或人が斯う云ふ事業を起さうとして働いて居れば、其人が計畫して居ることが其人の人格になる譯である、さう言ふと少しミスチック(神秘的)の所があるやうであります、さうひとくミスチックのことを言ふ積りでない、其計畫と云ふものは無論其人の頭の中にあるのであります、けれども其計畫と云ふものは其人の活動して得た結果として現はれるのでありまして、恰も感情の表出は顔の形に現はれ或は

手の形に現はるゝ如きものである、尤もゼトムス、ラング説では人が悲しいから涙を出すのでなく涙を出すから悲しいのであると云ふのである、此は一寸詭辯的論法のやうに聞へますがこれは一種の美辭法でありまして趣意は斯う云ふのであります、内部に一の感情があつてそれが偶然顔の形手の形に現はれて來るばかりでない、手の形顔の形が感情を起すのである、表出は結果ではない、寧ろ感情の原因であると云ふのである、けれどもこれも亦言ひ方が少し極端であらうと思ふ、即ち感情と其表出とは同じ處にあるので表出は原因でも結果でもない、顔の形に表情がある、そこに感情がある、私の今言はんとする處は丁度さう云ふ意味で人格の性質と云ふものは其人成した事業に現はれて行く、さう言へば普通のことと誰も疑はないであらうと思ふ、即ちミスチックのことはない、それで人格の性質が其人の事業に現はれると云へば極く普通の事でありまして、それでは事業と人格との關係が薄いやうな心持がする、客觀的に現はれた事業が取りもなほさず人格の一部分である、事業と云ふものはたゞ偶然の現はれでなくして人格

人格は恒
に理想と
共にある

人格は客
觀世界に
もある

の一部分であると見たいのであります。さう云ふ風に考へて見ると人格と云ふものは單に身體の中にあるのみでなくして、社會——廣くは宇宙にある、これは神秘的力で宇宙に據つて居ると云ふのでなくして、活動して行くのは身體に據つて活動して行くのであります、けれども其の目的が宇宙にも社會にも關係し得るので、其が人格の形式要素とでも云ひませうか、一個の要素と成つて居るのであります、即ち目的は宇宙にもあり社會にもあり身の中にもある、それが其人の品性である、其品性と云ふものが常に其人の活動の方向上に選擇作用を行ふて行くので、即ち自然淘汰によつて動物が發達して來たと云ふやうに、恰度其様に吾人の意志活動と云ふものは始終品性の淘汰作用を受けて居る、さう云ふ意味に於て品性と云ふものは意志を支配して行くのである、支配して行くと云うて品性と云ふものに力があつて意志を活動さすと云ふのではない、唯意志活動の批評をして行くのみである、即ち品性に適ふ意志活動は之を助け、品性に適はない活動は之を拒絶するのである、靜學的に之を見ると品

品性の淘
汰作用

性と云ふものは人格の中樞を形造つて居るものと云ふのであります、が、イナミカルに考へると品性其ものが意思の結果を許容すると拒絶するだけの作用をする、そこで品性が意思の結果を許してしまふ時には事が極く圓滿に行く場合であつて餘り論ずることはない、けれども品性が此を拒絶すると云ふ方面を少し申したのであります。品性が意思の結果を拒絶して受け付けないと云ふ場合に於てはそこは二つの中一を擇ばねばならぬことになる、一は品性が意思の結果を拒絶してしまつて意思が敗北に歸してしまふと云ふのと、一は品性に拒絶せられて尙意思が品性の刺激によつて活動を續けて再び仕直すと云ふのである、意思がそこで止つてしまへば其意思は失敗に終つてしまふが、仕直して再び其結果がどうなるかと云ふことを見る、即ち現時の動物學ではメンード、オフ、トライアル、アンド、エラーと云ふて一度やつて見て間違つて居ればもう一度やり直す方法で精力活潑なる動物は幾度となく之をやる、是は精神から來た自然淘汰と見ても宜しい、自然には無數の生物が發生して來る、其中不

適者は滅亡して僅の適者が残ると云ふやうに心の内部の方面から見ると無数の心的活動があつて或は失敗しては幾度となくやり直しを試る、其中で少しでも自分と違つて品性の氣に入らぬものは品性が淘汰して棄て、了ふ品性の氣に入るまで幾度でもやり直させる、是は自然淘汰に對して品性上の淘汰である、終に適者として残つて行くものは其品性に適つたもので、それが品性の性質を現はして居るものと見て宜い譯である。そこで品性が満足するまでには幾度も失敗を重ねて終に品性に満足を與へた時には、其品性は今まで不安の状態にあつたものがそれで満足して安んずる、其時の具合を風に揺れて波のあつたのが風の止んだが爲めに水の表面が穏やかになつたと云ふことに比する人がある、けれどもそれとは餘程違ふ、尤も動くも止むとの關係だけから言へば風の止んだと共に水の表面が穏かになつたやうに心が穏かになつたと言つても宜い、佛教などではさう云ふ譬を使つて居りますがこれは譬として悪くはないが私はその譬の中には最も大切なる所を抜かして居ると思ふのであります、水は幾度波

品性と經
験との關
係

品性の變
遷

に揺れてもそれがためにその性質が變つて來ると云ふことはない、靜になつてしまへば元の水であるが、品性は少しく此れを違ふて意思が一度活動して品性に満足を與へれば、其の時の品性は幾分か得た所がある、それが進歩したか退歩したかと云ふことは別であります、兎に角動く前の品性と動いて再び穏かになつたときの品性とは少し違ふ——或變更を受けて居ると云ふ譯で、さう云ふ事が二度あれば二度目には二度目の變更を受ける、三度目には三度目の變更を受けると云ふ風に、意思が活動するたびに品性が變つて行くけれども必ず漸々向上的に行くか、横に伸びて行くか、下へ降つて行くか、上下へ昇降して行くか同じ處で動いて居るか分らないが動物が進化したと云ふ長い歴史から考へれば段々向上的に行くに違ひない、品性が發達して來たに違ひない、さう云ふ方面から考へれば品性と云ふものが過去の歴史を文字に表はしては有て居ないが或形に於て前より來た歴史を代表して居るものであつて、而も其品性が有て居るところの理想と云ふものは將來の理想を表はして居る譯であります、さう云ふ意味に於

て品性と意思活動と云ふものが縦の統一を爲して居るのである。それで品性が縦の統一をして居るのであると云ふこと、品性が選擇作用をし淘汰作用をするると云ふこと、此二點を明かにした積りであります。そして倫理上の満足でも、宗教上の満足でも、美學上の満足でも、凡そ満足と云ふものは皆品性の満足に歸するのであらうと思ふのであります。すると同じ一の品性でありながら美的満足とか、宗教上の満足とか、倫理上の満足と云ふ風に種々違ふと云ふのはどう云ふ譯であるか此等を概括した人格の満足と云ふものがありさうなものである。この人格に倫理宗教美學等の相互の共通點もあり、また差違のある所も現はれて來はせぬかと思ふのであります。今假りに美的満足と倫理上の満足とを比較して見ますと美的満足と云ふ方は其性質上は靜學的(丁度當らぬかも知れませぬが)と見る、美的満足は現在のものである、例へば繪畫彫刻にしても、音樂其他舞踏などにしても美的満足と云ふものは吾人の情性が主になつて、それが種々に現はれて來たもの

美的満足
と倫理的
満足の差
異

のを統一して一の美感と云ふものが起るのであつて、美感と云ふものは美感其ものだけに付て言へば未來と云ふ觀念は餘程少いであらう、其美感中に未來と云ふ觀念が入らないことはないでせう、入つても宜いが併ながらそれは現在の觀念として入つて來る、例へば茲に繪畫なり音樂なりがあつてそれが將來の事まで吾人に示唆を與ふるやうなものであるとすれば、さう云ふ物もあり得るでせうが、それは未來の事が現時の思想として入つて來るのであつて、其美的満足を拵へて居るものは皆現時のものである、倫理的満足でも自分が行ふた事或は人の行ふた事が善かつた、或は倫理上善い事であつたと云ふ所謂良心の快樂と云ふやうなことは、それは矢張り現時の状態に依て居るやうでありますからさう云ふのは美的快樂と餘り違はない、例へば茲に人があつて親に孝行をする其他忠義にして能く働く、其を見る人は感心な人であると賞める、斯う云ふ時には矢張り一種の美感である、倫理でもさう云ふ風に現時のものみに關係した時は美的の性質になつて居る、けれども倫理が特に美的と違ふ所は倫理は大いに縦の統一をさす

るものである。未來のことを現時の思想として見るのでなく未來に實行しやうとして未だ實行しない事を考に入れて來ると云ふ所が美感と違ふ。そこで所謂文藝と倫理の衝突も畢竟此の差異に歸して來はしないか、倫理は縦の統一を重んずる、美學文藝等は現時の物のみに依る、併し若し文藝でも縦の統一を入れて來て未來の發達如何等のことを考へると云ふことになつて來ると、倫理と同じやうに實際的關係を有つて來て、例へば今斯う云ふ事をすれば先きで文藝を發達させて行く爲めになるかならぬかと云ふことを考へると、倫理と同じやうに大いに現時の美的快樂を押へなければならぬ場合も起つて來る、畢竟縦の統一を入れて來るからであらうと思ふのであります。

また倫理と宗教と云ふやうな方面を考へますと、是亦兩方其時間上に於て縦の統一を重んじて居ることは違はない、併しながら思想の範圍が宗教は自然界全部に關係して居るものと見れば倫理は人と人との間の關係即ち社會上のものであつて、宗教が天であれば倫理は社會であると云ふやうに、

倫理と宗教との差異

圓滿なる悟り

品性の思想が廣つて居る其の範圍が異つて居ると云ふ所から宗教的満足と倫理的満足との違ひが起る、品性の具合が少し異つて居るから従つて満足せしむる事柄も亦自ら異つて來るのである。

斯う云ふ違ひが起つて來て居ると云ふのは重に西洋の思想から起つて來て居るのかと思ふ、なせかと云ふと西洋の思想は横の統一が重になつて居るから宗教と倫理と云ふやうな違ひがあつて、倫理の中でも理論的とか實際的とか區別があると云ふのは私は殆ど無意味のことでないかと思ふのであります、純粹理論的の倫理と云ふのは幾何學か論理學のやうに理性の要求を満足せしむるので品性の修養には特に關係があるまいと思ふ、なせなればそれは人の思想界全體を通じたものでなく、横の統一を重に見たもので圓滿な思想界にあるものでないからである、或は美的觀念と倫理の差でも西洋流の思想から見れば關係がないものと見なければならぬ、美的觀念と倫理觀念とは關係のないものである、それは縦と横との統一を圓滿にして居らないからである、之を佛教の即身成佛に考へ、悟り得た所は別にあ

即身成佛

る譯でない此身即佛であると云ふところから見れば、美的觀念と倫理上の觀念は衝突することがあつても其衝突する理由が分つて居るからそれに對する吾人の態度を定むることは容易である。また倫理と宗教の關係の如きも即身成佛と云ふに於て宗教も倫理も異つたものでなからう、たゞ起りが違ふ、宗教は人以外に神があると云ふ考から起つて居る、倫理は社會上の父子君臣夫婦長幼朋友等の考から起つて居る、けれども即身成佛ですから倫理界即宗教界——倫理界を離れて宗教界なく宗教界を離れて倫理界がある譯でない、と云ふ風に見て來ると其時の場合の具合で物を縦に置いた時と傾けた時とは違ふことがあつてもその本性に於て或時は宗教的になつて居るとか、或時は倫理的になつて居るとか、或時は美的生活になつて居るとか云ふことはない、何時でも同じことであつて美的觀念が宗教的觀念を助け、宗教的觀念が倫理的觀念を助け、相頼つて行くのであつて別に異つたものでない——共通の方から見ればさうである、差別の方面から見れば社會上の歴史がありますからそれが續く

間は一人で悟つたやうなと言ふて此等を皆同一視してしまふとは出來ない——歴史が容さない、けれども發達して行く傾向を言へば倫理宗教美術と云ふやうなものは益、分れて行くのでなく一致して來るものと思ふ。西洋には宗教と云ふものは學問とはまるで關係のないものであると云ふやうな考が今日は専ら行はれて居る、一時は學問上から宗教が大いに迫害を受けて始どバイブルは學問上存在し得ざるものであると云ふ程の迫害を受けたが、此等二は違つたものであると云ふ立脚地を發見して宗教を維持して居りますが、西洋流の見方にするると違ふ方が極端に行つて關係のないものとせられてある、學問が開けても宗教に關係しないと云ふ今日の立脚地はそれである、さう云ふ方から見れば美術は倫理に關係なく宗教も此等に關係しない。

どうしても此問題を解決するものは東洋流の思想であつて、西洋の進化論ヘーゲル等の思想を持て來ても宜いが、ラシヨナリズムの思想では解決が出來ない、東洋流の縱横の統一をして行く即身成佛的の考でなければ出來

より定めたる一種の獨斷にして、之れを立證するは殆んど不可能に屬す。

二 宇宙に秩序あり

余は人格的神の客觀に存在すること、即ち宇宙の本體は吾人と同じく感覺を有し情緒を有する或るものなりと信する能はず、然かも余には又余一個の信念あり。宇宙に秩序ありとの信念即ち是れなり。宇宙の活動は甚だ複雑なりと雖も、決して夫の萬花鏡の千變萬化する如く偶然にして無秩序に見ゆるが如きものにあらず、一定の秩序を以て進行しつゝあるものなりとの信念あり。此秩序の觀念は之を立證し得べきものにあらず、唯余の信念として存すといふの外なきなり。余は宇宙間に此秩序の存するを信するが故に、萬般の活動は悉く此の秩序に合致すべきものなりと思惟し、之れを以て余の倫理的觀念の基礎と爲すなり。是れ實に吾人の科學的思想の所産に外ならざるも、其詳細は今後漸次研究すべき範圍に屬し、其信念たる性質に於ては所謂宗教上の信念と大差あるものにあらず、余は此信念に基

きて吾人人類の活動を律せんとするものなり。

吾人は個々の活動が宇宙の大秩序に合致せる時は之れを正當のものと思惟し、然らざる場合には之れを正當を失せるものと見做す、換言すれば宇宙の秩序は總體の秩序の上に最高の權威を有し其のすべてを包容し之れを統一するものなり。故に一局部に限られたる場合に一定の秩序を有するが如く見ゆる活動も、其の更らに大なる秩序と相容れざるものなるに於ては之れを正當の活動と見做すべからざる場合あり。例へば一定の組織をなし一定の秩序の下に海賊の行爲をなすものありと假定せんか、其の所爲も亦一定の秩序を以て行はるゝのものに相違なしと雖も、其秩序は要するに一層大なる秩序を破壊せんとするものなるが故に、社會は之を許容する能はざるなり。畢竟此秩序は其包括する範圍の大なれば大なるだけ宇宙の秩序に合致するの度を増加するものなるべきが故に、吾人の知識が此等の秩序を包括する範圍を擴大し得れば得る程吾人の判斷は正確となるなり、故に此の一點より之を見れば、人の惡に赴くは彼れの心中秩序的統一觀

念極めて狭少なる範圍に限られたるの結果なりと見做す事を得べし。吾人此秩序的統一觀念を廣大なる範圍に於て正確に保持することを得るに於ては、吾人の行爲は自づから倫理的なるを得べき筈なり。人の使命は此

三。信念の形式

斯くの如きは余が倫理の基礎として有する信念なれど、倫理の基礎は此の信念に限るといふにあらず、信念の形式は各個人の思想の工合に於て様々なるべしと雖も、要するに倫理は何等かの獨斷的の信念を必要とすといふに過ぎざるなり。最大幸福、完全説の如き古來の倫理思想は何づれも或る信念の上に建てられたるものならざるはなし、人道といひ、天命といひ、或は又近時宇宙の進化を説く、皆大概括に基き、立證^{デモンストレーション}を超越したる獨斷的の觀念に外ならず。是れ吾人が倫理の基礎として、宗教上の信念に似たる或るものを必要とすと斷言する所以なり。

四。倫理上の信念

斯く倫理上の信念は其作用の方法及目的に於ては宗教上の信念と差違あるものにあらざるも、其内容に於ては決して同一なる能はず、倫理上の信念は多くは現代科學的思想の所産にして、科學と一致し之れと相補充するものあるに反し、宗教上の信念は因襲的の信仰の所産にして、其の科學思想との關係は必ずしも此れと矛盾するにあらずと雖も、又調和を必要とせず、寧ろ之れと沒交渉的のものと解釋して始めて許容せらるべきもの多し。故に一方より之を見るときは科學的思想の進歩は倫理上の信念に對しては常に之れを更新發達せしむるものにして、因襲的なる宗教上の信念に對しては屢、撞着矛盾を來して之れを破壊するの傾向を有するが如くに思はる、果して然らば倫理學者の其の科學思想に基ける倫理上の信念を標榜し、宗教上の信念に對し破邪顯正の旗を翻すべきは其社會に對する責務にあらざるか、抔の疑問を生ずべし。然かも倫理學者が自家の信念を呼號して社會

に宣布する宗教家の如くなる能はざるを見れば其所に又他の勢力の潜伏するありて然らしむるものなることを思はざるべからざるなり。蓋し倫理上の信念は幾多の詳細の點に於ては宗教上の信念と相容れざるものあるは勿論なるも更らに公平なる見地より之れを見れば倫理上の信念は必しも宗教上の信念より優越なりとの斷定を生ずることなく。此兩個の信念の思想の形式の上より見れば、一は科學的にして一は因襲的なり、一つは比較上進歩的にして一つは比較上保守的なる等の差はあれど、其實此の比較は當を得たるものにあらざるなり、何とならば此は學說の比較なれども吾人の要求する所は一個の信念若くは品性にして、行爲の法則上に權威を有する實踐的一種の力なり。而して此の力は其倫理上のものなりと宗教上のものあるとを問はず今日の科學思想を以て之れを立證するの不可能なるも前に云へるが如し。既に等しく獨斷なり、吾人は倫理上の信念と宗教上の信念との間には是非優劣の判斷を下すべき科學上の根據を有せざるものといふべし、知識の方面のみに就て云へば此れを科學的と云ひ

彼れを迷信なり誤謬なりといひ得べき餘地はあるべきも其信念としての價値は共に批判以上に屬し、絶對の勢力を有するものなり。現時の科學的思想は未だ徳行家の信念をすら檢證する能はず况や宗教上の信念に於ては手を下すべき餘裕あるべき理なし。是れ原來研究的態度に在る倫理學者は、プロバカンテイスト(擴張主義者)なる宗教家に對抗して排他自立の運動を爲す能はざる所にして倫理學者も社會上、倫理學をして其効力あらしめんには良心若くは天道等の如き幾分か超論理的信念を必要とするにはあらざるか。

五 排他自立の觀念

總て排他の傾向は宗教家に強くして論理學者に弱し。宗教は概ねプロバカンテイズムにして、宗教の形式を有するものならば所謂衆生濟度の精神を帯びざるものなし。従つて排他自立の觀念極めて旺盛なり。此排他の傾向は近代に於ては大に寛和せられたるが如きも、尙ほ宗教其物の性質に

は當然伴ふべきものなり。蓋し宗教上の信者は概して自己の有する其信念に依る外、人類救済の途なしと思ふの傾向強し。故に己れと同じ信念を有せざるもの、危害を感ずること頗る切實なり。彼等は異教徒が自己の宗教と異なる方法によつて救済せられ得べしといふが如き觀念を容るるの餘地少なし。之れに反して徳行家は概して自家を完全にするとする方面に重きを置き、他に對しては動もすれば冷淡なる態度を採らんとする傾あり。殊に近代に至りて學者は、世人知識の程度の異なり、趣味の異なるに従ひ種々なる思想を有すべきものなることを認め、各人は夫れ夫れ其思想に基ける信念を有するを得べしとするが故に自己と同じ信念を有せざればとて其の人の危害を感ずる事宗教家の如く激烈ならず。尙ほ宗教の方面より觀れば如何なる人類にも同一の價格同一の靈性を認めざるを得ざるが故に、あらゆる個人は救済せられざるべからずとの觀念を生ずるも倫理の方面より觀れば個人以外に團體の價值を認め、必要なる場合には團體の爲めに個人を犠牲とすべきことを認むるが故に、其個人に對する觀念

は宗教家の夫れに比して自づから差異なきを得ず、此等の關係も亦宗教家と倫理學者との態度の相違を來せる理由の一ならずんばならず。然かも吾人は研究的態度にある倫理學者と雖も自己の信念の價值を疑ふものなりといふにあらず。理想としては倫理學者も亦自家の信念確立したる上は此れを社會人類に鼓吹すること宗教家の如くなるべきは勿論なるも、彼等の研究的態度は時々其の思想を變ずることあるが故に、容易に彼等をして斯る自信を有せしむる能はざるなり。宗教家の運動に對し今日の倫理學者が寄らず觸らずの態度を採れるも之れが爲めなるべし、余一人に就て云へば、余は倫理學者を以て任ずるものならざるも余の信念は未だ之れを以て他の信念を破ぶるに足れりとの自信を有せず、况んや余は真理は必らずしも唯一ならず種々のもの合して始めて完成すべしとの信念を有するが故に、假令ひ或る宗教上の信念が吾人の思想と相容れざるが如く見ゆることあるも或る人の思ふ如く直ちに之れを人類より排除すべきものなりとは考ふる能はず、要するに學者として廣く信念に對し如何の態